
久留井三兄弟の非現実的な日常

高平しま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

久留井三兄弟の非現実的な日常

【Nコード】

N0556U

【作者名】

高平しま

【あらすじ】

飛鳥川琉奈は幼い頃から、突然見ず知らずの空間に意識を飛ばされるという不思議な現象に悩まされていた。原因も解決方法も分からぬまま年月は過ぎ、高校へ進学して2年目のある日、クラスに転校生がやってくる。久留井祥吾という名の端整な転校生には、同じく美形の兄と弟がいる。不思議な能力を有する彼らとの出会いが琉奈を変えていく。

転校生

1 - 1

あつと思つた時にはもう遅い。

全身を襲う、沼の中へと沈んでいくような感覚。そして、眼前に現れる古びたアパートの一室。

脚をガムテープで補強したちゃぶ台。

皺だらけの敷布団。

ひび割れた羽で風を送り出す扇風機。

そこら中に散乱しているビール瓶。

喧しく鳴き続ける蝉。

そこまで知覚したところで突然、今度は海底から急浮上するような感覚がやってくる。すると、周囲の風景は元に戻る。

「アスカ！」

そう呼ばれ、飛鳥川^{あすかがわるな}琉奈は我に返る。

アスカ、とあだ名で琉奈を呼んだのは、隣に立っている友人の松^{まつ}
下綾^{したあや}だ。

「またいつもの？」

「うん。でももう大丈夫」

綾に声を掛けられたのをきっかけに、次第に周囲の雑音も琉奈の耳に入ってくる。

廊下を行き交う、同じ制服を着た多くの男女がおはよう、と挨拶を交わす声。

数人の女子グループが次の定期試験の範囲の広さを嘆く声。
すれ違った女子生徒を見た男子生徒たちが何やら小声で話し合う

声。

普段と変わらない日常。現実に戻ったことを実感する。

「やっぱり。急に立ち止まってぼんやりし始めたから、またかなって」

「そっか……。ごめんね」

琉奈が手を合わせて謝ると、綾は心配そうに琉奈を見つめた。

飛鳥川琉奈は幼少の頃から、先程のような不思議な現象に繰り返して遭遇している。

その現象に襲われている最中、琉奈は綾曰く、「魂が抜けたようにぼんやりしちゃう」のだが、現象は時間も場所も構わず、いつも突然やってくる。

今まではそれが原因で怪我をした、ということは幸いにもなかったが、今後この現象が原因で大きな怪我をしたり、事故に遭う可能性もなくはない。

過去に様々な病院を訪ね、この現象の原因は何か、遭わないためにはどうすればいいのか医師に相談してきた。

しかし、どの医師もこの現象の原因も、治療方法も分からなかった。

拳句の果てに、霊能者に悪霊が憑いてと言われ、お払いまで受けたが全く効果はなく、相変わらず不思議な現象に悩まされる日々を送っている。

「あつ、もうこんな時間！ 早く教室に行かないとホームルーム始まっちゃうよ、綾！」

「ホントだ！ 急ごー！」

琉奈は綾を急かし、足早に自分たちの教室へ向かう。

「そっいえばさ、知ってる？」

「何が？」

「今日うちのクラスに転校生が来るらしいよ。しかも男子！」

「へえ」。さすが新聞部員、情報が早いね」

「しかも、それだけじゃないんだよね……」

「？　どういうこと？」

琉奈がそう尋ねると、綾はにやりと不敵な笑みを浮かべる。

「その転校生には三年の兄と中三の弟がいて、その二人もうちの学校に転校してくるんだけど……三人とも超絶イケメンらしいよ！」

「超絶イケメンねえ……」

目を爛々と輝かせながら、宝物の隠し場所でも告げるような口吻で話す綾。

対して琉奈は興味なさ気に綾の言葉を反芻する。

「あ、琉奈には秋川がいるから興味ないか」

「だからあいつはただの幼馴染だってば。ていうか、綾こそ桜井先輩がいるじゃん」

「彼氏がいても、イケメンにはときめいちゃうもののなの」

遠くを見つめながら、うつとりとした様子で語る綾。

琉奈は「そんなもんかなあ」と腑に落ちない様子で首を傾げた。

ホームルームの開始を告げるチャイムが鳴るのと同時に二年A組の教室に飛び込んだ飛鳥川琉奈と松下綾の二人だったが、担任教師の姿はまだなく、クラスメイトの大半が自分の席から離れ、友人との雑談を続けていた。

「焦って損したね、綾」

「ホント……。軽く汗までかいたのに」

やや疲れた表情で言い交わす琉奈と綾の元に、一人の男子生徒が駆け寄ってくる。

「おはよ、アスカ、綾。二人とも遅刻かと思ったよ」

「おはよ、秋川。先生まだ来てないんだ？」

綾からの問いかけに「ああ、まだだよ」と答えたのは、二人のク

ラスメイトであり、琉奈の幼馴染でもある秋川浩太だ。あきかわこうた

「珍しいよな、沢木がホームルームに遅れてくるなんてさ。何かあったのかな？」

「きつと転校生を連れてくるからだね」

顎に手を当て、綾が探偵ぶった口調で言う。

「転校生？」

「あ、浩太も知らなかったんだ。今日、うちのクラスに転校生が来るんだって」

「マジで？ 男？ 女？」

「男！ しかもイケメン！」

声のトーンとテンションを上げ、答える綾。

「イケメン……！？ アスカも気になってたり……？」

「あたしは別に。どんな人がクラスメイトに加わるかって意味では気になるけど、イケメン云々は特に。それがどうかした？」

「う、ううん、別に……」

琉奈の答えに浩太はあからさまにホツとした表情を浮かべる。

そんな二人の様子を見ていた綾は小さなため息をつき、相変わらず報われないなあ、と独りごちた。

「はぁーい、全員席ついて！」

二年A組の女性教師がウェーブのかかったロングヘアを靡かせながら入ってくるなり、クラス中に響き渡る大声でそう言った。

琉奈たちを含め、生徒たちは慌てて自分の席へと走る。

「あれ？」

琉奈は自分の席 窓から二列目の一番後ろの席に到着したところで、窓際の列の一番後ろに、つまりは自分の隣に新しい机と椅子が用意されていることに気づいた。

「転校生、琉奈の隣に来るんじゃない？」

琉奈の前の席に座った綾が嬉しそうに言う。

一方、琉奈は「かもね」と適当に流しつつ、席が増えたせいで隣

の列は狭そうだな、などと全く関係のないことを内心呟いた。

「にしてもさ、沢木ってやっぱり教師のビジュアルじゃないよね」

「だね。キャバクラの方がしっくりきそうだよな」

生徒全員が着席するのを教壇で待っている担任教師を見ながら呟いた琉奈の言葉に綾が同意する。

二人の担任教師の沢木はふくよかな胸を持つ艶っぽい女性である。その容姿と、英語を教えていることから、彼女は陰で生徒たちからグラマーとあだ名されている。

「静かに！ 知ってる人もいるかもしれないけど、今日からクラスメイトが一人増えます」

沢木の言葉に教室中が沸き立つ。「だから静かに！」と手を叩きながら沢木が呼びかける。

「今からみんなに紹介するから。……女子は心しときなさい」

沢木の一言で興奮した女子の歓声と男子生徒の落胆の声が入り混じる中、沢木が「入って！」とドアに向かって呼びかける。

やがてドアが開き、その向こうから一人の男子生徒が教室に足を踏み入れる。

「！！！！」

鼻筋の通った端整な顔立ちの美少年の姿に、一瞬の間後、教室中から黄色い声が一気にあがる。転校生はその光景に目を丸くしつつ、沢木の隣に立った。

「ちよっと、めっちゃカッコよくない！？ アイドルか何かかな！？」

綾が興奮気味に言う。琉奈も茫然と転校生を見つめながら、「おつきい目……吸い込まれそうだね」と答える。

クラス中の視線を独占している転校生は、沢木から白のチョークを受け取り、黒板に字を綴っていく。

彼の手からチョークが離れた時、黒板にはバランスのいい字で「久留井 祥吾」と書かれていた。

「初めまして、久留井祥吾です。よろしくお願いします」

正面に向き直り、転校生　久留井祥吾がハスキーな声でそう自己紹介した後、ペこりとお辞儀をする。

女子生徒からは熱烈な、男子生徒からは簡単な拍手が送られる。
「みんな仲良くしてあげてね。じゃあ、久留井くんはあの一番後ろの席に座って」

そう言っつて沢木が指示した席は綾の予想通り、琉奈の隣の席だった。

クラスの女子の大半が目の中にハートマークを浮かべて見つめる中、祥吾は指定された席につく。

彼は隣に座る琉奈に目を向け、

「よろしくね」

と声をかけた。

「こっちこそ。何か分からないことあったら何でも訊いてね」

「ありがと、助かるよ」

柔和な笑顔でそう答えた祥吾は黒板の方へ視線を戻し、鞆の中身を机の中に詰めていく。

その様子さえ爽やかに見えた琉奈は、オートでキラキラする人っているんだなあと内心独りごちた。

授業の合間の休み時間。

琉奈は毎回自分の席から退避し、廊下側の列にある秋川浩太の席で彼と共に過ごすはめになっていた。

普段は琉奈の席に綾と浩太が集まり、三人で談笑して過ごしているのだが、今日は休み時間の度にクラスの女子たちが久留井祥吾のところへ、砂糖へ群がる蟻のごとく押し寄せるので、彼の周りに黒山の人だかりができ、隣に位置する琉奈の席は休み時間の度に山に埋もれてしまう。

そのため、琉奈は自分の席で平穏な休み時間が過ごせない状態が

続いている。

「とてもじゃないけど休めないよ、あんな中じゃ……」

琉奈がため息混じりにそう零す。

「アス力は気にならないの、転校生のこと？　松下だってあいつのところにいるのに」

そう言つて浩太が指差す先にいるのは、他の女子たちと共に祥吾に話しかけている綾の姿だ。

「綾は面食いだもん。それに、あたし以外にも久留井くんのところに行つてない女子いるじゃん」

言いながら琉奈が教室中に視線を巡らせる。

確かに休み時間中の教室には、自分の席で次の授業の予習をしていたり、読書をしていたり、机に突つ伏して寝ている女子もいる。

が、それはあくまでも数人で、女子の大半は久留井祥吾の席に押しかけている。中には何人が琉奈が見たことない顔もある。他のクラスから来ている女子もいるようだ。

「アス力はあいつと何か話したりした？」

「そんなには。教科書のページ数教えたりする程度だよ。休み時間になった途端にみんな寄ってくるし」

「そつか……。アス力は他の女子と違うんだな！」

「違うのかな？　でも、カッコイイとは思つよ、もちろん」

「え！？」

驚愕する浩太を見て、琉奈は「そんなに驚かなくても」と苦笑する。

「ていうか、誰が見てもカッコイイって思ふんじゃない？　浩太もカッコイイって思ふでしょ？」

「うん。……っ！　ううん、別に思わないし！」

一旦は琉奈の意見に同意したものの、すぐに大げさに手と首を振つて否定する浩太。

と、次の授業の開始を知らせるチャイムがスピーカーを通じて教室に響き渡る。

琉奈は浩太に向かって小さく手を振り、彼の元を後にした。

「ごめんね」

自分の席に戻った琉奈に、久留井祥吾がそう声をかける。

「え？ 何が？」

「休み時間の時、人が集まってきたって……」

「ううん、気にしないで。大変だね、モチちゃうと」

「もて……。今だけだよ。転校生だから興味があるってだけで」

「そうかなあ？」

そんなことないと思うけど、と琉奈が胸中で呟いたところで生物担当の老教師が入ってきたので、二人の会話はそこで途切れた。

転校生（後書き）

初投稿です。 よろしくお願いいたします。

乱入者

1 - 2

授業終了のチャイムが鳴る。

昼休みに入った教室が一気にざわつく。

飛鳥川琉奈は鞆から弁当箱と水筒を取り出すと、また女子の集団に巻き込まれる前にそそくさと自分の席を後にする。

「アスカ！ 待ってよ！」

松下綾の声が琉奈の背中にぶつかる。

「早いよ、アスカ……」

「だって、あの集団に巻き込まれたら大変だし。ていうか、綾こそ久留井くんのところに行かなくていいの？ あたしなんかでいいの？」

「いつも一緒にお昼食べてる仲じゃん！ なに、拗ねてるの？ あたしがいなくて寂しかった？」

「うーん、そんなこともなかったかな」

「ええ〜！？ そんな悲しいこと言わないでよう」

「嘘。めっちゃめっちゃ寂しかった」

「仕方ないなあ、そんな君の側にいてあげよう！」

芝居じみた口調で綾が言う。

思わず笑ってしまった琉奈につられ、綾も笑ってしまう。

二人はそれぞれの弁当箱と水筒を片手に教室を出た。

琉奈と綾がやってきたのは屋上。

二人は転校が悪いとき以外はいつも、屋上を囲うフェンスに沿っていくつか設置されているベンチで昼食を楽しんでいる。

今日の天気は快晴。降水確率も0パーセントと、外で食べるには絶好の空模様だ。

二人が今日座ったのは、屋上の出入り口の正面に位置するベンチだ。

腰を下ろすなり、早速胸を躍らせながら弁当箱の蓋を開ける。

「綾のお弁当っていつも彩りいいよね」

「ほとんど冷凍食品だと思うけど……。アスカは今日はサンドウィッチなんだ！ 美味しそう……」

「綾のお弁当のミートボールとどれか交換してあげよっか？」

「ホント!？」

「あ、でも卵焼きが挟んであるのはダメだからね？」

「はいはい。相変わらずの卵好きだね」

他愛のない会話を交わす琉奈と綾。

しかし、二人の平穩は突然の訪問者によって破られることとなる。

自分の昼食に手をつけ始める二人。

口にした昼食に舌鼓を打っていたら、正面に見えるドアが突然、勢いよく開かれ、中から一人の男子生徒が息を切らせて入ってきた。一体何かと呆然として彼を見つめる琉奈と綾、そして屋上にいるその他の生徒たち。

と、彼の目が琉奈たちを捉えると、一直線に二人の方へ駆け寄ってきた。

「綾、知り合い？」

「全っ然。アスカの知り合いじゃないの!？」

「あたしも知らないよ!」

困惑する二人をよそに、彼はどんどん近づいてくる。

そして、とうとう二人の目の前までやって来た男子生徒は、

「ごめんね！ ちょっと後ろに隠れさせて!」

と言うや否や、二人が座るベンチの裏に入り込んだ。

訳が分からない琉奈と綾はそのままに、男子生徒は体を小さく屈め、背もたれからひょっこり顔を出して周囲の様子を伺う。

すると、再びドアが物凄い勢いで開け放たれ、今度は数人の女子

生徒が現れた。

彼女たちは屋上中をきよろきよろと見回し、どこに行ったのかしら、などと口々に言い合いつつ、ドアの向こうへと戻っていった。

「ごめんね、急に邪魔しちゃって……。びっくりしたよね」

屋上に静けさが戻るなり立ち上がった男子生徒が、琉奈と綾にそう謝った。

「いえ、大丈夫で……す……」

振り返り、駆け込んできた男子生徒を見上げ、改めて彼の顔を見た二人は固まってしまった。

端整かつ精悍な顔立ち。切れ長で凜とした眼が印象的なその顔を見て、俳優か何かだろうかと琉奈は思った。

「……俺の顔、何か付いてる？」

「！ い、いえ、何も……」

答えながら、琉奈は隣の綾に目を遣る。

琉奈の予想通り、綾は久留井祥吾を初めて見た時と同じ目で彼を見つめていた。

「今日は朝からずっとあんな感じでさあ……。昼食は弟たちと食べるって約束してっからっつても全然聞いてくれないし。この学校の女子って男子に飢えてんの？」

頭をばりばりと掻きながら、屈託のない口調で話す男子生徒。

琉奈は苦笑しながら、「共学ですから、そんなこともないと思いますけど」と答えた。

「つと、早く行かないと昼休み終わっちゃう！ ……あのさ、食堂ってどこにあんの？」

「食堂なら一階ですよ。中等部との境にあります。……最近転校してきた、とかですか？」

「最近っていうか、今日ね。俺は三のBの久留井誠一くわいせいごいち。よろしくね」

「久留井……ってもしかして」

「久留井祥吾くんのお兄さんですか！？」

琉奈の言葉を遮り、綾が大声で尋ねる。

あまりに大きな声に男子生徒　久留井誠一は一瞬目を見張るが、すぐに明るい笑顔を浮かべ、

「君たち、祥ちゃんと同じクラスの子なの？」

と尋ね返してきた。

「はい。あたしは飛鳥川琉奈です」

「松下綾ですっ！」

「琉奈ちゃんに綾ちゃんか。よろしくね！　二人とも、祥ちゃんと仲良くしてあげてね」

そう言って笑いかけてくる誠一。綾は頬を紅潮させ、しゃちほこ張りながら「もちろんです！」と答える。

「ホントにありがとね！　じゃっ！」

二人に向かつて手を振りながら屋上から去っていく誠一。

琉奈と綾もそれに応えながら彼を見送る。

「なんか……嵐のような人だったね。突然現れたと思ったら、颯爽と去ってっ」

「うん。でも太陽みたいな笑顔がすごく素敵だったなあ……」

綾はそう言いながら、未だに誠一が出て行ったドアをぼんやり見つめている。

「にしてもさ、久留井くんってお兄さんとあんまり似てない気がする？　どっちもイケメンには違いないけど」

琉奈の言葉に、「言われてみれば」と綾も思案顔で頷いた。

ぱっちりとした目をしている弟の祥吾に対して、兄である誠一は切れ長の目をしている。それだけの差でも受ける印象がだいぶ違った。

「それとさ、久留井くんの唇ってちょっと厚めなんだけど、お兄さんはちよつと薄めだったよね」

「父親似か母親似ってことかな？」

「こうなると、もう一人の弟はどうなのかって気になるよね！」

おもちゃを見つけた子供のような顔で綾が言う。

綾の情報では、二人の兄と共に転校してきた三男は中学三年生で、同じ学校の中等部にいるという。

「……食堂に行ってみようって言うなら、あたしは行かないよ」

「！それは……」

琉奈にあっさりと先手を打たれ、綾は次に言おうとした言葉を失って口ごもる。

「久留井くんもお兄さんも、女子に囲まれたり追いかけられたりで大変そうじゃん。もしかしたら中三の弟くんも同じ状態かもしれないし。お昼くらい、せめてあたしたちは邪魔しないであげようよ」

ね？ と同意を求める琉奈に、綾も「そうだね」と頷いた。

「あーあ。大人だなあ、アスカ。それともイケメンに興味ナシ？」

「全くないってわけじゃないけど、みんなほどじゃないのかな」

「ふうん……そういうもんか」

「飛鳥川さん！ 松下さん！」

屋上での昼食を終え、昼休み終了のチャイムが鳴る前に教室へ戻ろうと廊下を歩く琉奈と綾を呼び止める声が、後ろから飛んできた。二人が振り返ると、そこには久留井祥吾がいた。

「久留井くん！ どうしたの？」

琉奈がそう問いかける。

「さっきは兄貴がお世話になったみたいで……ありがとうね」

「お世話って……そんな大したことしてないよ。ね、綾？」

「そうそう。特に何かしたって訳じゃないし。久留井くん、お兄さんたちと食堂で食べれたんだ？」

「昨日から約束しててさ。大きな食堂だからびっくりしたよ！ で、食べてる最中に兄貴から二人の話を聞いて。兄貴も助かったって感謝してたよ」

にこにこ笑みを浮かべながら話す祥吾。

彼の話聞きながら、琉奈は女子たちに囲まれているときとは違う、自然な彼の笑顔を始めて見たなあ、とふと思った。

「あ、お弁当……」

綾が祥吾の手にある弁当箱に目を留め、呟く。

「そうだけど……どうかした？」

「何って訳じゃないんだけど、うちの学校の男子って学食のパンとかで済ます人が多いから」

不思議そうに尋ねる祥吾に綾が説明する。

「そうなんだ。最初で勝手も分からないかなって思ってたんだけど」

「……作ってきた？」

琉奈が祥吾の言葉を反芻する。

祥吾は慌てた様子で、

「あつ、いや、母がね！ 朝作ってくれて！」

と弁明するが、嘘で言い繕っているのは誰の目から見ても丸分かりだった。

「すごい！ 久留井くん、料理できるんだ！」

胸の前で両手を組み、目を輝かせながら綾が言う。

言い開きを諦めた祥吾は照れくさそうに笑う。

「前に女々しい趣味だって言われたことがあって……。でも、美味しいものを作るのは好きだし、それを誰かが食べて、笑顔になってくれるのを見るのも好きだから。俺の場合は主に兄弟なんだけど」

「じゃあ、今日は兄弟の分も作ったの？」

琉奈が尋ねると、祥吾は「大したものじゃないけど」と答える。

「すごいっ！ こんなにカッコ良くて、しかも料理までできちゃうなんて！ ますます女子にモテちゃうね！」

小さく拍手をしながら嬉々として話す綾。

「……そう、かな。なら嬉しいけどね」

嘘っぽい。すごく。

琉奈は内心呟いた。

嬉しい、と答えた祥吾だが、琉奈にはその言葉が先ほどまでとは違い、ひどく空虚に聞こえた。

「あ、ケイタイ鳴ってる」

急にそう零した綾は制服のポケットから携帯電話を引っ張り出す。そして、二つ折りの携帯電話を開き、着信相手を確認するなり、「ごめん！ 桜井先輩に呼ばれたから、ちよつと行つてくんね！」と言つて足早に立ち去つてしまった。

「あたしたちも教室に戻る？」

「……もし迷惑じゃなければ、もう少し一緒に話してられないかな？ 席に戻ると……その、また囲まれそうだし」

「久留井くんって女子が苦手とか？」

申し訳なさそうに雑談の相手を懇願する祥吾に、琉奈は素朴な疑問を口にする。

「そういうわけじゃないけど……ああやって大人数に囲まれるのはちよつと。まして、前の学校は男子校だったし、兄弟だつて男しかないし」

「そういえば、お兄さんつてすごく明るい人なんだね」

兄弟、という単語から祥吾の兄である久留井誠一の人懐っこい笑顔を思い出し、琉奈が言う。

「久留井くんもだけど、お兄さんも有り得ないレベルでカッコイイから、初め緊張しちゃったけど、すごく接しやすいっていうか、人当たりがいいっていうか」

琉奈の感想に、祥吾は恥ずかしそうな笑みを浮かべる。

「馴れ馴れしかったんじゃない？ ごめんね、悪い人じゃないんだけど」

「ううん。話しててこっちまで楽しくなっちゃった。弟さんもあんな感じなの？」

「弟は……あ、彰つて言うんだけど。そうだなあ……掴みどころがないっていうか。あいつを一言で表すのは難しいな。まあ、機会があれば紹介するね。飛鳥川さんはお兄さんとかいるの？」

祥吾の問いかけに、琉奈は少し考えてから首を横に振る。

「あたしは一人っ子。だから、久留井くんみたいな兄弟がいるの、羨ましいな」

「そうかな？ 兄弟いると大変だよ。夕飯の時はしょっちゅうおかずの争奪戦が起きるし、それが終わると今度はテレビのリモコン争奪戦！ 毎日大変なんだから！」

愚痴を言いながらも笑顔を絶やさない祥吾を見つめる琉奈。

その顔には微笑みが浮かんでいるが、その瞳の奥に深い悲しみを湛えている。

しかし、話に夢中の祥吾はそのことに全く気づいていない。

二人の会話は午後の授業開始を告げるチャイムが鳴るまで続いた。

苦悩者

1 - 3

「昼休み、あいつと何話してた？」

放課後。

机を移動させた後の教室を箒で掃いていた琉奈に、雑巾を手にしている秋川浩太がおずおずと尋ねる。

ちなみに浩太は昼食をいつもバスケット部の仲間ととっていて、琉奈と綾とは一緒にいなかった。

「あいつって……久留井くん？ 別に大した話はしてないよ」

答えながら、琉奈は教室近くの廊下で、相変わらずミーハーな女子たちに囲まれている久留井祥吾に目を遣る。

祥吾は女子たちに笑顔で対応しているものの、昼休みに見せていたそれより硬そうに琉奈には思えた。

「どんな話した？」

「ホントに普通の雑談だつてば。久留井くんの兄弟の話とか、料理が得意だとか。そんな話だよ」

「料理……。アス力は料理ができる奴が好き？」

「料理ができるから好きってことにはならないけど。でも、できないよりはできる方がいいかなとは思っけど」

「！ そうなのか……料理……」

「……………」

急に深刻な表情で俯き、何やらぶつぶつと呟く浩太。浩太を不思議そうに見つめる琉奈。

そんな二人の肩を、鞆片手の松下綾が立て続けにポン、叩く。

「今は掃除の時間だよ、お二人さん！ いちやつくのは掃除が終わってから、ごゆっくり」

軽快なテンポでからかいの言葉を並べる綾。

真に受けて顔を赤くする浩太に対し、琉奈は呆れた表情でため息をついた。

「だーから、そういうんじゃないって何度も言ってるでしょーに。浩太が久留井くんと何話してたんだってしつこいから、内容を少し話しただけ」

琉奈に自分との恋愛関係を完全否定され、浩太が激しく落ち込む姿を綾の視界が捉える。しかし、その姿は琉奈の目には映ってないようだ。

こういった光景に何度も出くわしているが、それでもめげない浩太に綾は最近、尊敬の念すら覚えている。

ある意味、未だに浩太の想いに気付かない琉奈の鈍感さにも。

「あたしは今週掃除当番じゃないから、部活に行くね。じゃ、掃除頑張つて。……あ、そうそう」

綾は手招きをして琉奈を呼び、彼女の耳元に唇を寄せ、

「昼休みの後、江田さんがアスカのことすごく睨んでたよ」と耳打ちした。

琉奈は眉を顰め、祥吾を取り囲んでいる一団の中心にいるクラスメイトの女子を見つめた。

飛鳥川琉奈は久留井祥吾に一つ、嘘をついた。

どうして嘘をついてしまったのか。

その理由は琉奈本人にも分からない。

嘘をつく必要なんてなかった。

けれど、楽しみに話す祥吾の姿を見て、琉奈は本当のことを話したくなくなった。

夕食。家族揃って食卓を囲む。

琉奈の向かいに座るのは、いつも穏やかな父。いつも優しい母。

そして隣には、琉奈の前ではいつも不機嫌な兄。

「ごちそーさん」

兄はさっさと夕食を済ませ、琉奈が視界に入らない位置にあるソファに座る。

側に琉奈がいることも、姿が見えることさえも腹立たしいようだ。

「今日は学校どうだったの？」

琉奈を気遣ってか、母が彼女に尋ねる。

「今日はクラスに転校生が来たよ。すごいイケメンで、クラスの女子の人気独占状態なの」

「そんなにカッコイイのか。お向かいの浩太くんよりもか？」

「ちよつと、お父さんまですぐ浩太を引き合いに出すし。あいつは」

ただの幼馴染なの、という言葉次ぎとしたが、突然テレビの音量が急激に大きくなり、親子三人の会話はアナウンサーにかき消された。

「……おなかいっぱいになっちゃった。ごちそうさま」

琉奈は箸を置き、静かに席をたつ。

そして、一切自分と視線を合わせようとしない兄の背を一瞥し、二階にある自室へと急いだ。

物心付いた時にはすでに兄の対応は冷たかった。

父と母と話したりする時は普通なのに、琉奈の姿を目にした途端、兄の眼には一瞬のうちにあらゆる負の感情が宿る。

何故兄は自分に冷たいのか。

かつて琉奈が理由を尋ねた時、兄はこう答えた。

存在自体がム力つくから。

じゃあどうすればいいのかと訊くと、兄はこう答えた。

死ね。

事実、兄は自ら手をかけることはしないものの、海で琉奈が溺れてても無視したし、家の階段で誤って転んで頭を強打し、意識が朦

朧としている琉奈を放ってテレビドラマを観ていた。

兄は琉奈という存在が消滅することを願っている。

兄は大学進学を機に家を出ようと考えていたが、志望校にことごとく落ち、結局近所にある無名の私立大学に通っている。

不合格通知を見る毎にどんどん落ち込んでいく兄の姿を見て、琉奈はとても気分が良かった。

両親は兄の態度や仕打ちについて怒ることはない。

両親は兄に対して、何か後ろめたいことがあるだろうか。

そう思うものの、実際に訊いたことはない。

気にはなるが、訊いてしまったら両親との関係まで壊れてしまいそうな気がした。

一つ、嘘をついた。

けれど、他は全て嘘じゃなかった。

「……久留井くんみたいな兄弟がいるの、羨ましいな」

ドアを閉めた自分の部屋で、昼休みに久留井祥吾に言った言葉を繰り返す。

久留井くんみたいな“仲のいい”兄弟がいるの、羨ましいな。

苦悩者（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

三人目

1 - 4

「アスカ……おはよ……」

翌日。

登下校に使っている自転車を駐輪スペースに置き、鍵を掛けていた飛鳥川琉奈の背中に、元氣のない声がかけられた。

琉奈は振り返り、声の主の姿を見て絶句した。

そこにいるのは、生気をすっかり失い、目の下ははっきりとした隈まで作っている松下綾だった。

「ど……どうしたの、綾!？」

「後で説明するよ……。一緒に教室行こ」

「う、うん……」

琉奈は負のオーラを漂わせている綾と共に、自転車の籠に入れていた鞆を肩に掛け、校舎へと歩を進める。

昇降口へ向かう途中、突然二人の鼓膜を劈かんばかりの歓声が下駄箱の方から聞こえてきた。

「な、何!？」

「特ダネの匂いがする! 行ってみよ、アスカ!」

先ほどまで、世界中の不幸を背負ったかのような顔をしていたのが嘘のように元氣を取り戻し、テンションのギアを一気にトップに入れた綾に引きずられ、琉奈も歓声の中心へと向かう。

「……あつ、アスカ! 見てみ!」

「わっ……!」

足を止め、何かに見惚れている女子の波を掻き分けた先にいたのは、靴から上履きに履き替え、廊下を歩く三人の男子生徒たち。

そのうち二人の顔に、琉奈も綾も見覚えがあった。

「あ、琉奈ちゃん、綾ちゃん。おはよ!」

三人のうちの一人が琉奈と綾に気づき、暢気に手を振ってきた。
周囲の視線が一気に琉奈と綾に集中する。

二人はいたたまれず、とりあえず声をかけてきた男子生徒　久留井誠一に小さく手を振り返す。

誠一の隣に佇む男子生徒　弟の久留井祥吾は手を額に当て、呆れ果てた様子で頭を振る。

「？　どうしたの？　元氣ないよ、二人とも。特に綾ちゃんは隈すこいし」

周囲の様子が目に入っていないらしい誠一は二人の下へ歩み寄り、心配そうに尋ねる。

「大丈夫です、ちょっと寝不足なだけで……」

「だめだよ、ちゃんと寝ないと！　女の子はいつも元氣じゃないと！」

にこりと優しげに微笑む誠一。それを見た綾は　何故か周りの女子まで　頬を朱色に染める。

「おはよ、飛鳥川さん」

綾と誠一のやりとりをぼんやり見ていた琉奈に祥吾が声をかける。

「おはよう、久留井くん」

「ごめんね。うちの兄貴、考えるよりまず行動しちゃうタイプでさ

……」

「うつん、大丈夫。……後ろにいるのは弟くん？　名前は確か……」

「彰だよ。彰、こっちおいで」

祥吾に呼ばれ、中等部の制服に身を包んでいる男子生徒が琉奈の前にやってきた。

垂れ目が印象的な、彰と呼ばれた男子生徒は二人の兄同様顔立ちが整っているのだが、彼は特に、神の手で造形されたかのような美しさを持った顔立ちをしている。また、兄たちよりも長身で、手足も長い。

彰を茫然と見つめるクラスメイトを、祥吾が弟に紹介する。

「彰。彼女は俺と同じクラスの飛鳥川琉奈さん」

「は……初めまして。飛鳥川琉奈です」

「……ども。久留井彰くわいあきらです。名前は母親が付けましたが、由来は分かりません」

低く小さな声で久留井彰が言う。

俯きがちの顔に表情はない。何か気に障ることを言ってしまったのかと琉奈は心配になった。

「気にしないでね。こいつ、すんごく人見知りなだけだから」

琉奈の心に不安が渦巻いたことを察したらしい祥吾がそう言うてフォローする。

「じゃあ、また後でね」

祥吾はそう告げ、周りの女子とあれこれ話している誠一と自分の名前についてぼそぼそと何かを呟いている彰を連れ、その場を後にした。

「なんか……一人ずつでも十分目立つのに、三人揃うとすごいね。ただの廊下もレッドカーペットに見えるっていうか。……綾、聞いている？」

「え？ あ、ごめん。聞いている聞いてる」

廊下の向こうに消えていく三人をぼーっと見ていた綾が琉奈の声で我に返る。

絶対聞いてなかったでしょ、と琉奈は綾を小突く。

「久留井くんの弟、すんごい美形だったね」

「え？ そうなの！？ 全然見てなかった」

綾の返答に琉奈は「へ！？」と素っ頓狂な声を上げる。

「イケメンリーダー持つてる綾にしては珍しいね」

「誠一先輩の話が面白くて。そっちほとんど見てなかったよ」

「そっか。ってか、誠一先輩って……」

「あ、話の途中でね。先輩、あたしらのこと名前で呼んでるでしょ？だから、自分のことも名前でいいよって。さすがに先輩をくん付けで呼べないから、名前プラス先輩ってことに落ち着いたの」

「なるほどね。そういえば、初めて会った時から名前で呼ばれてた

っけ」

綾に指摘され、琉奈は自分が誠一に名前で呼ばれていることを初めて自覚する。

それくらい、彼に名前で呼ばれることに違和感を覚えなかった。

まして琉奈は親しい友人である綾にすら、名前ではなく苗字から来るあだ名に呼ばせているのに。

「先輩は誰に対しても気さくに名前で呼んだりしてそうだよね」

「だね。ああいうことを自然にできる誠一先輩ってすごいなあ……」

ぼんやりと遠くを見つめる綾の瞳には、大きなハートマークが浮かんでいる。

それを見た琉奈は、また始まった……とぼやいた。

三時間目。体育。

今日はバスケットボールの授業。

男子と女子に分かれ、それぞれ5〜6人のチームを作り、短時間の試合を行う。

琉奈と綾は三人組の女子グループと組むことになった。

数分の練習時間の後、体育教師が作った対戦表にしたがって試合を進めていく。

「うちらがBチームで、対戦はAチーム……江田さんたちのトコだね」

貼り出されている対戦表を見た綾が言う。

対戦相手のチームは、どんな時も同じメンバーで一緒にいる、典型的な女子グループだ。

特に久留井祥吾に付きまとっているそのグループの中心人物が江田留菜である。

一年生の時は彼女と別のクラスだったが、彼女とその友人がクラスメイトの女子をいじめ、転校にまで追いやったという噂は知って

いた。

琉奈も綾も正直あまり関わりたくない人物である。

そして、琉奈が他人に自分のことを「アスカ」と呼ばせている理由も彼女にある。

同じ「ルナ」の音の名前を持つ者として、一緒にされたくないのだ。

だから彼女は親しい人には名前の琉奈ではなく、苗字の頭三文字のアスカ、と呼んでもらうことにしている。

とはいえ、久留井誠一には先に名前で呼ばれてしまったが。

「おい、女子と男子のそれぞれAとB、試合始めるから集まれー！」

体育担当の男性教師がボールをドリブルさせながら大声で呼びかける。

整列のために慌てて駆け出す琉奈と綾。

ふと視界に入った、男子の試合を行うコートの中に、久留井祥吾の姿があるのが目に留まった。

三人目（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

敵視線

1 - 5

甲高いホイッスルの音が体育館中に響くと同時にバスケットボールが宙に放られ、それぞれのチームの代表がボールに手を伸ばす。弾かれたボールは琉奈のチームメイトの手に渡った。

チームメイトはドリブルをしながら敵陣へとコートを駆けていく。途中、相手チームのディフェンスに進路を阻まれたチームメイトは近くにいた綾にボールをパス。

綾はドリブルしながら更に進んでいく。

「ねえ、飛鳥川さん」

琉奈をマークしている江田留菜が声をかけてくる。

「何？」

「祥吾くんとはどういう関係なの？」

「……はあ？」

「はあ、じゃなくて。ちゃんと答えなさいよ！」

「今そんな話してる場合じゃないでしょ！」

綾の側を駆けていく琉奈。

追い抜きざまにパスされたボールを受け取る。

「人の気も知らないで、抜け駆けなんて信じらんない！」

「ちよっ……意味分かんないんだけど」

江田留菜が投げつけてくる言葉に呆れつつ、琉奈はジャンプシュートを放つ。

放物線を描いたボールはゴールリングにぶつかり、相手チームの手に渡る。

全員、一斉に反対側のゴールへと駆け出す。

「さっきだって祥吾くんのこと見てたじゃない!？」

「一瞬目に入っただけだってば!」

いい加減、他人の被害妄想に構うのも面倒臭くなってきたのか、琉奈はスタミナ無視で走るスピードを上げた。

「！ 待ちなさいよっ！」

慌ててそれを追いかける江田留菜。

彼女の手が琉奈の着ているジャージの裾に掛かった。

「ッ！」

バランスを崩した琉奈の体が一瞬宙を舞う。

次の瞬間、琉奈は派手な音を発てて体育館の床に倒れこんだ。

「アスカ！？ 大丈夫！？」

試合そっちのけで駆けつけた綾に、琉奈は「大丈夫だから」と答える。とはいえ、全身に痛みが走った琉奈の表情は険しく、眉間に皺が寄っている。

「飛鳥川、大丈夫か？」

体育教師もやって来る。

体育館中の視線を浴びた琉奈は恥ずかしそうに立ち上がった。

「すみません。大丈夫です。試合の続き、始めて下さい」

「そうか？ ならいいが。無理はするなよ」

体育教師はそう忠告すると、試合再開のホイッスルを鳴らす。再び走り出した琉奈を江田留菜は無言で見つめていた。

「ひどい女！ 信じらんない！」

試合が終わり、休憩のために空いているスペースに腰を下ろすなり、松下綾が叫んだ。

「ちょっと、綾！ 声が大きいってば」

「ドリブルの音で聞こえないよ！ 見た！？ アスカのことを見つめるあいつの目！ あんたが勝手に転ぶから悪いのよとも言わんばかりでさ！ ああもう思い出ただけでムカつく！！」

「まあまあ、あたしはちょっと擦りむいたくらいだから……」

大声かつ早口で一氣にまくし立てる綾を、転ばされた本人である飛鳥川琉奈が宥める。

もし綾が肉食獣だったら今頃、江田留菜を噛み殺していることだろう。

「ホントに信じらんない！ 何様！？ きつと水道管レベルのぶつとい神経してんだろうね！？」

「水道管って……すごい例えだね」

「いや、もつと太いかも……。水道管より太いのって何だろう？」

「うーん、光通信の海底ケーブルとか？」

「それ何……？」

「アスカ！ さっきは大丈夫だった！？」

会話の方向がずれ始めた琉奈と綾の間に、男子の試合を終えたばかりの秋川浩太が割り込んでくる。

「浩太！ うん、ちよつと擦りむいたくらいでたいしたことはないよ。そっちの試合、どうだった？」

「もちろん勝ったよ。でもさ、あの転校生があんまり使えなくて大変だったよ」

「秋川と同じチームだったんだ？」

「うん。すぐスタミナ切れるもんだから、使いもんにならなくて。それでもギャラリーの女子は、あいつがボールを持つだけでワークヤー言つてさあ」

話しながら、江田留菜を中心とするグループに早速囲まれている久留井祥吾を睨む浩太。

「アイドルが何か食べたり飲んだりするだけで歓声があがると同じだと思うよ。でも、久留井くんにも苦手なことってあるんだ。勉強すぐできるし、短所なんてなさそうだったけどなあ。誠一先輩共々」

「松下、誠一先輩って誰？」

「久留井くんのお兄さん。三年生」

「え！？ 知り合い！？ しかもアスカも！？」

「うん。色々あってね。すごく明るい人なんだよ」

「で、イケメンなんだよね」

琉奈の説明に綾が補足する。その表情は新しいおもちゃを見つけた子供のそれだ。

綾の言葉に「そうそう」と、何の悪気もなく素直に同意する琉奈。浩太の顔はすっかり青ざめている。

「？　どうかしたの、浩太？　顔色良くないよ？」

「いや……何でもないよ。ホントに何でもな」

突然、綾と浩太の声が遠のいていくのを琉奈は感じた。速攻、と叫ぶ声も。ボールをドリブルする音も。外の雀の泣き声も。

体育館中に充満する熱気さえも。

やがて訪れる、全身が沼の中に沈み込んでいく感覚。来た。

またいつものあれだ。

こうなった以上、またあの古びたアパートの一室の情景を目にし、その後自然に戻るまで待つしかない。

そのはずだった。

「飛鳥川さんっ！！」

気が付くと、琉奈の意識は体育館に戻っていた。

……違う。戻ったんじゃない。

琉奈はそう確信した。

戻らされたのだ。

琉奈の腕を強く掴んでいる久留井祥吾によって。

敵視線（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

協力者

1 - 6

「……あれ？ 保健の先生いないや。まあ、その方が好都合だけど」
飛鳥川琉奈は久留井祥吾に連れられ、保健室へとやって来た。
バスケットボールの試合中に転倒したショックで頭がくらくらするみたいなので、などと祥吾が体育教師にぺらぺらと嘘を並べ立て、琉奈を保健室に連れて行く許可を取り付けて、半ば強制的に連行したのだ。

自分と祥吾を見つめる、クラスメイトたちの啞然とした顔が琉奈の脳裏に浮かぶ。

江田留菜の般若のような形相も。

ますます面倒なことになる予感を抱き、嘆息する琉奈。

それに気付いたらしい祥吾が「どうしたの？」と問いかけてくる。
「うっん、何でもない。それより……久留井くんはどうしてあたしをあそこから戻せたの？ ていうか久留井くんはあれが何か知ってるの？ あれって一体何？」

琉奈は質問を一気にぶつける。

いままで散々困らされてきた現象について知っている人間がようやく、初めて現れた。

その嬉しさから、矢継ぎ早に訊かずにはいられなかった。

興奮気味の琉奈に、祥吾は両手の手のひらを向け、「落ち着いて」と宥める。

「どこから説明すればいいのかな……。とりあえず、飛鳥川さんが連れて行かれそうになった場所は、普通の人間が行くべき場所じゃなくて、本来は死んでから行く場所なんだ」

「死んでから……！？ それって天国ってこと？ 見る風景は毎回天国って感じのしないアパートだけど」

「天国とか地獄って言う概念は実際のところ、死後の世界を知らない生者が懲罰や宗教的に利用するために作ったとも言うべきものだからね」

「……んん？」

「要するに、実際は天国も地獄もないってことだよ」

祥吾が説明を簡単にすることで、琉奈の思考を混乱の渦から掬い上げる。

「そうなの！？ 天国ってないの！？」

「ないない。至極真つ当に生きた魂も、殺人を犯した魂も、死後は全て同じ場所に送られるんだよ。とはいえ、そういう犯罪を犯した魂は穢れが溜まって、次第に魂自体のエネルギーが減っていくんだけど。で、最期は転生する力すら失って消滅したり、他の魂のエネルギーにされて消滅ってことになるわけ」

祥吾は教科書を暗証するようにすらすると説明する。

が、それを聞いている琉奈は話の内容をいまいち把握しきれていないらしく、彼女の顔には大きなハテナマークが書いてあった。

「できれば全部きちんと説明したいんだけど、もうすぐ三時間目が終わっちゃうし……。何も予定がないんだったら、今日の放課後にも教室かどこかで話せないかな？」

「予定はないけど……。学校では難しいと思うよ。だって久留井くん、学校じゃ女子に追いかけられっぱなしでしょ？ 落ち着いて話せない可能性がくない？」

琉奈の指摘に祥吾は顔を顰め、「確かに……」と答える。

現に今日も朝からずっと、休み時間の度に女子に囲まれ、追いかけられていた。

校内に落ち着いて話せる場所はなさそうだった。

「俺の代わりに兄貴に説明してもらうつてのは……無理だよなあ、多分」

「お兄さんも知ってるの？」

「うん。でも、向こうも俺と似たような状態っぽいし。彰は話をす

ぐに脱線させそうだし……そうだ！」

祥吾は保健医の机の上にあるボールペンを手に取り、側にあるメモ用紙に何かを書き付ける。

そして、書き終えたメモを琉奈に手渡した。

琉奈は渡されたメモに視線を落とす。

「これ……住所？」

「そう、うちの住所。下校途中に寄ってもらっていい？」

「えっ!？」

「うちでなら落ち着いて話せるでしょ？」

「それはそうかもしれないけど……」

「あ、できれば少し経ってから来てもらえる？　いろいろ準備があるからね」

「えっと……でも……」

「飛鳥川さん」

祥吾が改まって琉奈を呼ぶ。その表情は真面目かつ真剣そのものだ。

「正直、君の状況は樂觀視できるもんじゃないんだ。だから、早めにケリをつけないといけない」

琉奈は余命宣告でもされたような気分だった。

握り締めているメモ用紙が、琉奈の手の中でクシャ、と鳴いた。

昼休み。本日も快晴。綿菓子のような雲が蒼穹をふわふわと漂う。

「え!？　帰りに久留井くんの家に行くことになった!？　何それ

!？　なんでまたそ　もがっ

驚きのあまり大声で叫んだ松下綾の口を、琉奈は全力で塞ぐ。

「ちよつと、声大きいって!」

「ごめんごめん、あまりの超展開にびっくりして……」

「江田一味の誰かに聞かれたらどうすんの!？」

「江田一味って……もはや敵だね。って、そんなことより！　なん
でそんなことになったの!?」

綾は手にしている箸をマイクのようにして琉奈の口元に寄せる。

「あたしの体に起こることについて久留井くんが説明してくれるっ
て言っただけど、学校じゃ落ち着いて話せる場所がないじゃん。で、
それなら久留井くんの家で話そうってことになったの」

「なるほどねえ。確かに久留井くんは四六時中女子に付きまとわれ
ているし、誠一先輩も追いかけてるみたいだし、弟の彰くんも
お兄さんたちと似たような状況って話だしね」

「そうなんだ。……っていうか、その情報はどこから?」

「ふっふっふ。新聞部の情報網を侮るなかれ」

綾は不敵な笑みを浮かべ、ついでにブイサインまで作る。

「でさ……綾も今日は部活パスして一緒に来てくれないかな……?」

「え?　あたしも行っているの!」

予想外の申し出に、綾は目を見張る。

「うん。できれば、だけど。無理だったらいんだけど……」

「それは大丈夫だけど。なんでまた?」

「なんて言うか……クラスメイトの男子の家に一人で行くのがちょ
っと」

「秋川の家は何度も行ったことあるんでしょ?」

「浩太とは昔からお互いの家を行き来してるし、浩太ん家の家族と
も知り合いだから、今回とは違うよ」

「ふうん。アスカもなんだかんだ女子ってことだね」

綾はしみじみと呟きつつ、内心「秋川、哀れなり」と独りごちる。
「学校でよく一緒にいるのは綾だから、綾にも知って欲しいって
話したら、久留井くんもオッケーしてくれたし」

「よく一緒にいるってのなら、秋川も誘ってみたら?」

「うん、後で訊いてみようかなって。でも、あいつも部活あるし、
どうかな……」

「多分大丈夫だと思うよ。十中八九、行くなって即答するよ」

「そうかなあ？」

鶏肉のから揚げを箸で転がしながら零した琉奈の言葉は、穏やかな陽気の中に溶けていった。

下校した飛鳥川琉奈と松下綾、そして綾の予想通り、二つ返事で久留井家への同行を同意した秋川浩太の三人は、久留井祥吾から渡されたメモに書かれている住所を頼りに、彼の自宅へと向かった。途中で道が分からなくなり、携帯電話で調べたりしつつ自転車を走らせること約二十分。

三人は住宅街の一角に位置する、とある一軒家に到着した。灰色の外壁に黒い屋根。こじんまりとしたガレージに停められている白の軽自動車は、きちんと洗車が行き届いている。玄関付近には花壇があり、色とりどりの花々がそよ風に揺れている。

インターホンの横に「久留井」という表札が掛けられたその家は、何の変哲もない、ごく普通の一軒家だった。

近くに自転車を止め、簡素な門の前に立つ三人。

意を決し、琉奈はインターホンを鳴らした。

『はい？』

程なくインターホンの向こうから女性の声が返ってきた。

「あ、あの……私、久留井くんのクラスメイトで、飛鳥川と申しませんが……」

『クラスメイト……あ、祥吾が言ってた子たちね。今そっちに行かせるからちよつと待つてて頂戴』

そう告げると、女性の声は切れた。

「今の、久留井くんのお母さんかな？」

「かな。ずいぶん若そうな声だったね。あれだけのイケメン三人のお母さん……美人かな？」

琉奈の問いに綾が問い返す。浩太は不機嫌そうに唇を歪める。

そうこうしていると、久留井家の玄関のドアが開かれ、中から久留井誠一が現れた。

「ごめんね、待たせちゃって。祥ちゃんは今お茶の準備してるから、先に入っちゃって」

相変わらずの明るい笑顔で三人に呼びかける誠一。

三人はその言葉に応じ、門を開けて歩を進める。

「「「お邪魔します」」」

玄関に入り、三人は声を揃えて挨拶する。

「どーぞどーぞ。……ところで、君はどちら様？」

三人を自宅へ招き入れた誠一が、ストレートに浩太に尋ねる。

「秋川浩太といいます」

「彼も私の友人なんです。だから、一緒に話を聞いてもらいたくて」
浩太の自己紹介に琉奈が補足説明を加える。

「そうなんだ。俺は三年の久留井誠一。よろしくね。で、浩太くんはどっちの彼氏なの？」

思いもよらない誠一の質問に、浩太は赤面し、「へ！？」と素っ頓狂な声を上げる。

「どっちの彼氏でもありませんよ！ あたしと浩太はただの幼馴染で、綾と浩太はただの友人。それだけです」

お決まりの説明をする琉奈。

浩太もいつも通り、がつくり肩を落としている。

誠一は「ふうん、そうなんだ」と納得の意思を示しつつも、

「でもさあ、浩太くんの方は琉奈ちゃんのこと好きなんですよ」

と綾にこっそり耳打ちする。

綾は苦笑しながら頷いた。

協力者（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

誠一に連れられ、琉奈・綾・浩太の三人は久留井家のリビングへやって来た。

「いらっしやい、飛鳥川さん、松下さん、秋川くん」

三人の姿に気付いた祥吾が声をかける。

「ごめんね、まだ準備ができてなくて。適当に座っててもらえる？」

「うん、ありがとう」

琉奈が礼を言い、近くのソファに腰掛ける。

リビングにはソファやダイニングテーブル、テレビなどの家具が置かれており、それらは黒や茶色などのシックな色で統一されている。

ソファの側にあるコンポの横に佇む棚には数多くのCDが収納されている。

有名な日本人アーティストのものから、聞いたことのない外国人のもの、中には演歌もある。

「うち、音楽の好みがバラバラでさ」

琉奈がCDを注視しているのに気付いたらしい誠一が言う。

「邦楽のは俺とか恭子さんの。洋楽はほとんど祥ちゃんのかな。彰が好きなのはゲーム音楽と演歌。変わってるでしょ？」

「すごい組み合わせですね」

琉奈が笑いながら答える。

「誠一先輩、恭子さんって誰ですか？」

「ああ、母親だよ。久留井恭子っていうの」

「お母さんを名前で呼んでるんですか……？」

綾が不思議そうに尋ねる。

誠一は一瞬言葉に詰まるも、「うちって変わり者ばかりだからね」

といつもと変わらない、明るい口調で答えた。

「おまたせー」

そんな台詞と共に、ティーポットとカップを載せたトレイを手にした祥吾が四人の元へやって来る。

祥吾の後ろには、同じくトレイを持った女性が一人。

「初めまして。母の久留井恭子です」

ソファ近くに置かれたテーブルにトレイを置きながら、女性

久留井恭子が琉奈たちに自己紹介する。

「飛鳥川琉奈と申します」

「松下綾です！」

「秋川浩太といいます」

三人はしゃちほこばって挨拶した。

思わず姿勢を正さずにはいられないほど、久留井恭子は見目麗しかった。

彼女の輪郭をなぞるのは、短くも艶やかな黒髪。彼女の顔の白さを際立たせている。穏やかな目元と、紅を差している唇の右下にある小さなホクロが印象的な麗人だ。

「久留井誠一です！」

「知ってるわよ！」

琉奈たちを真似て自己紹介した誠一に、恭子が素早くツツコミを入れる。

「お菓子、遠慮しないで食べてね。……ちょっと合わないかもしれないけど」

そう複雑に忠告しながら恭子が三人に差し出したのは、籠の中に大量に入った煎餅。

「なんで煎餅買うかな……」

ティーポットからカップに紅茶を注ぎながら祥吾が愚痴を言う。

「だって、お茶に合うお菓子って言われたらお煎餅を思い浮かべるじゃない、誰だって！」

「恭子さん、俺が紅茶好きなの知ってるでしょ！？　なんで緑茶を

思い浮かべちゃったの!？」

「違うわよ、煎茶を思い浮かべたの!」

「そんなのどつちでもいいわい!」

「いいじゃない、お煎餅も美味しいんだから! ……じゃ、ごゆっくりね」

自分の主張を終えてすつきりしたのか、恭子は一方的に話を切り上げ、キッチンへと戻っていった。

「……なんか、色々面白いお母さんだね、久留井くん」

琉奈は素直な感想を述べる。祥吾は疲れた表情で「まあね……」と答えた。

綾と浩太は茫然と恭子がいた場所を見つめ、誠一は必死に笑いをこらえている。

「……さ。お茶どうぞ」

「祥ちゃんのお茶は格別だよ!」

祥吾と誠一薦められるまま、琉奈たちは出された紅茶や煎餅に口をつける。

「そういえば兄貴、彰はまだ帰ってないの?」

「うん。何してんだろな? まあいなくても大丈夫じゃない?」

「……だね。あいつがいると話が脱線しかねないし。さてと」

祥吾は真剣な表情で三人へ向き直る。

「じゃあ、飛鳥川さんが襲われてる現象について説明するね。多分長くなると思うけど、出来る範囲できちんと説明するから」

「分かつてると思うけど、飛鳥川さんの身に起きてることは、常人にはあり得ないことなんだ。あり得ないし、あつてはならない」

「あつてはならない……」

琉奈は祥吾の言葉を繰り返す。

「じゃあ、なんでその、あつてはならないことがアス力には起きるんだ!？」

「順に説明していくから」

興奮気味の浩太に誠一が話しかける。

祥吾は話を続ける。

「飛鳥川さんが引き込まれている世界は違う次元にある世界で、そこには本来、死者の魂しか存在しない世界なんだ」

「つてことは…天国！？ それとも地獄…とか？」

綾の質問に祥吾は首を横に振る。

「天国とか地獄っていうのは、あくまでも生者が作り出した架空の概念で、実際には存在しないんだよ。死者の魂はどんな悪行も善行も関係なく、全て一つの場所に送られる。そこは…そうだな、鏡の向こうの世界とでも考えてくれればいいかな。生者に干渉されることのない、異次元の世界。」

日の差すことのないその世界を、俺たちはトコヨノ国って呼んでる」

「トコヨノ国……」

琉奈たちは口々に復唱する。

祥吾は更に説明を続ける。

「トコヨノ国は魂の集積所みたいな役割を果たしてるんだ。トコヨノ国に辿り着いた魂は、トコヨノ国の中に生前の自分と深い関わりのある場所を作り出し、その場所に居ついて次の転生の時を待つ。トコヨノ国はそういう場所なんだ。」

そして、飛鳥川さんが引きずり込まれた世界こそ、このトコヨノ国ってわけ」

「次の転生を待つ場所……。でも、どうしてあたしがそんな場所に？」

「それについて、俺たちも分からない点があるんだ」

琉奈の疑問に答えたのは誠一だ。

「トコヨノ国は魂のエネルギーが大きく作用する世界でね。」

元々トコヨノ国は何もない、広く暗いだけの空間だったんだ。けど、次第に多くの魂が集まり、その魂たちが記憶している生前の風景が次々と作られていった。その結果、今のトコヨノ国は様々な建

物とかが無秩序に、流動的に構築されている状態になってる。

魂があらゆる事象に関わるトコヨノ国においては、例えば魂が現世に行きたいと願えば、魂の状態ではあるけど行けるし、逆に誰かをトコヨノ国に引きずり込みたいと願えばそれも叶う」

「じゃあ……誰かの魂があたしをトコヨノ国に引きずり込もうとしてるってことですか……？」

「そういうことだね。神隠しってあるでしょ？ あれって実は死せる魂が生者をトコヨノ国に完全に引きずり込むことを言うんだよ」

そう説明した後、誠一は手にした煎餅を前歯でパキリと割る。

「で、飛鳥川さんのケースで俺たちが分からない点が二つ」

祥吾はそう言って、人差し指と中指を立てる。

隣で誠一が握り拳を作り、「勝った！」と呟く。「違うでしょ」と祥吾がツツこむ。

「一つは、誰の魂が飛鳥川さんをトコヨノ国に引きずり込もうとしてるか。……心当たり、ない？ 身内で君に強い思いを抱いて亡くなった人とか」

琉奈には心当たりはないらしく、彼女は小さく首を傾げた。

「……そっか。まあ、それについてはこれから調べるとして。二つ目は、飛鳥川さんが現世に戻ってきてる点」

「アス力が戻ってきたちゃマズイってのか！？」

「違う違う。そうじゃなくて、どうしてこっちに戻ってくることが出来るのかってこと」

祥吾が慌てて浩太に弁明する。

「あそこまで引きずり込まれたら、普通はそのままトコヨノ国から出られなくなって野垂れ死に、っていうパターンになるはずなのに、飛鳥川さんは戻ってこれてる。それが不思議なんだよ」

「それも誰かの魂の意志、とか……？」

「あり得くはないけど……まだ何とも言えないね」

綾の問いかけに答え、祥吾は紅茶を口にする。

「こっやって一気に説明されても良く分からないかもしれないけど、

いつか全てをからだで実感せざるを得ない時がくると思う。でも、
安心していいからね、琉奈ちゃん。その時は俺たちもついでから」
誠一が力強く宣言する。

琉奈はその言葉を信じ、深く頷いた。

常世国（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

交錯心

1 - 8

「……一つ、訊いてもいいですか？」

おずおずと手を上げ、綾が言う。「何？」と誠一がそれに応じる。
「誠一先輩や久留井くんは、どうしてそんな話を知ってるんですか？」

「……さっきの話の中に、現世に戻ってきてしまった魂や、琉奈ちゃんのように生者をトコヨノ国に引きずり込む魂が出てきたよね。そいつらの多くは生者に危害を加えたり、時には死に至らしめることすらあるんだ。」

俺たちの一族は古くから、人々をそういう悪い魂から守ってきたんだ。だから、こういったことには詳しいわけ」

「一族……ってことは、先輩たちも悪い魂から人を守ることができてるんですか？」

「もちろん。オレにも祥ちゃんにも、彰にもね。だから、オレたちはその力で琉奈ちゃんを守る」

「……もし、狙われるのがあたしでも、同じように守ってくれますか？」

「？ 当然！ 綾ちゃんのことを守るよ、全力で」

綾の質問の意図を図りかねたらしい誠一は戸惑った表情を浮かべたものの、すぐにいつもの笑顔に切り替え、断言する。

その言葉を聞き、すっかり頬を紅潮させて喜ぶ綾を見た琉奈の胸を、ある考えが過ぎった。

話題を次第に学校の先生や授業内容、最近人気のドラマやゲーム

に移しつつ、紅茶と煎餅をみんなで堪能し終えた時、太陽はその身をコンクリートの山々の向こうにすっかり沈めていた。空は宝石のように輝く星たちを塗した漆黒の帳に完全に覆われている。

「ごめんね、長居しちゃって」

履いた靴のつま先を地面に数回、軽く打ちつけながら琉奈が謝った。

「ううん。わざわざ来てくれてありがとね。帰り、送っていかなくて大丈夫？」

祥吾の気遣いを、琉奈は首を振って遠慮する。

「まだそこまで遅い時間じゃないし、みんな帰り道はほとんど同じだから」

「浩太くんもいるもんね」

琉奈が挙げた理由に誠一が付け加える。

急に自分の名前が出てきたことに驚いたのか、浩太はびくりと体を震わせる。

「そうですね。まあ、久留井くんや先輩に比べたら頼りないかもしれないですけど」

苦笑しながら琉奈が答える。

側でそれを聞いていた綾は、また浩太が落ち込むのではないかと思い、憐憫の視線を彼に向ける。

が、すぐにその目は小さな驚きに包まれることになった。

浩太は一切落ち込んでおらず、むしろ挑戦的な目で祥吾たちを見つめてすらいいた。

「あたし、誠一先輩のこと好きになっちゃった」
帰路の途中。

家路を急ぐ足を止め、綾が突然言い放つ。

驚き、啞然としている浩太に対し、琉奈はやっぱり、と言わんば

かりの表情で溜息をついた。

「桜井先輩はどうするの？ 振るの？ まさか二股？」

「桜井先輩とはもう別れたの。昨日の夜、電話で振られちゃった。でも、思ってたよりはショックじゃなかったんだよね。きつとあたし、屋上で初めて誠一先輩と会った時から、桜井先輩より誠一先輩の方が好きになってたんだと思う」

「……そっか。なんとなくそんな気はしてたけどね」

「やっぱアス力にはバレてたか。あたし、アス力に感謝してるんだ。アス力のおかげで誠一先輩との接点ができて。……アス力は大変かもしれないけど」

申し訳なさそうに俯く綾に、琉奈は優しく微笑みかける。

「そんなこと気にするなんて、綾らしくないよ」

「……それってあたしがいつも無神経ってこと？」

「あれ、自覚なかったの？」

「アス力……！」

「うそうそ。……応援、するからね」

軽口の応酬の後、琉奈が真面目な顔で言う。

綾は心底嬉しそうな表情を浮かべ、「ありがとう」と答える。

浩太はそんな二人を無言で見つめていた。

「俺、そんなに頼りない？」

道の途中で綾と別れ、二人きりで歩いている時。

浩太が急に足を止めるなり、そんなことを言い出した。

「え？」

「なあ、俺ってそんなに頼りないのか？」

「なんなの、突然……」

しつこく問い続ける浩太。

琉奈はそんな浩太に戸惑いを隠せない。

「久留井くんたちに比べて頼りないかもって言ったの、気にしてるの？ あんなの、いつもの」

「あいつら見てるとムカつくんだ！」

忌々しげに言い捨て、浩太は側にある電柱を蹴りつける。

「あいつら……自分たちは特別だってふんいき丸出しでさ。自分たちならお前を守るって……。んなこと、俺にだってできるし！俺だってお前のこと守れるし！それに、あの誠一とかって先輩、お前のこと名前で呼びやがって。なんで俺とか松下には苗字で呼ばせてんのにあいつはいいんだよ！？なんで」

「浩太！」

琉奈が浩太の言葉を遮り、彼の名を叫んだ。

「何をそんなに怒ってるの？あの人たちはあたしのために協力してくれるって言うてるんだよ。なのになんで？彼らがあたしを助けてくれることの何が不満なの？」

息もつかず、一気にまくし立てる琉奈。

琉奈を直視していた目を背けた浩太は、小さく「ごめん」という言葉を捻り出した後、嵐のように走り去っていつてしまった。

琉奈はただ、遠ざかっていく浩太の背中を見つめることしかできなかった。

久留井彰が自宅に帰ってきたのは、夜八時を過ぎた頃だった。

「遅かったね、彰。ケータイにも出ないから心配してたんだぞ」

彰が帰宅したと聞き、玄関に駆けつけた祥吾が話しかける。

「今日も女子に追い掛け回されてたのか？」

続いて玄関にやってきた誠一が冷やかす。

彰はいてつくようなま眼差しを二人に向け、答えた。

「女性ね……うん、女性でしたよ。トコヨノ国からのお客様は」

「……！」

誠一と祥吾は目を見張る。

「僕の実力は防衛中心で、某RPGで言えば後列に配置しなくちゃ

いけないキャラなので、多少は苦勞しましたが、どうにか散らしてきました」

「そっか……。ごめんな、助けに行けなくて」

謝る誠一に、「いえ、自力で何とかなりましたから」と答えた彰は、顎に手を当てつつ言葉を次いだ。

「それにしても……。思ってたより危ない場所かもしれないですね、この町は」

交錯心（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

加害者

1 - 9

「アースカ！ おはよ！」

翌日。

昇降口にある下駄箱から自分の上履きを取り出そうとしていた飛鳥川琉奈に、松下綾が猪突猛進という言葉を体現したかのような勢いで突進し、抱きついた。

「お、おはよう、綾。朝からテンションMAXだね……」

綾の元気っぷりに気圧されつつ、琉奈が言う。

「ふっふっふ。昨日の夜、誠一先輩と電話でいっぱい喋っちゃった！」

「ホント！？ っていうか、いつの間に電話番号を……」

「昨日先輩の家にお邪魔した時にね。アスカがトイレ行って話が中断してた合間に。ついでに久留井くんの番号もゲット！」

綾は歯を見せてにんまりと笑い、更にブイサインまで作る。

「ついでにつて……。この前まで久留井くんにもキヤーキヤー言ってたのに」

「今はもう誠一先輩一筋なの」

組んだ両手を右頬に寄せながらはしゃぐ綾。周囲にはハートマークが飛んでいる。

綾が恋をする度に見るお決まりの光景に、琉奈は肩を竦めて苦笑した。

「ア、アスカ……おはよう……」

教室に入るなり、琉奈にそう声をかけるクラスメイト。秋川浩太だ。

浩太の顔を目にした途端、昨日言い放たれた言葉が琉奈の頭にこ

だます。

「あの……昨日は急にキレたりしてごめん……」

「うっん、大丈夫」

「もうあんなふうにキレたりしないから。できれば忘れて欲しいんだけど」

「……うん、分かった」

「え？ 何？ 何の話？」

琉奈と浩太の間に何があつたのか知らない綾が二人の間に割り込んで探りを入れるが、二人は何も答えず、琉奈はさつさと自分の席へと去ってしまった。

やれやれ、と言わんばかりにため息をついて椅子に座った琉奈は、自分の机に違和感を覚えた。

琉奈は恐る恐る、机の中に入れっぱなしにしていた教科書を取り出す。

「！？」

「琉奈、それ……」

遅れて自分の席 琉奈の前の席だ についた綾が、琉奈の教科書を見て顔を顰めた。

琉奈の数学の教科書はズタズタに裂かれていた。

とてもではないが、もう教科書としての機能を話しそうにない紙の束を見つめ、茫然とする琉奈と綾。

刹那。琉奈は全身を射抜かれたような感覚に陥る。

明確な殺意を持った矢の放たれた方へと視線を向けると、そこには今にも取って喰わんばかりの鋭い眼光で琉奈を睨む江田留菜がいた。

穏やかな蒼穹には、ふんわりとした小さな雲があちこちに浮かび、太陽からは暖かな陽光が降り注いでいる。

「江田さんの仕業だね、多分」

「多分っていうか。確実にそうだね。アスカに嫉妬してるんだよ、久留井くんのことだ」

いつものように昼食を屋上のベンチでとる二人。

どちらもその表情にいつもの明るさはなく、深い苦悩の色に塗れている。

「あの人は敵に回すと厄介だよ。部活でもたまにあの人の黒い噂聞
くし」

「だよね……。まいったな、久留井くんとは何もないのに」

琉奈は箸を咥えたまま、海よりも深いため息をついた。

「江田さんはきつと久留井くんを独占してるつもりでいるんだよ。
で、自分の許可なく久留井くんと親しげにしてるアスカがム力つく
とか」

「何その思考回路……意味分かんない」

「……正直あたしは分からなくもないんだけど。でも自分の彼氏で
もないのに。極端だよ、あの人。どうにかならないかなあ？」

「何が？」

「「!」?」

突然、背後から会話に割り込んできた第三の声　しかも男の声

に驚き、思わず飛び上がる琉奈と綾。

そんな二人を見て、「ビックリし過ぎだって」と笑っている声の
主は、久留井誠一だった。

「誠一先輩!」

「脅かさないでくださいよ!　すっごくびっくりしたんですから!」

「ごめんごめん、まさかそんなにビックリするとは思わなくて」

誠一は顔の前で両手を合わせ、小さく舌を出す。

他の男子　例えば秋川浩太あたりに同じことをやられたら余計
に腹立たしくなりそうだが、誠一の場合は素直に許してしまいたく
なる。

イケメンは得だなあ、と琉奈は内心呟いた。

「ところで、二人は何の話してたの？ 俺が二人のベンチの後ろに回り込んでの気付かないくらい真剣だったけど」

誠一の質問に、琉奈と綾は顔を見合わせ、困惑の表情を浮かべた。今回の、江田留菜によるいじめの一件には、確実に久留井祥吾が絡んでいる。

そのことを祥吾の兄である誠一に素直に話していいものか逡巡したのだ。

二人の様子から、おいそれと話せない事情があると悟ったのか、誠一は優しげに微笑み、

「まあ、話したくなつた時に話してよ。オレで良ければいくらでも聞くからね」

と語りかけた。

「じゃ、オレは食堂に行くから」

「ま、また久留井くんのお弁当ですか、誠一先輩？」

「オレも彰も、祥ちゃんの手作り弁当！ じゃ、またね！」

そう言い残し、誠一は爽やかに屋上を後にした。

「……あたし、母親から料理習おうかな」

去り行く誠一の背中を見つめながら、綾がぽつりと呟いた。

丁寧にとっているノートのおちこちに、大きく書かれたバカだの死ねだのという罵詈雑言が踊っている。

数学と現文、日本史のノートが犠牲になった。

こんなことしている暇があったら、昼寝でもしていた方が充実した昼休みを送れたのではないか。

ノートを開いたまま沈黙している琉奈は胸中でそう吐き捨てた。

と、微かな笑い声が琉奈の鼓膜を震わせる。

声のした方へ視線を巡らせると、教室の隅に江田留菜とその取り巻きが琉奈を見つめたまま、クスクスと小さく笑っている姿があっ

た。

「アスカ……」

琉奈のノートの惨状を目の当たりにした綾が、心配そうに琉奈を呼ぶ。

久留井祥吾はそんな琉奈と綾を無言で見つめていた。

それから数分後。

授業が始まってからしばらくして、琉奈のケータイがスカートのポケットの中で震えた。

琉奈はポケットからケータイを取り出し、教師に見えないようにして開く。

ケータイのディスプレイには、「新着メール受信」の文字。

メール受信ボックスを開いてみると、未登録のアドレスからのメールが届いていた。

放課後、屋上へ来い。

恐る恐る開いたメールには、その二言しか書かれていなかった。一体誰からのメールなのかも分からない。

だが、心当たりはある。

江田留菜。

琉奈は彼女のメールアドレスを知らないし、命令形で書かれているのも彼女らしいと思った。

指示に従おうかどうか迷ったが、従うことに決めた。

ここで突っぱねたら嫌がらせが悪化する可能性があるし、面と向かって彼女の誤解を解いておきたい。

自分は久留井祥吾とは何でもないのだと。

加害者（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

夕暮時

1 - 10

飛鳥川琉奈は重い足取りで階段を踏みしめていく。

階段の先にあるドア。

そこを開けると、江田留菜を中心とする女子グループが並んで仁王立ちでもしていたりするのだろうか。

その光景を想像する度、琉奈は堪えきれずに溜息を零した。

辿り着いてしまった一枚のドア。

普段何気なく開いているそのドアが、妙に重々しく見える。

琉奈は意を決し、地獄へ通じてるだろうドアをゆっくりと開いた。眼前に広がるのは、西から東へかけて、橙から濃紺へと変化していくグラデーションが美しい夕暮れの空。それだけだった。

「……あり？」

拍子抜けしてしまう琉奈。

そんな彼女の元へ遅れてやってきたのは、予想外の人物だった。

「飛鳥川先輩」

「！ 君は、確か……」

「久留井彰です」

久留井三兄弟の末子である彰がぺこりと礼をする。

「あなたをここへ呼び出した張本人は祥吾兄さんなんです……」。

誠一兄さんとはかく、祥吾兄さんまでまだ来てないなんて」

思いもよらない人物の登場に困惑する琉奈を放置したまま、辺りを見回しながら彰が呟く。

「久留井くんが？ てことは、例の……何だっけ、何とかの国の話？」

「トコヨノ国のことですか。あ、僕も全て知っているので、遠慮しなくて構いませんよ。まあ、能力的には僕はそれほど優れているわ

けではありませんが」

「能力……？ 昨日久留井くんが言ってた、悪い魂から守る力のこと？ それって超能力か何か？」

「超能力とはまた違いますが、僕たちは」

「ごめん！ 遅れた！」

慌てた様子で屋上に飛び込んできた久留井祥吾が彰の言葉を遮り、簡潔に謝る。

「遅いですよ、祥吾兄さん」

「ごめんごめん。ちよつと話が長引いちゃって。飛鳥川さん、来てくれて良かった」

「久留井くんからだったんだね、あのメール。本文に名前書いておいてくれれば良かったのに」

「江田さんだと思った？」

「！？」

心の中に留めておこうとした言葉を肉声にされ、驚く琉奈。

口ごもる彼女を見て、祥吾は優しげに微笑む。

「兄貴はまだ？」

「ええ、遅刻です。まあ、いつものことですけどね」

「だな。そのうち来るだろうから、先に始めてよつか。……飛鳥川さん、君のご家族のことについて詳しく聞きたいんだ。その方が解決が早くなると思うから」

「家族……？」

「亡くなってる方はもちろん、生きてるご家族のことも。基本的に悪さをする魂つてのは死者の魂なんだけど、稀に生者の魂と結託して悪さをすることもあるから。話しにくいこともあるかもしれないけど、できれば全て、正直に話してもらえないかな」

「死者の魂にしても、生者の魂にしても、あなたに影響を及ぼすのは、あなたに強い感情や思念を持っている者です。それが良いものであれ、悪いものであれ。僕たちはその原因を突き止め、適切に対処したいんです」

「強い感情……」

祥吾と彰の話を聞いているうちに、琉奈の脳裏に浮かんだ家族の顔の中で、急激に、鮮明に、巨大になっていく顔が一つあった。

「……兄が……」

「兄……？ 飛鳥川さん、一人っ子って言ってなかった？」

「ごめん……あんまり兄の話をしたくなって」

虚言の述べたことを謝る琉奈を、祥吾は「気にしないでいいから」と慰める。

「飛鳥川先輩のお兄さんが、先輩に対して何か異常な感情を抱いていると？」

「異常とまで言えるかは分からないけど……兄は昔からあたしのことが嫌いみたいで。ほとんど口もきいてくれないし、たまに話しても二言目には「死ね」だし……」

「酷いね。お兄さんはどうしてそんなことを？」

祥吾の質問に、琉奈は力なく首を横に振る。

「分からない……。訊いても教えてくれないの。両親も分からない、の一点張りで」

「……ご両親も？」

「とりあえず、先輩のお兄さんが原因である可能性が高いですね、現時点では。そこからご両親を含め、調べを進めていくのが得策だと思いますけど。……ん？」

突然、疑問符を頭上に浮かべた彰が上空を見上げる。つられて同様に見上げる祥吾と琉奈。

「どうしたの、二人とも？ 何かあるの？」

一通り上空を見回すも、琉奈の目にはオレンジ色に染まる空しか見えない。

が、祥吾も彰も、無言で上空のある一点を凝視している。

「……おかしいな。ちゃんと散らしたはずだったんですけど」

「彰……お前……」

「ごめん！ 今日もし女子に超追いかけてさあ」

彰が不思議そうに眩き、祥吾が額に青筋をたて、三兄弟の長兄である久留井誠一が暢気に屋上へやって来た瞬間。

琉奈は三兄弟たちと共に、フラッシュのように強く眩い光を受け、反射的に目を閉じた。

夕暮時（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

攻防

1 - 1 1

やがて、おそろおそろ目を開けた飛鳥川琉奈の目の前に広がるのは、先ほどまで見ていた視界いっぱい夕暮れではなかった。

一面の、漆黒の闇。

他には何も無い。

「飛鳥川さん、大丈夫？」

先ほどまで一緒にいた久留井祥吾の声が琉奈の鼓膜を叩く。

「久留井くん……？ 近くにいるの？」

「いるよ。彰も兄貴もみんな。そのうち目が慣れてくるから」

祥吾の言うとおり、目が暗闇に慣れてくるにつれて、うつすらと周囲にある物体の輪郭が見えてきた。

観覧車。

ジェットコースター。

お化け屋敷。

メリーゴーランド。

その他、様々なアトラクション。

「……遊園地？ なんて？」

広大な空間のあちこちに置かれている無数のアトラクションを見て、琉奈は思わず呟いた。

「いや、ここはトコヨノ国だよ」

茫然としている琉奈に、ようやく彼女の目に映るようになった祥吾が告げる。

「トコヨノ、国……ここが……」

「俺たちを引きずり込んだ魂の影響を受けて遊園地になってるけどね。生前に遊園地で働いてたのか、それとも遊園地で素敵なデートをしたことがあるのかな」

「なあんで屋上に来た瞬間にトコヨノ国!? どーなってるの、祥ちゃん!」

「詳しいことは彰に訊いた方が早いと思うよ、兄貴。どうやらお知り合いみたいだから」

頭を抱えて喚く兄・誠一に祥吾がアドバイスする。

「……いや、僕はちゃんと散らしたんですよ、昨日。なのになんてこうなりますかね?」

「完全に散るの、見届けたか? しっかりはつきりきっちり見たか?」

誠一の指摘に、弟の彰はしばらく視線を虚空に泳がせた後、えへへ、と笑う。

「おまえー! ちゃんと最後まで確認しろっていつつも言ってたんだろお!? アレ、ぜってえ彰が昨日散らした後に再結合した魂だかなな!」

誠一が叫びながら指差した先に現れたのは、皓々と輝く、拳ほどの大きさの光の塊だ。

ゆらゆらと宙に浮いているそれを、琉奈はぽかんと口を開けたまま見つめる。

「あれが……魂?」

「そう。俺と彰が屋上で見てたのがあれ。今は飛鳥川さんにも見える?」

「うん……」

「俺たちをここに連れてきたにがあれね。だから、俺たちはあれをどうにかしないと……!」

突然、白く輝く魂の輪郭が波打ったかと思うと、それはあつという間に若い女性の姿に変化した。

白いワンピースをまとった、黒のロングヘアの女性は琉奈たちに目を遣り、鬼神の如き形相で睨みつけてくる。

その迫力に脚が竦み、ふらつく琉奈の体を誠一が支える。

「大丈夫だよ、琉奈ちゃん。俺たちが守るから」

白いワンピースの女性を毅然と見つめたまま、誠一が言い放つ。
琉奈は無言で頷く。

《許さない！！》

ワンピースの女性が咆哮をあげる。

刹那、周囲に置かれたアトラクションの電飾が点り、辺りが急に明るくなる。

ジェットコースターやメリーゴーランドなどが動き出し、不気味な雰囲気にな釣合いな明るい音楽がどこからともなく響いてくる。

「な、何……？」

戸惑う琉奈を背中に隠し、祥吾が周囲を警戒する。その時。

「！！」

猛烈なスピードで下り坂を滑り降りていた無人のコースターがレールから外れ、琉奈たちの方へ突進してきた。

とてもではないが避け切れる速さではない。

圧倒的な絶望が琉奈の体に絡みつき、身動きを封じる。

琉奈は瞬時に死を覚悟した。

だが。

「彰！」

誠一に鋭く名前を呼ばれた彰は他の三人を背にしてコースターの前に立ちほだけり、両手の平をコースターに向けて翳す。

「何を　！？」

琉奈は我が目を疑った。

彰が翳した掌の向こうに、金色に輝く大きな光の壁が現れ、必殺の勢いで突進してきたコースターを防いだのだ。

光の壁によって進路を阻まれたコースターはプレスされたように拉げ、やがて地面に崩れ落ちた。

《な……！？》

驚愕するワンピース女を、溜息混じりに光の壁を消した彰の視線が真っ直ぐに射抜く。

ワンピースは視線を観覧車へ向ける。

すると、観覧車のゴンドラが外れ、二十個はあるだろう鉄の塊が一斉に四人に向かってくる。

だが、ゴンドラは琉奈たちの元へ辿り着く前にどこから飛来した金色の矢によって次々と迎撃されていく。

《！？》

「おしまい」

最後のゴンドラが地面に叩きつけられるのを見届けた祥吾が琉奈に微笑みかける。その右手には、先ほどの彰の光の壁と同じ色で光り輝く大きな弓が握られている。

《な……なんなんだ、お前たち……》

うろたえるワンピース。

次はどのアトラクションで攻撃しようか迷っているらしい彼女の側に、一人の男が音もなく忍び寄る。

その影にワンピースが気付いた時には手遅れだった。

「ダメダメ、余所見してちゃ」

《！！》

ワンピースの腹を横一文字の光の筋が走る。

次の瞬間、ワンピースの体が一閃し、弾け飛ぶ。

「……もう再結合はなさそうだね。帰ろ、みんな」

金色に輝く剣をしている誠一が、琉奈たち三人に告げる。

刹那、周囲のアトラクションが次々と崩壊していく。次第に霞んでいく風景。

そして、次に瞬きをした時、四人の姿は学校の屋上にあつた。

家路を急ぐ鳥たちが行き交う夕暮れの空。校庭から響いてくるサッカー部員の掛け声。下校する生徒の笑い声。

いつもと変わらない風景がそこにあつた。

「飛鳥川さん、大丈夫？ 怪我はない？」

茫然自失状態で立ち尽くしている琉奈に、祥吾が心配そうに声をかける。その手に光る弓はない。

「……今の……」

「トコヨノ国で人間に悪さをする魂だよ」

同じく光の剣を手放している誠一が答える。

「あの魂は昨日、僕が現世で遭遇した魂です。他の人間に危害を加えようとしていたので散らしたはずなんですが、想像以上にしぶとい魂だったようで再結合してしまつて。僕の失態に兄さんたちや飛鳥川先輩まで巻き込んでしまい、すみませんでした」

ぺこりと頭を下げる彰。反省しきりの彼に、気にするななどと声をかけ、慰める誠一と祥吾。

一方、トコヨノ国で襲われた時に感じた死の恐怖が未だに心にこびり付いたままの琉奈は、両腕で己の体を抱きしめ、ガタガタと震えていた。

「琉奈ちゃん、大丈夫……じゃないね。今日はもう帰ろっか。送るよ」

「いえ……もうすぐ浩太が……部活、終わるから。江田に見られたらヤバいし……」

「……そっか。ごめんね、怖い思いさせて」

「あの……あたし、このままかといつかまた、あんな目に遭うかもしれないんですか？」

もし、いつものようにトコヨノ国から自然に現世に戻れなかったら、あのアパートの中で誰かの魂に襲われるのか。

それは嫌だった。

もうあんな恐怖を味わいたくはなかった。

だが、告げられた事実は的確かつ残酷で。

「残念ながら、その可能性が高いね」

「でも、その時のために俺たちがいるから」

誠一の言葉を聞いて絶句する琉奈に祥吾が言う。心に刻み付けるように力強い口調で付け加える。

「俺たちの力はそのためにあるんだから」

「琉奈、どうしたの？」

母親に呼び止められ、琉奈は振り返る。

「……何が？」

「なんだか顔色悪いわよ」

「大丈夫、ちよつと疲れただけだから」

力なくそう答え、琉奈は再び二階にある自室へと歩き出す。

疲れたのは事実だ。肉体的にも、精神的にも。

今までに体験したことのない、衝撃的な戦闘と死の恐怖。
ずっとその傍らにいたのだ。

「！」

琉奈の部屋の隣のドアから兄が出てきた。

普段着ではない。どこかへ出かけるようだ。

兄は顔面蒼白の妹に目もくれず、まるで琉奈が存在していないか
のような素振りですれ違い、去っていく。

……兄なんだろうか。

琉奈は内心自問する。

自分が死ぬことを願い、祈り続けている兄。

彼が自分をトコヨノ国へ引き込んでいるのだろうか。

ならば、あのアパートは一体何なのだろうか？

それに、なぜ自分は現世に戻ってこれているのだろうか？

琉奈は様々な疑問が渦巻く頭を抱え、その場に座り込んだ。

攻防（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

前兆

1 - 1 2

飛鳥川琉奈の姿は、足早に教室へと急ぐ生徒であふれ返る昇降口にあった。

新しく始まる今日という日への期待と希望に満ちた笑みを浮かべている彼らに対し、琉奈の顔は苦渋に満ちている。

「アス力、おはよ！ …… どうしたの？」

琉奈の姿に気付き、後ろから声をかけた松下綾は琉奈の顔を見て、それまで浮かべていた笑顔から一転、不安げな表情で琉奈に尋ねた。
「おはよ、綾。 …… いや、さ…… 今日は何されるんだろうつて思っ
て」

琉奈の答えの意図を察した綾は「ああ……」と呟く。

今日は江田留菜にどんな嫌がらせをされるのか。琉奈を憂鬱にさせる悩み事その一がこれだ。

昨日は教科書とノートが犠牲になった。次は上履き、という可能性がある。

そう考えると、下駄箱を開ける手が鉛のように重くなってしまう。

「綾。もし綾にまで危害が及びそうになったら、あたしのことは放
つておいていいからね」

沈鬱な面持ちで琉奈が言う。

綾は一瞬目を見開いた後、琉奈を真っ直ぐ見つめ、

「今度そんなこと言ったら、ほった引く叩くからね」
と舌頭鋭く言明した。

「綾……」

「とりあえず、もし上履きがアウトだったら、職員室に来客用のス
リッパ借りに行こ」

語りかける綾の笑顔につられ、琉奈もようやく今日最初の笑みを

浮かべる。

綾の言葉で、笑顔で元気を取り戻した琉奈は意を決し、自分の下駄箱を開けた。

刃物で切り裂かれた上履き。マジックで落書きされた上履き。針を天に向けた画鋏を敷いた上履き。

悲惨な状態の上履き各種を脳内に並べていた琉奈だったが、眼前の上履きの状態はそのどれにも当てはまらなかった。

「……あり？」

普段通りの姿で下駄箱の上段に鎮座している自分の上履きを姿に琉奈は拍子抜けし、唇から間の抜けた声を零す。

「良かったね、上履き無事で」

綾が琉奈の肩を叩く。

琉奈は胸を撫で下ろす。が、まだ油断はできない。

「教室の私物に何かされてるのかも……」

琉奈の言葉に綾が顔を強張らせる。

昨日の下校時に持てるだけの私物をバッグに詰め、江田留菜の魔の手から避難させたが、持ちきれなかった辞書など数点は教室に残したままだ。

今度は辞書をぼろぼろにされているかもしれないし、机に油性ペンで落書きされているかもしれないし、机と椅子を廊下に放置されているかもしれない。

悪い予感尽きない。

「とりあえず、教室に行ってみようよ。まずは事態をきちんと把握しないと」

「……そだね。行こう」

綾の提案に同意する琉奈。

二人は無言で二年A組の教室へと向かった。

高等部校舎の三階に位置する二年A組の教室には、琉奈と綾が想像していたものとは異なる光景があった。

琉奈の机も椅子も前日同様、落書きなどの異常は一切ない状態でいつも通りの場所に佇み、主の登校を待っていた。

昨日琉奈に嫌がらせをした主犯格だろう江田留菜は、琉奈が来たことに全く気付かぬ様子で、やたらと機嫌良く取り巻きの面々と何やら話している。

そして、いつもは多くの女子たちに囲まれている久留井祥吾は、たった一人の人物と対峙している。

相手は 秋川浩太。

「秋川、久留井くんは何の用だろうか？」

「何だろうか？」

冷静に対応している祥吾に対し、浩太はヒートアップしているようだ。

「あ、飛鳥川さん、松下さん。おはよ」

歩み寄る琉奈と綾に気付いた祥吾が二人に声をかける。浩太はバツが悪そうに琉奈たちや祥吾から目を背ける。

「何なに、何の話してたの？」

新聞部員根性が疼いたのか、取材記者のような口ぶりで綾が尋ねる。

「大した話はしてないよ。男同士の話し合いを少し。ね、秋川くん？」

「……ああ」

祥吾の問いかけに同意する浩太。その表情は苦虫を噛み潰したようだ。

「うーん、特ダネスメルがぶんぶんするんだけど」

「ここから先はプライベートだよ。ほら、もう先生来たし。この話はもう終わり」

「グラマーめ、いつもはもうちょい遅いのに……」

教室に入ってきた担任教師に、綾は恨めしげな視線を投げつける。ナイスタイミング、とばかりにその場を後にしようとする浩太の腕を琉奈が掴み、引き止める。

「何の話してたの？」

「別に。久留井が言ってた通り、大した話じゃないよ」

「……あたし絡み？」

浩太はしばらく琉奈を見つめた後、無言で琉奈の手を振り解き、何も語ることなく立ち去った。

前兆（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

疑問

1 - 1 3

「変なことだらけ！」

昼休み。

綾は灰色の雲に面積の大半を奪われた空に向かって叫んだ。

ベンチに腰掛けている琉奈も深々と頷く。

「なあんか江田さんウキウキだし、アスカに対するいじめストップしたし、久留井ちゃんと秋川は何やら話し合いしてたし。何がどうなっただけ起きてるの!？」

一頻り喚き終えた綾が琉奈の隣に座る。

「……浩太が久留井ちゃんと話してたのは、多分あたしのことだと思っただけ」

「アスカのこと？ 何、二人でアスカの取り合い？」

「なんですぐ考えがそっち行くな」

苦笑する琉奈。だが、すぐに真顔になる。

「昨日ね、久留井くんたちと一緒にトコヨノ国に引きずり込まれたの」

「トコヨノ国って……アスカがいつも飛ばされるところだよな？」

「うん。でも、昨日はいつも飛ばされるところじゃなくて。別の魂に引きずり込まれたせいで、遊園地みたいところだった」

「遊園地？ アパートじゃないんだ？」

「そう。で、結構怖い目に遭っちゃって。久留井くんたちは慣れたのか、へっちゃらな顔してたけど。それで、一人で帰る気分じゃなかったから、浩太と一緒に帰ったの。浩太に心配させないように普通に振舞ってたつもりだったけど、モロバレだったみたい」

「そっか。それで秋川は何があったのかって久留井くんを問い詰めただけ」

「多分そういうことだと思う」

「ていうか、そういうこと」

「……！」

予期せぬ第三者の声に琉奈と綾は飛び上がる。

「お、驚かせないで下さいよ、先輩！」

目論見どおりの展開になり、満足げに微笑む久留井誠一に琉奈が抗議する。

「じゃちほこ張り、「こ、こんにちは、誠一先輩！」と声をかけてきた綾に、誠一は「こんにちは、綾ちゃん」と笑顔で返す。

彼を見つめる綾の瞳には巨大なハートマークが浮かんでいる。

「祥ちゃん曰く、かなりの剣幕だったみたいよ。アス力に何したんだ！　って。ごめんね、昨日は怖い思いさせちゃって」

頭を垂れ、謝る誠一。

琉奈は「もう大丈夫ですから、頭を上げてください！」と慌てる。

「彰の奴がねー。一昨日の時点でちゃんと散らしといてくれたら、あんなことにはならなかったのに」

「散らす……？」

綾が不思議そうに誠一の言葉を反芻する。

「悪い魂を退治することを、俺たちは散らすって勝手に言ってるの。俺らが倒したり。穢れが溜まって弾けた魂は消滅するんじゃないかって細かく散っていただけだからね。本来はその後、ただのエネルギー体になって、別の魂に吸収されたり、新しい魂を生むエネルギーになるんだけど、たまに一度分散しても、再び結合して魂としての力を取り戻す場合もあるの。だからいつも注意しろってたのにさあ……」

一通り説明した誠一は、不甲斐ない弟を思い出し、深い溜息をついた。

「まあでも、どうにか倒せたから良かったけどね」

「……先輩たちはいつもあんな危険なことを？」

「まあね。俺らは小さい頃からあんなことしてるから慣れてるけど、

初めての人は怖かったよね。ホントごめんね」

「！ いえ、そんな……」

「もうあんな目に遭わせたりはしないから。俺はもちろん、祥ちゃんも彰も気をつけるし」

はつきりと明言する誠一。

安堵の表情を浮かべる琉奈の横で、綾は嬉しさと悲しさが入り混じった複雑な顔で琉奈と誠一を見つめている。

「あ、祥ちゃんといえば。クラスでの嫌がらせは止まった？」

「え？」

突然の、思いもよらない質問に、琉奈は啞然として誠一を見つめる。

「クラスメイトの子に祥ちゃんのこと嫌がらせされてるんでしょ？」

「ええ、まあされてるといえばされてますけど。……あ、でも、今日は何もなくて」

「今日何もないってことは、きっともう大丈夫だよ」

「……それってどういうことですか？ 先輩、何か知ってるんですか？」

訝る琉奈に誠一は笑いかけ、彼女の肩をぽん、と叩く。

「祥ちゃんが説得したんだよ。近々一緒に出かけようっていう約束と一緒にね」

「「え！？」」

琉奈と綾は顎が外れんばかりに大口を開け、目を瞬かせる。

誠一はそんな二人をよそに、話を続ける。

「説得っていうか、いじめってカッコ悪いよね的なことでも言ったんじゃないかなあ。祥ちゃん口が達者くんだから、そのあたりうまくいことやったんだと思うよ。それプラス、一緒に出かける約束を取り付けることで、江田さん……だっけ？ 祥ちゃんは私が好きって彼女に思い込ませて、彼女の目を琉奈ちゃんから逸らせるって寸法」

「じゃあ、久留井くんは江田さんのことは……？」

にんまりと笑みを浮かべ、ピースサインを作る誠一に綾が尋ねる。
誠一はそのままの笑顔で「全然」とあっさり断言した。

「酷いって思つかもしれないけど、俺らとしては琉奈ちゃんには今回の件に集中して欲しいし、単純にいじめって大っキライだし。祥ちゃんの力で事態が好転するならやった方がいって話になったの。まあ、江田さんに叶わぬ夢を見せるのはちよつと可哀相だけど」

「久留井くんが江田さんを好きになることはないんですか？ あの人、見た目結構可愛くて、本性知らない男子の中には恋しちゃってるのも何人かいるくらい」

「絶対ないよ」

誠一が言い切る。天地が逆さになっても不変だと言わんばかりの口吻で。

「祥ちゃんは誰に対しても優しいけど、誰かを好きになることはないの」

「なんでそう断言できるんですか？」

「……それはいつか、本人が言いたくなった時に聞いてあげて」
詳しいことは口にせず、ただ微笑む誠一。

けれどその笑みはどこか寂しげだった。

「……アスカ、ごめん」

昼食を終え、教室に戻る途中。綾はそう言っただけで足を止める。

「え？ 何が？」

「アスカのメアドと番号、あたしが誠一先輩に教えたの。聞き忘れたから教えてって。江田さんのことも、昨日誠一先輩と電話した時心配過ぎてつい喋っちゃって……。先輩たちがあんな行動に出るとは思わなかった。……嫌な気分になったよね？」

「……正直言うと、江田さんとのことに介入されたのはいい気分じゃないけど、いじめが止まること自体はありがたいことだし。だい

たい、綾のことを怒ったりはしないよ」

しょんぼりと落ち込み、俯く綾に琉奈が語りかける。

更に歯を見せて笑いかけ、綾に対して不快感がないことを強調する。

その笑顔に綾もようやく胸を撫で下ろした。

「にしても、久留井くんが誰も好きにならないってのはなんでだろうね？ あれだけカッコイイならより取り見取りだろうに」

「なんでだろうね、ホントに？」

綾の問いかけに、先ほどの誠一の言葉を脳裏で反芻させながら、琉奈は首を捻る。

「心に決めた人がいる、とか？」

「それだと誰かは好きってことでしょ。誠一先輩は誰も好きにならないって言うてたから、それはないんじゃない？」

「だよね……。何だろ？ トラウマ的な何かがあつたのかな？」

いくら話し合ったところで結論は出ず、二人はただ首を傾げるしかなかった。

疑問（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

思念

1 - 14

それから何事もなく過ぎ去った数日後の日曜日。

布団の中で惰眠を貪っている飛鳥川琉奈の携帯電話がリズムミカルな電子音を奏で、着信を知らせる。

琉奈は布団に包まったまま、ベッドの上から机に手を伸ばし、手探りで携帯電話を探す。

しばらくして無事携帯電話を手にした琉奈は、二つ折り携帯電話を開き、ディスプレイに視線を落とす。

電話着信、という文字の下に表示されているのは電話番号のみ。名前が出ないということは、登録されていない番号だ。

応答しようか迷ったが、久留井三兄弟からの電話という可能性に思い至り、通話ボタンを押す。

「はい、もしもし」

『あ、琉奈ちゃん？ 久留井誠一です』

予想通り、相手は久留井三兄弟の長男である誠一だった。

「先輩！ おはようございます」

『おはよ。突然だけど、琉奈ちゃん今日ヒマ？』

「ええ、まあ予定はありませんけど」

『ホント！？ じゃあさ、一緒に駅前の何とかパークに行かない？』

「へ！？」

予想外の誘いに琉奈は一オクターブ高い声を上げる。

駅前の何とかパーク、という言葉から琉奈は駅の東口側にある、アミューズメントの大型複合施設を思い浮かべる。誠一が指しているのは多分そこだ。

『前から行ってみたいと思ってたんだけど、彰と二人で行っても盛り上がらなさそうだから。琉奈ちゃんも一緒にどうかなあと思って』

どう?』

「いいですよ」

『マジ!? 良かったあ。そしたら、十一時に駅の東口で。あと、綾ちゃんと浩太くんも誘つとくから! じゃ、後でね!』

「! 先輩、多分二人とも今日は部活が……って切れちゃってるし」
一方的に通話が切られた携帯電話に琉奈は溜息をついた。

待受画面に表示されている時計がさしている現在の時刻は九時三十二分。

駅までは徒歩十分ほどで着くが、早めに外出の支度しておくに越したことはない。

琉奈はベッドから降り、顔を洗いに洗面所へと向かった。

十時五十三分。

琉奈が駅の東口に到着すると、そこには既に琉奈以外のメンバー

久留井誠一、久留井彰、松下綾、秋川浩太 の姿があった。

「綾と浩太は部活どうしたのよ?」

「風邪って言ってサボっちゃった」

「俺は親戚に不幸つつつといた」

目を丸くしながら駆け寄る琉奈に、綾と浩太がそれぞれ説明する。

「おはよ、琉奈ちゃん」

「おはようございます、飛鳥川先輩」

「おはおうございます。ごめんなさい、お待たせしちゃって」

「うっん、大丈夫だよ。まだ約束の時間まえだし。じゃ、行こっか」
!

明るい口調で誠一が言う。その声をきっかけに歩き出す五人。
アミューズメント施設へ向かう途中、琉奈の脳裏を一つの疑問が過ぎつつが、すぐに自分の中で答えが見つかったので、それを口にすることはなかった。

何故次男の祥吾がいないのか、と。

きつと今頃、江田留菜と一緒にいるのだろう、と。

「綾、今日はずいぶんと気合入ってるんじゃない？」

ボーリングの受付をしている男性陣から一步離れた場所にいる琉奈と綾。

琉奈は今日の綾の服装　花柄のキャミソールに薄手にピンクのカーディガン、水色から紫色へのグラデーションが鮮やかなフレアスカート　をまじまじと見て尋ねる。

「そりゃね。好きな人に会ったもん。おしゃれくらいするよ」

綾は笑みを浮かべる。にこやかなその顔には、学校では禁止されている化粧まで施されている。

対して琉奈は、水色のキャミソールにグレーのパーカー、細身のジーパンにパンプス、とおしゃれ心があまり感じられないコーデいネットだ。

綾は琉奈を見つめ、やがて溜息をつく。

「琉奈はもうちょっとおしゃれした方がいいんじゃない？　せつかく元がいいのに」

「いいの。しなきゃいけないときはちゃんとするし。それに、今日は体を使うことが多そうだったし」

「琉奈ちゃん！　綾ちゃん！　受付終わったから、シューズとボール選んで！」

二人の会話に割って入った誠一が、二人にボーリング開始の準備を促す。

言われるまま、二人はシューズのレンタルカウンターへと急いだ。

投げられたボールがレーンを一直線に駆け抜け、規則正しく並べられたピンを一瞬にしてなぎ倒す。床に倒れた十本のピンたちはやがてレーンの外に押し出された。

「っしゃ！　ストライク！」

誠一が満面の笑みでガッツポーズを決める。

琉奈と綾が賞賛の拍手を送り、浩太が対抗心に燃える中、次にボールを投げる彰は黙々と準備をする。

「先輩、ボーリング上手いですね！」

隣に座る誠一に綾が声をかける。誠一は満更でもない様子で「そんなことないよ」と答えた。

その間に彰がレーンの前に立ち、ボールを構える。

腰を落とし、両手で持ったボールを二、三度振り子のように前後に揺らして勢いをつけた後、手放す。

よろよろと力なく滑るボールは的確にピンにぶつかり、次々と倒していく。彰の頭上のモニタにストライクの文字が踊る。

「……なんであれで五連続ストライクが取れんのか、不思議でたまないんだけど」

誠一が抑揚のない声で口にした呟きに琉奈、綾、浩太の三人が無言で深々と頷く。

振り返った彰はにやり、と不敵な笑みを浮かべる。

次に順番が回ってきた浩太はすくつと立ち上がり、自分のボールを手にレーンの前へと向かう。

意を決し、浩太が投げたボールもまた一直線にピンへと向かうが、離れた位置にあるピン二本が残ってしまった。

「あちゃー。次は片方を弾くように倒して、残った方を弾いたピンで倒すしかないね」

ぽつんと残った二本のピンを見つめながら誠一が言う。

「……先輩」

「ん？ 何、琉奈ちゃん？」

「今日はお気遣いいただきありがとうございます」

「何が？」

「私がまたトコヨノ国に引き込まれるのを警戒して、私の側にいるために今日誘ってくれたんですね。しかも綾と浩太まで誘ってくれて。本当にありがとうございます」

「……やっぱバレてたのね」

誠一は頭をがしがしと掻きながら、ばつが悪そうに呟いた。

「いつもは祥ちゃんに任せきりだからね。今日は祥ちゃん用事があったし。あ、誤解しないでね！俺は嫌々ガードしてるわけじゃないから！俺たちが勝手に琉奈ちゃんを守りたいって思ってるだけで。気遣いとかじゃなくて、むしろ俺たちのわがままっていうか」
「いえ、嬉しいです。でも、どうして先輩たちはあたしをここまでして守ってくれるんですか？」

琉奈が口にした疑問は、彼女がずっと胸に抱いていたものだ。トコヨノ国について詳しく、他者を守る力も持っているから自分を守ってくれる。

それは分かるが、それにしても休日にもまでこうやって側で見守ってくれるのは何故なのか？

自分を守ってくれるにしても少し必死すぎやしないか？
ずっとそう思っていた。

「ねえ、先輩」

琉奈は誠一の顔を覗き込む。

見てはいけないものを見てしまった。

そう思えてしまうほどに誠一の表情は弱々しく、痛々しく、悲しく、儚げだった。

普段の明るく楽しげな表情とは真逆のそれに、琉奈は思わず彼から顔を背ける。

「他者と違うところがあると、それなりの苦労があります」

誠一の様子を見かね、彰が言う。

「僕たちは先輩の苦しみを理解できます。だからこそ、僕たちはその苦しみを消す手助けをしたいんです」

「……そっか。ありがとっ、彰くん」

琉奈は彰に微笑みかける。

だが、まだ内心納得できていなかった。

誠一のあの表情を見てしまったから。

思念（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

記憶

1 - 15

ボーリングは二ゲーム行い、彰の圧勝という形で終了した。
続いて五人がやってきたのは、同じ施設内にあるカラオケボックスだ。

誠一は率先して受付を済ませ、店員に指定された部屋へと他の四人を誘導する。

「誠一兄さん、歌上手いんですよ」

綾と共に前を歩く誠一に聞こえない程度の声で、彰が琉奈と浩太に言う。

「うん、なんか上手そうな感じがするね」

「僕にボーリングで負けたのが悔しかったのかな」

「え？ それでカラオケかよ？ 確かに言いだしっぺはあの人だったけど」

「いつも兄貴風吹かせてますけど、本当は僕たち兄弟の中で一番負けず嫌いで子供っぽいんです」

小首を傾げた浩太に、彰が苦笑しながら答える。

「……でも、彰くんにとって大好きなお兄さんなんだよね？」

琉奈が言う。彼女には彰の苦笑いが、愛があるゆえのものだと分かっていた。

彰はややはにかみながら、

「ええ。大切な兄です」

とはっきり答えた。

「カオスだよ、これ……」

選曲用の機械を見つめ、綾が呟いた。

「？　どうしたの、綾？」

隣に座る琉奈が綾の手中にある機械のディスプレイを覗き込む。皓々と光る画面の上部にあるのは、『履歴TOP100』の文字。その下には、これまでの二時間に琉奈たち五人が歌った歌のタイトルが並んでいる。

最近発売になった新譜。一昔前に流行した曲。アニメソング。演歌。韓流歌手の曲。懐メロ。ゲームのテーマソング。有名アーティストの人気曲。こどものうた。

共通点のない曲のタイトルが同一画面上に表示されているのを見て、琉奈も「確かに力オスだね」と頷いた。

「綾ちゃん、次の曲入れたー？」

マイクを手にしたまま誠一が尋ねる。「今入れます！」と綾が慌ててタッチペンでアーティスト検索を始める。

その時だった。

琉奈の心臓が一際大きく跳ねた。

全身の感覚が現実と乖離していく。同時に襲いかかってくる、あの感覚。

こんな時に！？

琉奈の心の叫びが聞こえたのか、それとも第六感で察知したのか、マイクを投げ捨てた誠一と彰が琉奈に駆け寄り、彼女に触れる。

隣に座る綾が琉奈にしがみつき、浩太が誠一の服の裾を掴む。

次の瞬間、琉奈たちの眼前の風景が一変した。

琉奈にとっては見慣れた、他の四人にとっては見慣れぬ風景に。

「ここは……アパートか」

室内を見回しながら誠一が言う。

誠一も、彼の意見に「そうですね」と同意する彰も至って冷静に周囲を観察する。

一方、初めて異空間

トコヨノ国に引きずり混まれた綾と浩太

は顔を強張らせ、落ち着きなくあちこちに目を遣っている。

「ずいぶん年季の入ったアパートだね」

一頻り辺りを見回し終えた誠一が漏らした感想に「はい」と琉奈が応じる。

木造と思しき六畳一間のアパートの中心には、ガムテープで脚をぐるぐる巻かれた丸いちゃぶ台が置かれ、その横には万年床と思われる布団がしわくちやのまま敷かれている。カタカタと不快な音をたてながら風を送り出している扇風機の羽はひび割れ、相当年使っていることが伺える。見慣れぬラベルが貼られた空の茶色いビール瓶がフロリングの上や狭い台所など、あちこちに放置されている。強い日差しが差し込む、ひびの入った窓の向こうから絶えず聞こえてくるのは、何匹ものツクツクホウシの鳴き声だ。

「誠一兄さん」

彰が誠一を呼ぶ。

その手には新聞が一部握られている。

「どうした？」

「これを見て下さい。……ここです」

差し出された新聞を受け取り、誠一は彰が指差す箇所視線を落とした。

「……平成十八年八月二十四日？　今から十五年も前じゃん」

「おそらくこの空間の設定が十五年前の八月二十四日なのでしょう。飛鳥川先輩、この日付に何か心当たりはありませんか？」

琉奈は無言で首を横に振る。

平成十八年の八月二十四日という日付に聞き覚えはないし、その日に何か縁がある人物にも覚えはない。

「ひっ……！」

不意に綾が引きつった声を上げ、近くにいた誠一にしがみついた。

「どうしたの、綾ちゃん！？」

「あ、あれ……包丁……！」

体と声を震わせながら綾が指差す先にあるのは、米びつの側にあ

る一本の包丁。誠一は目を凝らし、ようやく綾が恐怖している理由に気付いた。

ゆっくりと包丁へと歩み寄り、摘み上げる。

その場にいる全員が息を呑んだ。

包丁は血みどろだった。血は既に乾いており、どす黒く変色している。

その姿に誰もが戦慄する中、琉奈は頭の中に何か引つかかるものがあるのを感じた。

見覚えがある気がした。血みどろの包丁に。

一体どこで目にしたのか。記憶の森から一枚の木の葉を探し始めようとした時。

「……！」

何かに感づいたらしい彰が厳しい眼で周囲を警戒し、誠一は右手に光の剣を宿した。

「な……何だよ、その剣！？」

誠一の剣を初めて目にした浩太が喚く。綾も驚いた様子で剣を凝視する。

「前にトコヨノ国は魂の力が作用する世界って言ったよね。これもその作用の一つの形なんだ」

「魂の力の作用……？ それでなんで剣が！？」

「僕たちは自分の魂の力を具現化することができんです」

今一つ理解できていないらしい浩太に彰が説明を付け加える。

「普通の人たちはただ体内に溜め、消費していくことしかできない、精神エネルギーとも言うべき魂の力を引き出して操り、武器や防具の形に具現化することで、人に危害を及ぼす魂を散らすことができるんです。僕たちはそういうことが生まれつきできる一族なんですよ」

「！ 彰……！」

突然、誠一が叫んだ。

刹那、どこからか現れた白い光の塊が猛スピードで彰に突進し、

彼の体を壁へと弾き飛ばした。

乱感

1 - 16

「彰くん！」

「……やれやれ。不意打ちって言うのはかなり卑怯な行為だと思うんですけどね」

彰は体勢を崩したものの、すぐに立ち直る。

彼の体の前には光の壁が現れており、彼と光の塊の間に悠然と立ちはだかつている。

「油断しちゃだめだろ、彰」

誠一が言う。その視線は宙に浮かぶ光に注がれている。彰もまた、光を見つめたまま「すみません」と謝った。

「琉奈……あれ、何なの？」

「魂なんだって。多分、あたしを何度もここに引きずり込んでる魂」

「魂！？ あれが！？」

「さてと。一体どこのどなたさんでしょうかね？」

誠一が剣を構える。

彼の声に呼応するかのように、白い光の塊の輪郭が揺らぎ始める。

その時。

「誠一兄さん！」

少し離れたところから周囲の様子を伺っていた彰が鋭く誠一を呼ぶ。

その視線は、白い光の塊でもなければ、誠一でも、琉奈たちでもなく、別のものに向けられている。

「……マジ？」

誠一が茫然と彰と同じものを　琉奈の背後に現れた、新たな光の塊を見つめる。

もう一つの塊は五人の顔を確認するように浮遊した後、急にフラ

ツシユを焚いたように強く輝いた。

あまりの光の強さに目を開けていられなくなった琉奈たちは、反射的に瞼をきつく閉じる。

やがて光が収まり、おそろおそろ目を開けてみると、元のカラオケボックスの中に戻っていた。

トコヨノ国に引きずり込まれる前に入れておいた、彰が選曲した演歌の渋いメロディが流れ、大きな画面の中では一人の女性が崖の上に立ち尽くしている。

「戻って、きたの……？」

事態の変化についていけないらしい綾が誰にでもなく問いかける。

「ええ。どうやら現実世界に強制送還されたようですね。こんなこと、普通はないんですけど。どう思いますか、誠一兄さん？」

彰が更に誠一に問いかける。

「詳しいことは分かんないけど、多分途中で乱入してきた魂が関係してんじゃないかな。普通、一つの空間には一つの魂しか住み着かないのに、同一空間に二つの魂がいたっていうのはおかしいし。そんでもって、おそらく最初に現れた魂が琉奈ちゃんをトコヨノ国に引き込んで原因の魂で、次に現れた魂が琉奈ちゃんをトコヨノ国から現実に戻してくれてる魂だと思う」

「あのもう一つのが、あたしを？」

「間違いないと思うよ。あの魂のおかげで琉奈ちゃんはこっちに帰ってこられてたんだ。問題は、あの二つの魂が琉奈ちゃんにどう関わってるのかってこと」

誠一は光の剣が消え失せた右手を顎に当て、視線を宙に巡らせる。
「彰、どう考える？」

「そうですね……僕の勝手な印象ですけど、初めに現れた魂からは強い憤怒を感じました。おそらく最初の魂は飛鳥川先輩に対して強い怒りを覚えています。もう一つの魂ですが、こちらからも激情を感じましたが、感情の種類は真逆でした。飛鳥川先輩を守らなけれ

ば、という慈愛に満ちた感情が感じられたんです。その辺りがポイントになるのではないのでしょうか？」

「憤怒……慈愛……」

二つの単語を聞いた時、琉奈の脳裏に三つの顔が浮かんだ。

憤怒で思い出されるのは兄の顔。

慈愛で思い出されるのは両親の顔。

しかし、彼らは生者であり、兄はともかく両親が自分をトコヨノ国に引き込むほどの感情を抱いているとは琉奈には思えない。

琉奈の頭は混乱するばかりだった。

「ねえ、平成十八年の八月二十四日って何かあった？」

帰宅後。家族揃っての夕食時に琉奈は思い切って両親に尋ねてみた。

問いかけた瞬間、ビールを呷っていた父親は盛大にむせ、母親は手から箸を滑り落とし、兄は普段以上に鋭い目つきで琉奈を睨んだ。「ど、どうして急にそんなこと訊くの？」

母親が言う。平静を装ってはいるが、動揺しているのは誰の目から見ても明らかだ。

怪しすぎる。

琉奈は内心ひとりごちる。

「別にどうってことはないけど、訊いてみただけ」

「そ、そうなの。何かありましたっけ、お父さん？」

「さ、さあ……どうだったかな？ 誰かの誕生日だったかな？」

必死にその場を取り繕う両親に不審の眼差しを向ける琉奈。

しかし、これ以上訊いても今は何も話してくれそうにないので、更に問い詰めるのはやめることにした。

現代にはインターネットという便利なものがある。明日、学校のPCで調べれば何か分かるはずだ。

そう決意する琉奈を、兄はじっと見つめていた。

久留井三兄弟の次男である久留井祥吾が帰宅したのは、兄の誠一と弟の彰、母親の恭子が夕食を済ませ、片づけまで終えた午後九時過ぎのことだった。

「遅かったね、祥ちゃん。……なんか疲れてない？」

弟を出迎えた誠一は、祥吾の顔を見るなり眉間に皺を寄せた。

「そりゃ疲れるよ、ずっと外にいたんだし。やっぱり家は落ち着くね」

「祥吾」

苦笑しながら兄の横を通り過ぎようとした祥吾の腕を誠一が掴み、引き止める。

「どうした？ 何があった？」

尋ねる誠一の声色は優しいが、誤魔化しを許さない厳しさも孕んでいる。

祥吾はその顔から一切の笑みを拭い去り、深い溜息を零す。

「……あの人、すごくしつこかったから。だから、ちよつと自虐ネタに走ったんだ。そしたら……思いのほか精神的にダメージ食らっちゃって」

「自虐って、まさかお前……」

「なんで俺、こういう時は不器用なのかな？ なんてかな？ ……」

ねえ、兄貴。俺ってなんでこうなんだろう？」

無理に口角を釣り上げて唇を歪め、不自然に笑う祥吾。

繰り返し兄に疑問を投げかけるその声は、ところどころ震えている。

誠一は何も言わず、俯く弟の頭を抱きしめた。

「きゃっ！ 兄さんたち、そういう仲だったんですか！？ こんなに長く一緒に住んでたのに気付かなくてすみません！」

「「違うわ!!」」

通りかかった弟の勘違い発言に対する二人の同時ツッコミが久留井家にこだました。

依存

1 - 17

翌日。月曜日。

二年A組の教室へと足を踏み入れた飛鳥川琉奈は、室内に普段とは異なる、不穏な空気が充満していることに気付いた。クラスメイトたちは皆、数人で固まり、遠巻きにある人物を見ながら小声で何か言い合っている。

四方から注目されているのは、久留井祥吾。

「アスカ！ ちょっと！」

眉間に皺を寄せ、ドア付近に立ち尽くしている琉奈の腕を誰かが強く引く。

「！ 綾、これ何なの？」

琉奈は自分の腕を引いた人物 松下綾に尋ねた。

祥吾のモチつぷりに嫉妬していた男子生徒たちはもちろん、今まで散々祥吾に付きまとい、事あるごとに黄色い歓声をあげていた女子生徒たちまで祥吾から離れ、こそこそと何か話し合っている。

一体これほどの変化を及ぼすほどの何が祥吾にあったのか、琉奈には皆目分からなかった。

「これじゃまるで久留井くんがいじめられてるみたいじゃん」

「それがね……その、「久留井祥吾はイケメンなのに、男としては役立たず」って噂が朝から流れてんの」

「は！？」

琉奈は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「あたしがその噂を聞いたのは、新聞部の同級生から。その子はうちのクラスじゃないから、多分他のクラスにもちらほら広まっていると思う」

「そっなの？ ていうか、なんて下世話な噂……」

男として役に立たないとはどういう意味なのか、さすがの琉奈にも分かる。

考えれば考えるほど辟易し、琉奈は肩を竦めた。

何故そんな噂が広まってしまったのか。

誰がそんな噂を流しているのか。

「……ねえ、綾、もしかして」

考え始めてすぐにあるクラスメイトの顔が脳裏に浮かび、琉奈は綾に声をかける。

綾も同じ顔が浮かんでいらく、二人は教室の隅で他のクラスメイトたちと話している一人の女子に視線を向けた。

妙にすっきりした表情で談笑している彼女の名前は、江田留菜。

昨日祥吾と一緒に出かけていただろう女子だ。

「こんなことするの、あの人ぐらいしか思いつかない」

「だよ。アスカにも嫌がらせしたし。あんな噂流すってことは、よっぽど酷いふられ方したのかな？」

琉奈と綾に見られていることに気付いていないらしい江田留菜はいつもの取り巻き面々と楽しそうに会話している。

一方、不名誉な噂を流されている祥吾は周囲の様子など全く気にすることなく、革のブックカバーをかけた文庫本を熟読している。

ホームルームの時間が近づき、二年A組の生徒たちは続々と自分の席へと戻る。

「お、おはよう、久留井くん」

「あ、おはよ、飛鳥川さん」

琉奈が声をかけると、祥吾はいつもと変わらぬ様子で挨拶を返す。「昨日はボーリングとカラオケ行ったんだって？ 楽しかった？」

「う、うん。彰くん、ボーリング上手だね。先輩も歌上手いし」

「彰の投球フォーム、ふざけてるでしょ？ あれでストライク連発っておかしいよね」

明るく微笑む祥吾につられ、琉奈も昨日の彰のボーリングを思い

出して笑う。

「カラオケでは大変だったみたいだね。みんな怪我とかなかった？」

「うん。先輩と彰くんのおかげで無事だったよ」

「そっか、良かった。八月二十四日だけ、あの日のことは何か分かった？」

「……ううん、何も」

「そうなんだ……。多分飛鳥川さんの身に起こってることと何か関係あると思うんだけど」

「それより！ 久留井くんは大丈夫なの？」

琉奈と祥吾の会話に綾が口を挟む。

すぐに綾が言わんとしていることを察したらしい祥吾は、笑顔を崩すことなく「大丈夫だよ」と明言する。

「俺は別に気にしてないし、大丈夫なんだけど。……このこと、あの人の耳に入ってなきゃいいけど」

三時間目の授業が終了し、数学教師が去っていった。

次の授業が始まるまでの十分間は休憩時間となる。

その短い休憩時間中に事件は起きた。

各々仲のよい友人の席に集まって話したり、次の授業の準備をしたりしている教室に、一人の男子生徒がやってきた。

大半のクラスメイトたちには見知られていないだろう彼はドアを開けるなり、真っ直ぐに江田留菜へと歩み寄る。

彼女を見つめるのその目に激しい怒りの炎が宿っているのは、誰から見ても明らかだった。

自分の席で次の授業の予習をしていた祥吾は彼の姿を見るなり、「ほら来た！」と形の良い唇から漏らし、すぐさま立ち上がる。

「あんたが江田さん？」

「そ、そうですけど……。あなたは？」

「あんた、俺の弟に何してくれてんの？」

江田留菜の問いを無視し、男子生徒 久留井誠一が抑揚のない声で、江田留菜を見下ろしながら言い放つ。

圧倒的な威圧感に江田留菜は言葉を失い、茫然と誠一を見つめる。

「なあ、あんた、俺の弟に何してんの？」

「あ……あの……」

「何？ よく聞こえないんだけど？」

「兄貴！！」

祥吾が誠一と江田留菜の間に割って入る。

「！ 祥ちゃん！」

「頼むから落ち着いてよ、兄貴。俺は大丈夫だから、兄貴がこの人にキレル必要ない。分かった？」

「けど、こいつは……」

「誠一兄さん」

有無を言わせぬ祥吾の強い口吻に、誠一は返そうとした言葉を飲み込む。

「これは俺が招いた事態なの。十分想定もしてた。怒ってくれるのは嬉しいけど……俺は大丈夫だから。誠一兄さんは自分のクラスに戻って」

祥吾が言う。反論を許さぬ強い語気に気圧され、誠一は「分かったよ」と渋々祥吾に同意する。

「心配してくれてありがとう」

「……ん」

誠一は微笑み、祥吾の頭を撫でた。

そうして無言で二年A組の教室を後にしようとした時。

「祥吾兄さん！ 大丈夫ですか！？」

慌てて教室に駆け込んだきたのは、中等部の制服を着た長身の男子生徒。

彼の姿に誠一と祥吾は思わず苦笑した。

「落ち着いてよ、彰」

「そうそう。もう済んだから、帰るぞ」

「へ？　そ、そうなんですか？　なんだ、せつかくマツハ2で走ってきたのに」

残念そうに呟く男子生徒　久留井彰を、「お前は飛行機か」とツッコミを入れた誠一が引き連れ、二人は二年A組の教室から去っていく。

彼らの様子を茫然と見つめるA組の生徒たちの頭上を、スピーカーから流れたチャイムの音色が暢気に通り返っていった。

「あの兄弟、なんか変だよ」

全ての授業とホームルームが終わった清掃の時間。

やる気なく箒で教室のごみを集めていた秋川浩太がそんなことを口にした。

「変って何が？」

隣で塵取りを手に行っている琉奈が言う。

「なんか仲良すぎっつーか、べったりしすぎっつーか。俺も兄貴いるけど、休日まで四六時中一緒にいないし、もし俺が久留井と同じ状態になったとしても、うちの兄貴はあんなふうには教室来たりしないよ」

「あたしも同感」

琉奈と浩太の会話に綾が割り込む。

「あたしも妹いるけど、姉妹でもあそこまでべったりしないよ。べったりっていうか、互いに依存し合ってるように見えるね、あの三兄弟は。でも、誠一先輩カッコ良かったなあ」

教室に突入してきた誠一の姿を思い返し、うつとりとした目で宙を見つめる綾の横で、琉奈は「依存か……」と彼女の言葉を繰り返した。

事実

1 - 18

松下綾曰くの久留井誠一二年A組突撃事件から数日後。

平成十八年八月二十四日についての情報は得られぬまま、けれど穏やかな飛鳥川琉奈の日常を破ったのは、幼馴染である秋川浩太から来た一通のメールだった。

放課後、部活へ向かおうとする綾と軽く談笑をしていた琉奈の元にそのメールは届いた。

内容は『今すぐコンピューター室へ来い』という、至ってシンプルなものだった。

コンピューター室は高等部の特別棟四階にある。PCおよそ五十台が並んでおり、放課後は生徒たちがPCを使えるように開放されている。

詳しいことは分からぬまま、とりあえず琉奈は特ダネの匂いがすると言いつける綾と共にコンピューター室へと急いだ。

「あれ？ 琉奈ちゃんと綾ちゃんじゃん！」

コンピューター室へと向かう途中、琉奈たちは久留井誠一・彰兄弟と鉢合わせした。

「もしかして誠一先輩たちもコンピューター室に？」

「うん、祥ちゃんに呼び出されて」

「久留井くんにですか？ あたしたちは浩太に呼ばれたんですけど。一体なんですかね？」

「とにかく今はコンピューター室へ急ぎましょう。詳しいことは後でお二人から聞けばいいですし」

彰に促され、四人は共にコンピューター室へと向かった。

コンピューター室のドアを開けると、数人の生徒たちがPCを使

用しており、その中に琉奈たちを呼び出した張本人である秋川浩太と久留井祥吾の姿もあった。

「どうしたの、浩太？ 急に呼び出すなんて。ていうかあんた部活は？」

「見せたいものがあるんだ。これ見て」

歩み寄る琉奈の問いに答えることなく話を進める浩太。

琉奈は彼が指差す画面を覗き込む。彼女の後についてきた綾、誠一、彰たちも同様にモニターに目を遣る。

「これは……！？」

「秋川くんが見つけたんだ。俺たちだけで調べるのも限度があるし、秋川くんはよくパソコン使うつて聞いてたから、ここ何日か協力してもらつて。で、調べてたら出てきた記事だよ」

祥吾が説明する記事とは、今PCのモニターに表示されている、平成十八年八月二十六日付の、一件の刺殺事件の小さな記事だ。

『首を刺された夫婦の遺体発見 A市のアパート

26日午後3時5分頃、A市の市営アパート3階にある穂積悟さん方で、男女とみられる二体の遺体が発見された。遺体は穂積悟（30）と妻の明美さん（29）と確認された。二人は首を刺され殺害されたとみられる。遺体の状態から、死後2〜3日経過している模様だ。なお、長女（2）は無事だった。警察は殺人事件として捜査を進めている。』

「事件の日付が二十六日じゃん。二十四日じゃないけど」

「よく読んでよ。死後二、三日経過つてあるでしょ？ だから、この夫婦の遺体が見つかったのは二十六日だけど、亡くなったのは二十四日って可能性もあるじゃない」

祥吾の返答に、誠一は「なるほどね」と頷く。

「事件発生から発覚までタイムラグを考えないで、平成十八年の八月二十四日に起こった事件についてだけを調べてたから何も見つか

んなかったんだよ。調べる日付を広げた結果、他にも何件か似たような事件がヒットしたんだけど、この事件に絞ったポイントは生き残った二歳の女の子。今から十五年前に二歳だったってことは、今は十七歳になってる。飛鳥川さんの年齢と合致するでしょ？」

「それは、そうだけど……そうじゃなくて」

震える声で答える琉奈は酷く動揺していた。

年齢が合致しているのはもちろんだが、それ以上に琉奈を混乱させたのは、記事の中にある「長女」の二文字だ。

もしこの記事の中にある子供が自分であるとするならば、自分はおかしい。

「！ アスカ、大丈夫？」

パニックを起こしかけている琉奈に気付き、浩太が声をかける。

琉奈は「大丈夫」と返そうとしたが、口をばくばくと魚のように動かすことしかできなかった。

とてもじゃないが、嘘でも「大丈夫」などと言える状態ではなかった。

「！ アスカ！！」

浩太の呼びかけに応じることなく、琉奈は脱兎のごとくコンピュータ室を出ていった。

「……どうやら作戦失敗だみたいだね、秋川くん」

祥吾の台詞に浩太が「そうだな」と応じる。

「作戦？ 作戦って何なの、祥ちゃん？」

「いや、まず年齢に注目させて、長女云々っていうのは後からゆっくり説明していこうって秋川ちゃんと話してたんだけど……鋭いね、すぐ気付かれちゃった」

「なにに、なんで長女ってところがダメなの？」

「頭悪いですね、誠一兄さん」

「なにに！？」

「長女ってことは、この生き残った女の子は死んだ穂積夫婦の娘ってことになるじゃないですか。で、今のご両親は本当の親じゃない

つてことにもなりますし」

「……あつ！」

彰に指摘され、ようやく事態の深刻さに気付いた誠一は一際大きな声を上げ、手を打つ。

「あたし、アス力追いかけてきます！」

「うん、お願い、松下さん」

祥吾の後押しを受け、綾は琉奈を追ってコンピューター室を後にする。

残った男四人は再びPCのモニターに向き直る。

「この事件の続報ってないの？」

「新聞の地方版には載ってたかもしれないけど、ネットで探した範囲では何も……。なんせ古い事件だし、他の凶悪事件の陰に隠れちゃって」

苦々しげにモニターを見つめ、時折スクロールバーを上下に繰り返して動かしながら浩太が言う。

「本当にこの長女っていうのが琉奈ちゃんなのかな？」

「可能性は十分あると思いますよ。飛鳥川先輩の本当の両親が同一の部屋で死んだのなら、二つの魂が同一の空間にいたのも納得できます。ただ、父親の魂か母親の魂か分かりませんが、本来子供を保護すべき親の魂が子供をトコヨノ国に引きずりこんで攻撃までする、というのが気になりますね。その点を解明するためにも、事件の経緯をもっと詳しく知るべきですね」

「……飛鳥川さんには辛い思いをさせちゃったね」

刺殺事件やトコヨノ国での出来事について考察する兄弟たちの横で、祥吾は誰に聞かせるでもなく静かに呟いた。

琉奈の姿は二年A組の教室にあった。

「アス力……」

「ごめんね、取り乱したりなんかして」

窓から差し込む西日によって橙色に染め上げられ、普段と違う顔

をしている教室は、綾にはトコヨノ国のように別次元なものに感じられる。

そんな空間で唯一人、自分の席につき、机上の鞆に視線を落としたり、たまたま琉奈が謝った。

「仕方ないよ。だって……あんなこと知ったら、誰だってそうなるよ」

「でもね、あたし……心のどこかでずっと思ってたんだ、小さい頃から」

「アス力は薄々分かってたんじゃないかな」

琉奈の心情に思いを巡らし、沈黙する久留井三兄弟に浩太がそう切り出した。

「それってどういうこと、浩太くん？」

「うちでも何度か話題に上がったことがあるんですけど……あいつ、他の家族の誰とも似てないんです」

「……!……」

「強いて言えば母親に多少似てると思うけど、それでも二人が並んで立てばようやく分かるくらいで」

「お父さんとは全然似てないし、もちろん父親似の兄とも似てない。近所のおばさんとか、友達の親とか、無神経な人たちからも似てないわねって言われたことが何度かあったの。だから、確かにシヨックだったけど、やっぱりねって気持ちもあるんだ」

淡々と話す琉奈。

綾は琉奈の頭を無言で撫でる。

「今日はつきりさせるよ。そして、何かが起きる前にトコヨノ国のことも解決しなくちゃ」

真実

1 - 19

「お父さん、お母さん。あたし、二人の実の娘じゃないの？」

夕食後。一家団欒の時間。

ソファで一人テレビを見ている兄を背に、両親と共にお茶を飲んでいる最中、琉奈はそう切り出した。

両親は茶を啜るのをやめ、「どうしてそんなこと言うの？」と母親が琉奈に問いかける。

「八月二十四日のこと調べてたら刺殺事件の新聞記事を見つけたの。そしたら、そこに長女って文字があった。あたしは本当は穂積って夫婦の娘なの？」

問いを重ねる琉奈に対し、両親は沈黙する。

「ねえ、教え」

「もういいだろ」

琉奈の言葉を遮ったのは、彼女の背後にいた兄だった。彼は更に続ける。

「もう話せばいいだろ、二人とも。ここまで知られた以上、隠し通せねえだろ」

「兄さん……」

「俺はお前の兄じゃない。俺はお前の従兄弟だ」

「従兄弟……！？」

「母さんの妹の名前は明美。亡くなった穂積明美さんは母さんの妹なんだ」

絶句する琉奈に父親が告げる。隣に座る母親の目には涙が滲んでいる。

「明美ちゃんが悟と結婚したのはお前が生まれる一年前のことだった。結婚当初の二人は幸せそのもので、お前を妊娠していると分かっ

た時、二人は本当に幸せそうだった。……本当に幸せだったんだ、あの時の二人は」

「あの時は？ その後何があったっていうの……？」

「お前が生まれてからしばらくして、悟が勤めていた会社が倒産したんだ。その後の再就職もうまくいかず、悟は次第に荒れ始めた。昼間はギャンブルに明け暮れ、夜は延々と酒を飲み、やがて明美ちゃんに手を上げるようになってしまった」

「典型的な暴力夫だな」

兄が横槍を入れる。琉奈も内心確かに、と思った。

テレビドラマや生き別れた肉親を探す番組の再現映像などでは見たことあるが、それが現実に、しかも自分の実の父親がそんな人間だったとは。

シヨックだった。

「悟くんは初めはそんな人じゃなかったのよ」

それまで沈黙を貫いていた母親が口を開く。

「昔は明るくて、礼儀正しくて。この人なら明美を幸せにしてくれるって、私もおじいちゃんたちも信じてたの。なのに……」

「明美ちゃんは頑張り屋さんで、他人に対して気を遣いすぎるところがあった。俺たちが悟がしていたことの全て知ったのは、事件が起きた後だった。もっと早く気付いてあげていれば、あんなことにはならなかったのかもしれない。明美ちゃんにも、お前にも申し訳ないことをした」

「一体何があったの？ どうしてあたしの実の親は殺されたの？」

母親の言葉を引き取り、語り続ける父親に琉奈が問う。

父親は重苦しい溜息を一つ、何かを決意するように吐き出し、話し始める。

「平成十八年八月二十六日、近所の人からの通報で、悟と明美ちゃんの遺体が見つかった。二人の死因は刺し傷による失血死だった。お前は多少腹を空かしていたものの、至って元気だった。

二人を殺した犯人は誰なのか、警察が捜査した結果、分かったの

が今から話すことなんだが……お前にとってすごくショックな内容だと思う。それでも全て聞きたいか？」

父の言葉に琉奈は無言で頷いた。

ショックな内容、という言葉にしり込みをしなかった訳じゃないけれど、それ以上に真実を知りたいという気持ちが強かった。

この気持ちが強いうちに全てを聞いておかなければ。

琉奈はそう感じた。

「……分かった。お前の覚悟を尊重しよう。」

まず、明美ちゃんを殺したのは悟だ。明美ちゃんは刺される前、全身を殴られていた。悟の手には、明美ちゃんを殴った時に負っただろう傷もあった。遺体の検視結果から、死ぬ直前まで悟は酒を飲んでいたことも分かつてる。おそらく酔った勢いで明美ちゃんを殴り、包丁で刺し殺したんだろう。

そして、悟を殺した犯人だが……包丁からは二種類の指紋が出た。一つは悟のものと一致した。そしてもう一つの指紋は……琉奈、お前のものと一致した」

「……!?」

「あくまで状況から推理した警察の見解だが……明美ちゃんを殺した後、そのまま眠ってしまった悟を、琉奈が明美ちゃんの体から引き抜いた包丁で刺して殺したんだろう」

琉奈は告げられた事実の大きさと重さに茫然とし、目を見張り、体を震わせる。

「あ……あたしが……殺し、た？」

「お前を引き取ってしばらくした頃、母さんが包丁を持つのを見て「それでお魚を動かなくするんだね」と言ったことがあった。おそらくお前は明美ちゃんが刺し殺されるのを遠くからか、明美ちゃんの腕からか見ていて、包丁イコール生き物の動きを止める道具だと思っただ。だから、母を殴る父を止めたい一身体母の首から包丁を抜き取り、寝ている父の首に突き立てたんだ。」

決して殺すつもりはなかっただろう。まだ死というものを理解で

きるはずがなかったからな。それに、悟の暴力は時々お前にまで及んでいたんだ。父を止めたいと思って当然だよ。だから、お前はちつとも悪くないんだ、琉奈」

「で、でも……でも！ あたし……あたしが……あたしが！ ホントの父を殺したんだ！ この手で！」

「琉奈！」

「この手！！ この手で！！ ……殺したんだあ……！！」

「！！！！」

両親が気付いた時には既に遅かった。

琉奈は椅子から立ち上がるなり、目にも留まらぬ速さで自宅から駆け出していった。

だからか。

あたしが殺したからか。

あたしに殺されたからか。

だから父の魂は怒りに満ちていたのか。

恨みを晴らしたいからトコヨノ国に引きずり込んでいたのか。

あてもなく走り続けながら、琉奈は頭の隅で考える。

普通じゃないことが起きている自分に、普通じゃない過去があることは覚悟してるつもりだった。

けど、ちょっとこれはハード過ぎ。

内心ひとりごちる。

涙が溢れて止まらない。

なんで泣いているんだろう？

両親が実の親じゃなかったから？

実の親が死んでいたから？

自分が父親を殺したから？

「飛鳥川さん！？」

唐突に名前を呼ばれ、琉奈は反射的に立ち止まる。

眼前にいるのは、スーパーで買い物を済ませたばかりらしい久留井祥吾だった。

いつの間にか、やや離れているはずの彼らの生活圏にまで来てしまっていたようだ。

「ちよつと、どうしたの！？ 大丈夫！？」

何か拭く物はないかとジージパンのポケットを漁りながら駆け寄ってくる祥吾に琉奈は縋りつき、声をあげて泣いた。

子供のように、感情の向くままに。

祥吾は黙って琉奈の背中に手を回し、優しく撫でた。

決意

1 - 20

久留井家の人々は、祥吾に連れられてやって来た、目を真っ赤にした琉奈を暖かく自宅へ招き入れた。

優しく、一体何があったのか問われ、琉奈は少しずつ、ゆっくり話し始めた。

自分が二歳の時にあった出来事を。

父が酔った勢いで母を殺したこと。その父を、殺すつもりはなかったとはいえ、己が手に掛けたこと。やはり今の両親は本当の親ではなかったこと。

飛鳥川夫婦から知らされた真実の全てを彼らに話した。

彼らは黙って琉奈の告白に聞き入った。

「てことは、やっぱりあの二つの魂は琉奈ちゃんのご両親のものだったんだね」

全てを聞き終え、誠一が言う。

「ですね。先輩に攻撃を仕掛けたのが父親の魂で、あの時僕らをトコヨノ国から脱出させたのが母親の魂と考えるのが妥当でしょう。

父親の魂は殺された恨みから先輩をトコヨノ国に引きずりこんで殺さんとし、母親の魂は先輩を守るためにトコヨノ国から脱出させていた。そういうことでしょうね」

「飛鳥川さんはどうしたい？」

祥吾の言葉に琉奈は首を傾げる。

「君の父親の魂をどうしたいかってこと。俺たちは父親の魂を散らすことができるけど、君の父親の人格が魂に存在している以上、君の許可なしに散らすことはできないから」

「散らして欲しい」

琉奈は即答した。

一切の逡巡のない返答に、久留井家一同は少々面食らう。

「話してるうちに落ち着いてきて、冷静に考えられるようにんつただけ、自分の本当の親とはいえ、人殺しのろくでなしに成り下がった人間の魂なんだよね。それなら、他の魂の為になるように散らしてしまった方がいんじゃないかなって。」

正直、穂積悟が本当の父親って言われても実感がないの。あたしの両親は今あたしが住んでる家にいるし。あたしが穂積悟を殺してしまっただってというのはショックだし、彼に殺されても仕方ないのかもしれないけど、あたしはまだ生きたい。殺されないで済む方法があるのなら、そっちを取る」

琉奈がきっぱりと言い放つ。

その言葉は全てが揺るぎない強さを持っており、迷いなど欠片もないことが伺えた。

「琉奈ちゃんがそこまで言うなら、俺らは協力すうしかないな」

「だね。力になるよ、飛鳥川さん」

「僕たちが全力でサポートしますよ」

三兄弟の力強い申し出に、琉奈は「ありがとう」と、ようやく彼らに笑顔を見せた。

「……それで、いつ父の魂を散らしてもらえるんですか？」

琉奈の素朴な質問に、それまで頼り甲斐に溢れていた三兄弟は一様に、石化したように動かなくなってしまった。

「昔はね、現世の人間をトコヨノ国に送り込める、巫女と呼ばれる人がいたんだけどね」

そう話しながら歩み寄ってくるのは、三兄弟の母である恭子だ。

彼女が手にしているトレーには、緑茶とマドレーヌという不思議な組み合わせが人数分並んでいる。

「残念ながら、今はその力を持つ人がいないのよ」

「ということは、向こうがあたしを引きずり込むのを待つしかないってことですか」

恭子の言葉の真意を察し、琉奈は肩を落とす。

「でも、できるだけのことはするから」

「そうそう！ 俺も祥ちゃんも彰も側で、いつ引き込まれても対処できるようにするから！」

「はい。ありがとうございます、先輩」

琉奈は微笑むが、どこか不安を残した笑みだ。

「……あら、もうこんな時間。どうする、飛鳥川さん？ 帰るなら送らせるけど」

恭子の提案に、琉奈は俯いて考えあぐねる。

確かに三兄弟に送ってもらえばまだ十分安全な時間ではある。けれど、今は帰っても両親や兄の前でどんな顔をすればいいのかわからない。

「なんなら泊まってく？」

琉奈の心中を察し、恭子が言う。

「……いいんですか？」

「服は私のでよければ使ってもらって構わないし、お風呂は……この子たちが使った後だから、シャワーでいいなら。遠慮することはないわよ」

「……じゃあ、お言葉に甘えていいですか？」

「もちろん！ 子供なんだから、大人には甘えないと」

「大人あ？ 恭子さんが？」

「少なくとも、あんたよりは大人よ、誠一。……あんた、飛鳥川さんのシャワー覗き見したりしたらダメよ？」

「そんな、するわけないじゃん！ しないからね、琉奈ちゃん！」

恭子の忠告を否定しつつ、思わず身構えた琉奈に弁明する誠一だが、恭子は更に追い討ちを掛ける。

「そう？ あんたの本棚の奥にある本の数々を見る度に、あたしはあんたの性癖が心配で心配で」

「え？ それはこの前クローゼットの中に移動させたはずッ！
！」

誠一は慌てて両手で口を塞ぐが、時既に遅し。

「彰、今度はクローゼットの中らしいわよ」

「ありがとうございます、母さん」

「なんっつー母親だ……」

誠一の軽口に対して十倍以上の仕返しを成功させた恭子を見つめ、祥吾が呟く。

「飛鳥川さん、こいつらは私が見張ってるから、安心してシャワー使ってね。親御さんには私から連絡しておくから。今日はここを我が家だと思って寛いでね」

思惑

1 - 2 1

「恭子さん」

琉奈の寝具一式の準備を終え、客間を後にしようとした恭子を呼び止める声がした。

声の主は、彼女の正面に立っている誠一だ。

「どうしたの、誠一？」

「琉奈ちゃんの父親の魂を散らす話だけど、由香理さんに来てもらったらどうか？」

誠一の言葉に恭子は表情を曇らせた。

「一族の中でもどちらかといえば力はある方だし、あの人なら年の功でうまくやってくれそうじゃん」

「それはそうかもしれないけど……大丈夫なの？」

誠一の側に歩み寄り、恭子は彼の頬に触れる。誠一は心配しないで、とても言うように微笑む。

「琴子さんでもできるんだろうけど、その場合、祥ちゃんのメンタルが心配だし。由香理さんなら祥ちゃんと彰は好かれてるしさ。…

…俺なら大丈夫だよ」

「……ごめんね。私に力が残ってれば、あなたに辛い思いさせないで済んだのに」

「ないものねだりしても仕方ないじゃん、恭子さん。これくらいは耐えないと。俺は兄貴なんだから」

「ごめんね、誠一」

再度謝った恭子が誠一を抱きしめる。

誠一は何も言わず、恭子の腕の中で深く、ゆっくり息を吸った。

「シャワーありがとうございました。パジャマまで用意してもらっ

ちゃって……」

入浴を終え、リビングへ戻ってきた琉奈がキッチンにいる恭子に声を掛ける。

「いいのよ。あ、さっきご両親に連絡しておいたから」

「ありがとうございます、何から何まで……」

「すごく心配なさってたから、なるべく早めに帰ってあげてね」

「……はい」

まだどんな顔で両親と会えばいいのか分からない。

けれど、きちんと向かい合って話す必要があるだろう。

「ねえ、学校でのあの三人ってどんな感じなの？」

「学校で、ですか？　ここに居る時と変わらないですよ。いつも仲が良くて、楽しそうで……」

あの兄弟、何か変だよ。

いつだったかに浩太が言った台詞が、不意に琉奈の脳裏に蘇る。

仲が良すぎだ、と。べったりしすぎだ、と。依存しているようだ、と。

あの時、浩太と綾はそう話していた。

琉奈自身は兄妹の関係が希薄なのでよくは分らないが、二人の話を聞く限り、彼らの関係の強さは普通ではないらしい。

「仲が良すぎるのも考えものだけだね」

□ごもった琉奈が言おうかどうか迷っている事柄を察したのか、

恭子が苦笑しながら切り出した。

「親である私が言うのもあれなんだけど……あの三人は自分たちの生まれた環境や能力のせいで、普通と違う育てられ方をしてきたの。多分、一般の人より過酷な、ね。そんな中で三人は互いに支えあって生きてきたの。きっとその癖が今も抜けないのよね。誰か一人が倒れそうになったら、残った二人が全力で支える……他人を頼らずに。そういう生き方しか知らないのよ」

琉奈は話を聞き、過去のある光景を想起した。

二年A組の教室に乗り込み、江田留菜に詰問した誠一と、わざわざ

ざ中等部から駆けつけた彰の姿。

あれはきつとピンチ 本人はそう感じていなかったが に陥った祥吾を助けようと、反射的に起こした行動だったんだろう。

「何かと手が掛かるけど、みんな根はいい子たちなの。これからも仲良くしてやってね」

そう琉奈に頼んだ恭子の笑みはどこか切なげだった。

翌朝。

久留井祥吾が起床し、リビングへやってくると、そこにあったのは朝食の準備をする恭子の姿のみで、客人である飛鳥川琉奈の姿はなかった。

「おはよ、恭子さん。飛鳥川さんはまだ寝てるの？」

「もう帰ったわよ」

「そうなの？ 朝食食べていけば良かったのに」

「学校行くとて言うから。私服で行くわけには行かないでしょ」

「あ、そっか」

恭子の指摘に祥吾はポン、と手を打つ。

「おはようございます……」

祥吾の背後から、呪いをかける呪文でも唱えるような口調で挨拶してくる声があった。

振り返った祥吾の前にいるのは、超ローテンションの末っ子・彰だ。

「おはよ、彰。相変わらずの低血圧っぷりだね」

半ば呆れている祥吾に、彰は「んむー」と意味不明な返事をする。「誠一はまだ起きてないの？」

「兄貴はいつも通りまだ熟睡中。美女の夢でも見てんのか、めっちゃにやけてたよ」

「私の話が終わったら、即行で現実に引き戻してやりなさい。……」

今度の日曜日、由香理さんが来ることになったから」

由香理、という名前を聞いた瞬間、祥吾は「え？」と小さく声をあげ、彰はそれまで眠気のみより半開きだった瞼を限界まで開く。

「飛鳥川さんにも日曜日開けておいてもらうように言っているから彼女の件、日曜にかたをつけなさい」

「ちよつと待って、恭子さん！ それ、兄貴は」

「知ってるわよ。ていうか、由香理さんを呼ぶように進言したのが誠一なの」

「でも、由香理さんって誠一兄さんのことを毛嫌いしてますよね。

誠一兄さんもそのことを分かっているはずなのに、何故由香理さんをも同じような力を使える人なら琴子さ」

彰は全てを言い終える前に慌てて口を閉じる。が、既にNGワードを口走ってしまった後だった。

「……兄貴が由香理さんでって言ったんだ？」

「そうよ。琴子さんじゃなく、由香理さんでって」

「そっか。……俺、兄貴起こしてくる」

回れ右をした祥吾は足早にリビングを後にし、自分たちの部屋がある二階へ駆け上がる。

祥吾の姿が見えなくなったのを確認した恭子は、引き出しの中からおたまを取り出し、

「いたっ！」

彰の頭を叩いた。

「馬鹿息子」

「すみません……」

祥吾は誠一の部屋のドアを勢いよく開くなり、

「兄貴！！ 朝だよ、起きろ！！」

と声を張り上げた。

ベッドの上で惰眠を貪っていた誠一は頭から被っている布団の間から、自分を夢の国から現実へ強制送還した弟を恨めしげに睨む。

「早く起きないと遅刻するよ?」

「いーんだよ、ヒーローってのは遅れて登場するもんなんだから」

「訳の分かんないことを」

溜息をつき、祥吾は誠一が寝ているベッドの腰を下ろした。

「兄貴が由香理さん呼ばうって言ったんだって?」

「……そーだけど」

「なんであの人なの?」

「別に。ただ、あの人独身だし、あのでかい屋敷で暇してんだろくなって思ったから」

「またそんな毒吐いて」

「いーの。どうせ俺はこれ以上嫌われようがないってくらい嫌われてんだから」

鼻で笑う誠一の体を横切るように、祥吾は仰向けに倒れこむ。

「ちよつと祥ちゃん、重いっス!」

「ごめん」

「なんで祥ちゃんが謝るの?」

「兄貴にとっては母さんと呼ぶ方が気が楽だったのに。気を遣ってくれたんでしょ?」

「……俺は祥ちゃんの兄貴だもん。俺の我慢でどうにかなるくらいなら、いくらでも我慢するよ。それに、男の泣き顔なんて可愛くないし」

「泣かないよ! ……ありがと、誠一兄さん」

誠一は上体を起こし、目元に手の甲を押し当てている祥吾の頭を乱暴に撫でた。

思惑（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

結 束

1 - 2 2

世間的には早朝と呼ばれる時間に帰宅したにも関わらず、両親の姿がリビングにあったことに、琉奈は目を見張った。

「ずっと起きてたの？」

「まさか。ちゃんと寝たさ。けど、俺も母さんもお前がこのくらいに帰ってくるだろうと思ってな」

「……あたしのことなら何でもお見通し？」

「親子だからな」

父の言葉を聞いた刹那、琉奈の胸に小さな、けれど鋭い痛みが走る。

「けど、本当は」

「親だ」

父親が断言する。母親もその言葉に深く頷いた。

「確かに私たちの間に血の繋がりはほとんどないけど、私たちにとってあなたはかけがえのない娘。それは何があっても変わらないわ。だからあなたにも、これから私たちが自分の親だと認めて頂戴」

「……そんなの、当たり前前に決まってるじゃん。あたしにとって、親はお父さんとお母さんしかないよ……！」

琉奈の涙ながらの言葉に両親は安堵の溜息を漏らし、彼女を強く抱きしめた。

「アスカ!!」

「アスカ、大丈夫なの!？」

琉奈が教室に入るなり、松下綾と秋川浩太の二人が一斉に駆け寄

ってきた。

一体何事かと思った琉奈だったが、昨晚家出した後、両親が彼女の行方を特定すべく、久留井家から連絡が来るまで様々な場所に電話を掛けた、という話を思い出し、友人たちの慌てように納得する。「心配かけてごめんね、綾、浩太」

「琉奈が家出したって聞いて気が気じゃなかったんだからね!？」連絡取るうにもケータイも持ってないって言うし!」

「ケータイのこと考える余裕もなくて……。ホントにごめんね、あたしは見ての通り無事だから」

涙目になっている綾や浩太を宥めるように、穏やかな口調で琉奈が言う。

「結局、昨日はどこにいたんだよ!？」

「それが……家出の途中に久留井くんに会って、そのまま久留井くんの家でお世話になっちゃった」

「ええ!？ 久留井くん家に泊まったの!？」

綾が驚きのあまり、琉奈の十倍のボリュームで叫ぶ。

琉奈は慌てて綾の口を両手で塞ぐが、既に綾というスピーカーによつて、琉奈が久留井祥吾の家に泊まったという事実が、教室にいるクラスメイト全員に知れ渡ってしまった後だった。

「く……久留井の家に……!？」

「何ショック受けてんの、浩太？ 久留井くんの家には先輩も彰くんもお母さんもいるの知ってるでしょ？」

「あんだ、まだあの男と関わってるの?」

三人の会話に別の声が突然割り込んできた。

琉奈たちは声の主へと視線を向ける。そこにいるのは江田留菜だ。彼女の姿を目にした途端、琉奈たちの目つきが険しくなる。

「別にいいでしょ、クラスメイトなんだから」

「でも家に泊まるなんて、ただのクラスメイトにしては随分親しいみたいじゃない」

「……まだ久留井くんのこと好きなんだ?」

綾の指摘に江田留菜は頬を紅潮させ、「そ、そんなわけないでしょ!？」と、まだ未練があることが丸分かりな態度で否定する。

「あんな酷いことしといて今でも好きって……よく分かんないなあ」「分からないって何が?」

肩を竦めて呟いた綾に尋ねたのは、登校したばかりの久留井祥吾だ。

「あ、おはよう、久留井くん! 今日のごめんね、声もかけないで勝手に帰っちゃって」

「ううん、気にしないで。俺がぐーすか寝てたのが悪かったんだし」「本当にこいつの家に泊まったのか、アスカ……」

「ごめんね、秋川くん。でも安心して、飛鳥川さんには何もしてないから」

「当たり前だ!」

顔を真っ赤にして憤慨する浩太に苦笑する祥吾。そのくつきりとした大きな瞳がすぐ側にいる江田留菜を捉えることはない。

そのことに耐え切れなかったのか、江田留菜は足早にその場を立ち去る。

小さな背中が遠ざかっていくのを無言で見送る琉奈に祥吾が

「ところで、日曜のことなんだけど」

と突然話しかけた。

「「日曜って何!？」」

祥吾の発言に、鬼すら取って喰いそうな形相で綾と浩太が噛み付く。

「いや、日曜に飛鳥川さんの件の決着を付けようってことになって、その説明をしよう……」

「決着? どういうことなの?」

「……詳しい話はお昼休みにでもしよっか。それでいいよね、飛鳥川さん?」

「うん。ここまできたら、綾と浩太にも聞いて欲しいし」

祥吾に同意する琉奈。

決意を固めた彼女を賛美するように、スピーカーからチャイムが高らかに鳴り響いた。

昼休み。高等部の屋上。

雲一つない、澄み切った蒼穹の下に集まった面々を、その場にいます部外差の生徒たちが凝視している。

設置されているベンチのうち二つを占領している、注目の的となつている集団は、普段屋上をよく利用している飛鳥川琉奈、松下綾に加え、部員との昼食をパスしてやってきた秋川浩太、そして誠一・祥吾・彰の久留井三兄弟の六名だ。

イケメン兄弟として校内で評判の三兄弟は、当然周囲の視線をその身に浴びているのだが、三人とも全く気にすることなく、自然体を貫いている。

却って注目されていない他の三人の方が動作がギクシャクしている。

そんな六人の手元にあるのは、各々の本日の昼食。

琉奈、綾、祥吾、彰の手中には弁当箱があり、浩太はコンビニのパンを、誠一は学校の購買部のパンを手になっている。

「……先輩、それ何パンですか？」

綾が誠一の手になっているパンを覗き込む。

「これ？ これはトリプル焼きパン！」

高らかにパンの名前を告げ、掲げたそのパンの間には、焼きそばとたこ焼きとお好み焼きが少しずつ挟まっている。

「うちの学校の購買はずいぶん変り種のパンを作ってるんだね」

「これで購買のパンの半分は制覇したかね」

呆れ顔の祥吾に、誠一は眩しいくらいの笑顔と共に親指を立てる。一方、同じくパンを手をしている浩太は、至って普通のサンドイッチに口をつける。

「久留井くんたちはお弁当なんだね」

琉奈が目遣った弁当箱の中には、ふりかけがかかったご飯と卵

焼き、ウィンナー、温野菜などのおかずが詰まっている。

「あ、たこさんウィンナー！」

「あげませんよ」

宝物でも見つけたような声をあげた誠一を彰が牽制する。いじわる、と誠一は恨めしげに呟く。

「久留井くんが作ったの？」

祥吾と彰の弁当を見比べながら綾が尋ねる。

彼らの弁当は同じおかずが同じ位置に配置されており、同一人物が作ったものであることが伺えた。

「ええ、祥吾兄さんに作って頂きました。僕は祥吾兄さんの弁当じゃないとお昼食べた気にならなくて」

「恭子さんが作ると、たまにとんでもない弁当になるもんな。その点、祥ちゃんなら安心。料理も上手いし」

兄と弟に立て続けに褒められた祥吾の頬に淡く朱が差す。

「……琉奈ちゃんのはお母さんに作ってもらったの？」

「はい。今日帰った後に急ピッチで」

「……大丈夫だった？」

心配そうに顔を覗き込んでくる祥吾に、琉奈は「うん」と微笑んだ。

琉奈は綾と浩太に、昨日明らかになった自分と、自分の本当の親について話した。

綾は時折口を挟みながら、浩太はずっと無言で、琉奈の話に耳を傾けた。

そして、今の両親とは今までの関係を　どこにでもいる親子の関係を続けていくことも、綾と浩太、三兄弟にも告げた。

「じゃあ、今度は日曜日のことについて説明するね」

琉奈の話が一頻り終わったところで祥吾が切り出す。

「次の日曜日、飛鳥川先輩の件のかたをつけます」

彰はそう明言し、自身の弁当の最後のウイナーを口の中に放り込む。誠一が涙目で「たこさんウイナー……」と呟く。

「方法だけど、うちの一族の一人に当日来てもらって、飛鳥川さんの父親の魂が彼女をトコヨノ国に引きずり込むよう働きかけて、それに相手が乗ってきたところで俺たちも便乗して一緒にトコヨノ国へ行き、魂を散らす。これでいこうと思うんだけど」

祥吾は誠一の手に行っているパンの上に、残っていた自分のウイナーを乗せる。誠一は絢爛たる笑みを浮かべ、救世主でも見るような瞳で祥吾を見つめる。

「一族の人って誰？」

「久留井由香理。僕たちの伯母にあたる女性です」

綾の疑問に答えたのは彰だ。

「彼女はさほど強い力を持っているわけではありませんが、それでもトコヨノ国の魂に何かしら働きかける程度の力があるので、今回来てもらうことにしたんです。既に承諾もしてもらっています」

「それ、アスカに危険はないのか？」

「……正直に言えば、危険がないわけじゃないんだ」

「！？」

率直な意見を口にした誠一を、浩太が鋭く睨みつける。

「以前、琉奈ちゃん父親の魂と対峙してみて、強い魂だつてことが分かったんだ。不意打ちとはいえ、彰を吹っ飛ばしたりさ。それでも俺たち三人でかかれば散らせる自信はあるけど、多少琉奈ちゃんに危害が及ぶ可能性は否定できないんだ。もちろん琉奈ちゃんを守るために全力は尽くすけど」

「……それでも構いません」

誠一の至誠溢れる言葉に琉奈が応える。

「もうトコヨノ国に引きずり込まれることがなくなるのなら、それでもあたしは構いません。だから、力を貸して下さい！」

懇望する琉奈を見つめ、誠一、祥吾、彰の三人は一樣に、力強く頷く。

「なあ、それって俺も行つたらまずい？」

「あたしも！ あたしも行きたい！」

「え？ それは……どうする、兄貴？」

綾と浩太の申し出に困惑した祥吾が誠一に助言を求める。

「うーん……そうだなあ、トコヨノ国と一緒に行くのは許可できないけど、それでもいいなら」

誠一の提案に、綾と浩太は口を揃えて「行きます！」と答えた。

「じゃあ、日曜の朝十時にうちに集合つてことで」

空になった弁当箱に蓋をし、祥吾が言う。

午後の授業の予鈴が決意に満ちた屋上に響き渡った。

結束（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

好嫌

1 - 2 3

数日後。

空を舞う小鳥たちが暢気に互いの歌を聴かせ合っている中、飛鳥川琉奈、松下綾、秋川浩太の三人は自転車に跨り、久留井家にやって来た。

「いらつしゃい。どうぞ上がって」

三人を優しく迎え入れたのは久留井恭子だ。

彼女に促されるまま、久留井家のリビングへと歩を進めた琉奈たちを待っていたのは、どこかいらだった様子の誠一、祥吾、彰の三人。

「お、おはようございます……」

「ん？ ああ、いらつしゃい、三人とも！」

三兄弟の様子に不安を覚えつつ、声をかけた琉奈にこたえた誠一は普段と変わらぬ明るい笑顔を、先ほどまで苛々全開だった顔に浮かべる。

「何かあつたんですか？」

「いや、伯母さんがなかなか来ないもんだから」

恐る恐る尋ねた綾に、祥吾が溜息混じりに答える。

「九時三十分には来て頂くよう伝えておいた筈なんです。約束の時間からこうして二十分経過しても音沙汰なしなんです。困ったものですよ」

祥吾の発言に補足説明をした彰もまた、海よりも深い溜息を漏らす。

「ってことだから、三人ももう少し待ってもらって」

「その必要はないわよ」

誠一の言葉を即行否定した声は、琉奈たちの背後から響いてきた。

鋭く、高圧的かつ威圧的なその声に、琉奈は思わず眉を顰める。

無遠慮に琉奈たちを分け入って三兄弟の前に歩み出たのは、ウェーブのかかったロングヘアが印象的な、目元を大きなサングラスで隠し、派手な柄の入った黒のワンピースを身にまとった中年女性。

「いらっしやい、由香理お義姉さん」

「久しぶりね、恭子。上がらせてもらったわよ。それにしても、また随分狭い家に住んでるのね」

「向こうのお屋敷に比べたら、どんな家も狭くなっちゃうわよ」
ストレートな嫌味に対し、恭子は笑顔で応対する。

「ご無沙汰しています、由香理伯母さん」

「彰！ 元気そうね。祥吾も元気？」

「はい、見ての通りですよ」

「たまにはその元気な顔を琴子に見せに、こっちにいらっしやいな」
祥吾は一瞬、苦々しい表情を浮かべるが、すぐに笑顔に切り替え、
「はい」と返事する。

「……こんにちは、由香理さん」

「ああ、そっか。あんたもいたんだっけ」

「ええ」

「いつの間にかあんたの姿を屋敷で見かけなくなってすっきりした
と思ったら。そう、ここにいたの」

彰や祥吾の時とは違う、誠一への、全く血の通っていない応対に、
琉奈たちは脳裏をハテナマークでいっぱいにする。

「お義姉さん、後ろの真ん中にいる子が電話で話した飛鳥川さんよ」
誠一と由香理の素っ気無いやりとりの間に割って入り、恭子が切り出す。

由香理はロングヘアを靡かせながらくりと振り返ると、サングラスを持ち上げ、琉奈の顔をまじまじと見つめる。

「この子？」

「そう」

「ふうん……。なるほど、確かにトコヨノ国の残滓が体中にこびり

ついでるわね」

「へ!？」

思いもよらないことを言われ、琉奈は思わず素っ頓狂な声をあげる。

「じゃ、準備をするから、みんなどつかで待ってなさい。あ、恭子と誠一はここに残って手伝って」

「え？ 俺え？」

あからさまに嫌そうな顔をした誠一に由香理は、

「テーブルどかしたりっていう力仕事を祥吾や彰にやらせるのは可哀想なもの」

と平然と言い放つ。

誠一は肩を落として、「分かりました」と答えた。

「あの人何なの!？」

待機場所にするにしていた祥吾の部屋に入るなり、綾が叫んだ。

「ちよつと、綾！ 声大きいってば！」

「だって、誠一先輩にあんな言い方……！」

すっかり憤慨している綾を、琉奈がどうどう、と宥める。

「なあ、なんであの先輩はあんなに嫌われてるんだ？」

浩太の素朴な疑問に祥吾と彰は俯き、視線を琉奈たちから逃がす。

「……伯母さんは兄貴の母親が嫌いなんだ」

しばらくして、先に口を開いたのは祥吾だった。

「え？ だって母親って」

「恭子さんは兄貴の生みの親じゃないんだよ」

「!？」

祥吾の発言に琉奈たちは絶句し、彰は唇を噛み締める。

「俺の生みの親も恭子さんじゃない。俺たちはみんな、母親が違っんだ。兄貴の母親 咲良さんさくらさんっていうんだけど、伯母さんは咲良さんをすごく嫌ってたみたいで、咲良さんの子供である兄貴のこと嫌ってるんだ。兄貴に自分のことを伯母って呼ばせることすら許

さないくらいね」

「嫌ってみたいって……会ったことないのか？」

「咲良さんは兄貴を生んですぐ亡くなっただよ。だから、俺と彰は咲良さんに会ったことはないんだ」

「写真は見せてもらったことありますけどね。すごく綺麗な方ですよ」

「そうなんだ。久留井くんのお母さんはどんな人なの？」

琉奈は訊いてしまってから、己の軽率な発言を酷く後悔した。

祥吾が表情を曇らせ、沈黙してしまっただから。

無意識のうちに彼を傷つけてしまったと自覚したから。

「しょ、祥吾兄さんの母親は琴子さんといって、彼女もすごく美人なんですよ！ 僕たちの母親ってみんな美人なんです！」

代わりに答えたのは彰だった。

兄を気遣い、茶化すような言い草で、敢えて明るく振舞っているのが四人にもすぐに分かった。

「おーい、準備終わったよー」

階下からの誠一の声に五人は安堵の表情を浮かべ、足早に祥吾の部屋を後にした。

好嫌（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

決着

1 - 2 4

琉奈、綾、浩太、祥吾、彰の五人が戻ってきたリビングは、先ほどまでと風景が一変していた。

テーブルなどの家具は奥へと追いやられ、大きく開いたスペースには、漫画などで出てくる魔方阵のような、記号らしきものが細かく描き込まれた円陣の描かれた布が敷かれている。

布から少し離れたリビングの隅には、肩で息をしている誠一が座り込んでいる。

彼の疲れ具合からして、家具の移動は全て誠一がやらされたらしい。

「誠一先輩、大丈夫ですか？」

「大丈夫よ、綾ちゃん……。これくらいじゃへこたれないよ、男の子だモン」

誠一は天に拳を突き上げるが、その腕は伸びきっておらず、空元気を出していることが丸分かりだ。

「じゃ、始めるから、あなたは陣の中心に立つて」

由香理は琉奈を指差し、相変わらず高圧的な口吻で指図する。

他人を見下すような由香理の態度に、琉奈は内心苛立ちつつ、言われるまま円陣の中心に立つ。

「祥吾と彰と……誠一は、陣の外に描いてある星に似た記号の上に立つて」

三兄弟たちもまた、由香理に指示された通りの場所に立つ。

「トコヨノ国に行かない人は絶対に布に触らないで。それじゃ、始めるわよ」

由香理は持参した鞆の中からやたらと長い数珠を取り出すと、それを自分の首や手に絡める。

布のうち、何も描かれていない部分に正座し、目を閉じ、両手を合わせ、精神を統一する由香理。

やがて、由香理の額にうつすらと汗が浮かび出し、眉間に深い皺が刻まれる。

トコヨノ国へ向かう琉奈たち四人は初め、正面に座る由香理を見つめていたが、いつの間にか眠るように目を閉じている。

「！ 早いわね……。来るわよ！」

不意に由香理が叫ぶ。

その鋭い声を知覚した瞬間、沼の中に引き込まれるような浮遊感が琉奈の全身を覆い。

蝉の鳴き声。

指先さえも汗ばむほどの蒸し暑さ。

狭いアパートの一室。

ここはトコヨノ国だ。

琉奈は辺りを見回す。周囲に人影はない。

「……あたしだけ来ちゃった、とか？」

計画では祥吾たち三兄弟も同行するはずなのに。

まさか、失敗？

嫌な予感が琉奈の胸中を過ぎった時。

「琉奈」

名前を呼ばれた。

聞き覚えのない声のはずなのに、どこか懐かしい声。

声の主は琉奈の背後に立っていた。

振り返った琉奈に微笑みかける、一人の青年。

琉奈は反射的に口走った。

「お父さん」

「俺のこと、覚えていてくれたのか、琉奈」

柔和な笑みを浮かべる男性を、琉奈は無言で見つめる。

何か言いたいのに、それを言葉に変換することができず、唇を振

るわせることしかできない。

「何度も何度もこっちに呼んじやって悪かったな」

男性はより一層深い笑みをその顔に刻む。

曲線を描く唇はチェシャ猫のそののように大きく、不気味に映る。

「だって、お前がなかなか殺されてくれないからさあ！」

一切の躊躇いなく、包丁が琉奈の脳天めがけて振り下ろされる。

目に痛いほどに輝く刃が描く軌跡を見つめるしかない琉奈の頭に

包丁が食い込む

「ギリセーフ！」

のを受け止めたのは、誠一の光の剣。

刹那、光り輝く矢が男性に向かって飛んでくる。

男性は後ろに跳躍し、回避する。

「飛鳥川さん、大丈夫？」

駆け寄ってきたのは祥吾だ。

「邪魔すんな！」

床に転がっていた空き瓶が男性の絶叫と共に浮き上がり、四方から琉奈たちに襲い掛かる。

が、その全てが琉奈たちを覆うように形成されたドーム型の光りの壁に阻まれ、力なく落下する。

「遅くなってすみませんでした、飛鳥川先輩」

歩み寄ってきた彰が言う。

「ガキが、邪魔しやがって」

「あんたが穂積悟だな。今日限りで散ってもらっぜ」

誠一は不敵な笑みを浮かべ、剣を構える。

「ちっ、久留井の人間か」

「！？　なんで俺たちのことを」

「死ね！　クソガキ！！」

男性　穂積悟が手にしてた包丁を、僅かに隙を見せた誠一に投げつける。

誠一はそれを剣で叩き落すが、その間に悟は誠一の懷まで接近し、

喉元を切り裂こうと手にした包丁を振り上げる。

体を晒して攻撃を回避した誠一はそのままバク転し、悟と距離をとる。

悟は更に誠一に攻撃を仕掛けるが、彰が光の壁を出現させて阻む。舌打ちする悟に、祥吾の放った矢が幾本も襲い掛かる。

素早く移動して避けようとした悟だったが、一本の矢がその左肩に命中した。

矢を引き抜く悟。その肩は輪郭を失い、見えかかっている。

「……なめるなよ、ガキ共が」

低く呟いた悟の姿が突然、霧が晴れるように消失する。

「お……終わった、の？」

「いや、あれくらいで終わったりはしないよ。気をつけて、飛鳥川さん」

誠一、祥吾、彰は琉奈を背で守りつつ、一箇所固まる。

緊張の糸が四人の体に絡みつく。

「!？」

不意に、部屋に散乱していた新聞が彰の顔や腕にまわりついてくる。

引き剥がそうともがき、他の三人からやや離れた彰を誠一が追いかけようとした時。

「危ない!!」

「!」

彰の背後に悟が現れ、彼の背中に包丁を振り下ろした。

崩れ落ちる彰の体。

返り血を浴びた悟は唇を三日月形に歪めて微笑み、琉奈たちを見遣る。

「うあああああ!!」

鼓膜が痺れんばかりの絶叫をあげ、誠一は剣を手に悟に突進する。しかし、何の捻りもない、あまりに直情的な攻撃はあっさりかわされ、

「兄貴！」

バランスを失った体を強く蹴られ、誠一は床に倒れこんだ。

悟は更に、誠一の胸に包丁を突き立てようと腕を振り下ろすが、祥吾が咄嗟に放った矢が迫っていることを途中で察知し、その場から飛び退く。

「く、久留井くん……」

「大丈夫。彰は能力を発動させて極力ダメージを少なくしたし、兄貴も気絶してるだけだから」

祥吾は冷静に説明するが、その額には冷や汗が伝っている。

琉奈と祥吾の正面に立つ悟は、両手に包丁を携え、攻撃を仕掛けるタイミングを計っている。

互いに視線をぶつけ合う祥吾と悟。

と、僅かに悟がその目を祥吾から逸らした。

祥吾はそれを見逃さず、同時に悔やんだ。

次の瞬間、いつの間にか琉奈たちの背後に浮いていた空き瓶が、祥吾の後頭部を殴りつけた。

「久留井くん！！　すっかりして！！」

成すすべなく倒れた祥吾の背を、琉奈は懸命に揺さぶる。

「やっと二人きりになれたなあ、琉奈」

歩み寄り、琉奈を見下ろす悟が優しく語りかける。

悟を見つめる琉奈。

眼前の穏やかな笑み。

言いようのない恐怖を覚える。

直感する。

逃れられない運命を。

己の死を。

リセットのない終わりを。

「そんなことさせない！！」

「え？」

我に返った琉奈の目に映ったのは、予想外の光景だった。

見知らぬ若い女性が突然現れ、悟を羽交い絞めにしたのだ。

「明美！！ てめえ！！」

明美と　　琉奈の母親の本当の名を悟が喚く。

「お母、さん……なの？」

「あなたはまだ死んじゃいけないの、琉奈！」

「お母さん！！」

「その君、早く！　あたしごと散らさない！！」

明美の絶叫の呼応するように、一閃が琉奈の視界に飛び込んでくる。

思わずきつく目を閉じた琉奈が次に見たのは、明美を背中から、彼女と悟の胸を貫く光の剣。

二人の背後には、意識を取り戻した誠一の姿。

「ちくしょう……ちくしょおおお！！」

「琉奈……あたしたちの分までしっかり生きるのよ」

痛恨の咆哮と慈愛に満ちた言葉がアパート中にこだまする。

やがて二人の体は霧散し、琉奈に降り注いだ。

決着（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

始まり

1 - 2 5

両親の魂が散ってから数日後。

飛鳥川琉奈はいつものように松下綾と昼食をとっていた。
相変わらず暢気に青い腹を晒している空の下、ぼんやりとおかず
の卵焼きを口の中に放り込む。

そんな琉奈の元へやってきたのは、二人の男子生徒たち。

「久留井くん。……あ、先輩！」

「誠一先輩！ もう大丈夫なんですか！？」

綾は弁当を放り出し、久留井誠一に駆け寄る。

「ごめんね、心配かけて。もう大丈夫だよ！ まあ、激しい運動は
するなって言われてるけどね」

誠一は苦笑しながら右脇腹を軽く叩く。

彼はトコヨノ国での戦いで、肋骨にヒビが入ってしまい、数日の
静養を余儀なくされていた。

「彰くんはどう？」

琉奈が久留井祥吾に尋ねる。

彼は「あいつも大丈夫だよ」と微笑んだ。

「さすがに何針か縫ったけど、出血の割に傷は浅かったから。来週
には登校できると思うよ」

「そっか。良かった」

「心配してくれてありがとね」

礼を言う祥吾。彼は特に怪我もなく、琉奈同様、翌日から普通に
登校している。

「飛鳥川さんはどう？ あれから何ともない？」

「うん。やっとトコヨノ国から解放されて、すごく清々しい気分だ
よ。あ、そういえば、一つだけ気になってることがあるんだけど」

「何？」

「両親の魂が散った時、あたしに降ってきたのは何でかな？ 久留井くんたちの説明だと、トコヨノ国の他の魂に吸収されるはずなんでしょ？」

祥吾は小首を傾げ、「うーん」と唸る。

「血縁っていう強い繋がりがある飛鳥川さんの魂に引き寄せられたっていうのが可能性として考えられるけど……」

「けど？」

「俺としては、ご両親の魂が、飛鳥川さんが自分たちの分まで生きる力になりたかったんじゃないかなって。……ちよっとキザっぽいかな」

照れくさそうに頭を掻く祥吾に、琉奈は思わず笑ってしまった。

「あ、あたしのことはアス力でいいよ。飛鳥川って長ったらしいし」

「じゃ、俺のことも祥吾で。これからもよろしくね、アス力さん」
手を差し出してくる祥吾。

琉奈は「こちらこそよろしく、祥吾くん」とその手を握った。

五時間目。数学。

定年間近の老齡教師が黒板に書き出す数列を見つめながら、琉奈はトコヨノ国のことを考えていた。

得体の知れない空間。

けれど、幼い頃から馴染みのある場所でもあった。

もうトコヨノ国で危険な目に遭うことはなくなったが、同時に自分のアイデンティティーの一つを失ったような寂しさも覚えていた。

最後に、もう一度くらい。

そんなことをふと願った時だった。

心臓が一度大きく跳ね、体が地面の下に沈んでいくような感覚に襲われる。

急速に失われていく現実感。

「ちよつと」

隣の席に座る祥吾が琉奈の腕を掴んだ。

茫然と祥吾を見つめる琉奈。

青ざめたかおで琉奈を見る祥吾。

「え？　なんで？」

目を見張り、尋ねる祥吾に琉奈は首を横に振った。

授業終了を告げるチャイムが、新たな始まりを告げるように鳴り響いた。

始まり（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

来訪者

2 - 1

高等部。三年B組。放課後。

「え……えっと……」

クラスの一員となつて日の浅い転校生・久留井誠一は、教室の隅に追いやられ、うろたえていた。

目の前にいるのは、彼を凝視する女子のクラスメイト六名。

「な、なんでこんなことになつてるのかな？」

無理やり笑顔を作り、場を取り繕おうとする誠一。

彼に詰め寄る女子生徒の視線が厳しさを増す。

「久留井くん！」

「は、はひ……」

「いい加減に答えて。彼女、いるの？」

「……どう思う？」

「はぐらかさないで！」

ぴしゃりとはねつけられ、思わず誠一はきつく目を瞑る。

どうこの場を切り抜けようかと思案していたその時、誠一の元に一人の助っ人が現れた。

「兄貴、いる！？」

「！ 祥ちゃん！？」

教室のドアを勢いよく開けて教室に駆け込んできたのは、誠一の弟である久留井祥吾だった。

修羅場への乱入者の姿を見た女子生徒たちの眼が、狩人のそれに切り替わる。

「もしかして、久留井くんの弟！？」

「カッコイイ！」

「ていうかカワイくない！？」

「めっちゃイケメンじゃん！」

女性特有の黄色い声を一齐に向けられ、祥吾は青い顔で慄く。

「祥ちゃん！ 逃げろ！」

誠一の叫び声をきっかけに祥吾は駆け出し、女子たちもまた彼を追って走り出す。

祥吾という新たな獲物を見つけたハンターたちからようやく解放された誠一は、机の上に置いておいた携帯電話のランプが点滅していることに気付き、本体を手にする。

開いたディスプレイには、『メール受信1件 祥ちゃん』と表示されている。

「メールの返信がないからわざわざ来てくれたんだ。にしても、何だろ？」

独りごちつつメールを読んだ誠一は、その内容に目を見張った。

女子の集団から無事に逃げ切った祥吾の姿は、夕暮れ色に染まる屋上にあつた。

激しく乱れた呼吸を整えている祥吾の元に、誠一がやって来る。

「な、んで……ここにいて、って……？」

「弟のことなら何でもお見通しよ」

満面の笑みでバイサインを作る誠一に、祥吾は苦笑を返す。

「ところでさ、さっきのメール。あれ、ホントなの？」

「うん。今日、俺のすぐ隣でトコヨノ国に行きそうになった」

「琉奈ちゃんがトコヨノ国に行く原因になってた父親の魂は完全に散らしたじゃん。それなのに、なんでまた？」

困惑気味の誠一に、祥吾は「分かんない」と首を横に振る。

飛鳥川琉奈。彼女は祥吾のクラスメイトであり、長年、死者の魂の集積場であるトコヨノ国に度々引き込まれるという現象に悩まされていた人物だ。

その元凶は、幼い彼女に殺された父親の魂であり、誠一、祥吾、そして末子である彰の三人は自分たちの特殊能力をもって父親の魂を散らし、全てを解決したはずだった。

琉奈が再びトコヨノ国へ引き込まれてしまったのは、祥吾たちにとつて予想外の出来事だった。

「アス力さんの両親の魂が散った時、散り散りになった魂が彼女に降り注いだんでしょ？ てことは、その魂の欠片が悪さしてるんじゃない？」

誠一は祥吾の推理を「それはないっしょ」と否定する。

「完全に散らされた魂はもれなく生前の人格を失う。んなことありえないだろ」

「でも、そうじゃないと説明つかないし」

「確かになあ……。琉奈ちゃんは？」

「兄貴を連れてくるから待っててって言って、今図書館で待ってもらってるけど」

「そっか。したら琉奈ちゃんをうちに連れて行こう。恭子さんから何か知ってるかもしれない」

誠一の提案に、祥吾は深く頷いた。

「すみません。何度もお世話になっちゃって……」

「いいっていいって！ 困った時はお互い様って言うでしょ。それに、久留井さんちはアフターサービス万全でお馴染みだから」

申し訳なさそうな飛鳥川琉奈に誠一が明るく笑いかける。

「大丈夫だよ、アス力さん。きっと恭子さんが何か知ってるから」
続けてフォローする祥吾の言葉に琉奈は安堵する。

乗ってきた自転車を、到着した久留井家の駐輪スペースに停め、三人は誠一を先頭に家の中に入る。

「おかえりなさい、誠一兄さん、祥吾兄さん」

三人を出迎えたのは、現在自宅療養中の三男・久留井彰だ。その顔には、今にも蕩けんばかりの笑みが浮かんでいる。

気味が悪いほどの笑顔に三人はたじろぎ、微動だにすらできなくなる。

「あら、いらつしゃい、飛鳥川さん」

遅れてやってきた、三兄弟の母である久留井恭子が客人である琉奈の姿に気付き、声をかける。

更にもう一人、別の女性がやって来た。

二十代半ばと思いきその女性は、艶やかな黒髪を短く切りそろえ、すつと通った鼻筋とぱっちりとした二重が印象的な女性だった。

「おかえり、誠一！ 祥吾！ 可愛いお客さんも、いらつしゃい」
快活な笑顔と共に三人を迎え入れる女性。

彼女の姿に誠一と祥吾は目を丸くし、「朱里さん！」と彼女の名を叫んだ。

「飛鳥川さんは初対面よね。彼女は久留井朱里くわいしゅりさん。この子たちの父親の妹さんよ」

恭子が人数分のハーブティーと水饅頭をテーブルに並べながら、琉奈に説明する。

「どうも。久留井朱里です」

「初めまして。飛鳥川琉奈です」

「琉奈ちゃんか。名前も可愛いのね」

ストレートに褒められ、琉奈は「ありがとうございます」とはにかむ。

同時に琉奈は戸惑いも覚えていた。

三兄弟の親類にはもう一人会ったことがあった。

久留井由香理。彼らの父親の姉だ。

自分の問題解決の手助けをしてくれた人物だが、きつい性格で愛想がなく、笑顔もほとんどなかった。

今日の前にいる朱里とは間逆の人間だった。

「伯母さんと全然違うでしょ？」

琉奈の戸惑いを察知したらしい誠一が言う。

「はい。ちよつとびっくりしました」

「あのオバサンはプライドの塊みたいな人だからね」

「オバサンって……自分のお姉さんでしょうに」

思わずツツコミを入れた祥吾に、「いいのいいの」と朱里は手を縦に振る。

「自分は特別な一族の人間なの、他人とは違うのよっていう自己陶醉の世界にずっと生きてる人だから。相手にするだけ損なの、あんな人。気にするだけ時間のムダなんだからね、誠一」

朱里の真摯な瞳に、誠一は「分かってますよ」と微笑む。

「にしても、朱里さんはどうして今日うちに？」

「姉さんがここに来たって聞いたから、それならあたしも来なくちやって思つて。みんなの顔も久々に見たかったし。なに、あたしは来ちゃダメなの？ 祥吾はあたしのことキライ？」

「んなわけないじゃないですか！ 俺は朱里さんのこと好きですよ」

「ありがと。あたしもスキよ、祥吾。チューしてあげよっか？」

「いえ、間に合ってます」

「なによ、小さい頃はこつちがうんざりするくらいチューをねだつてきてたのに」

「もうホント勘弁してください」

完敗です、と言わんばかりに頭を下げる祥吾に、琉奈は他の久留井家の面々と共に笑ってしまった。

由香理と誠一の母親との確執の話や、三兄弟の母親が異なることなど、問題が山積してばかりの一族だと思っていたが、こういった和やかなシーンを目に出ることが出来て、琉奈は何故かほっとした。あまりにもほのぼのとしていたので、

「ところで、飛鳥川さんはどうして来たのかしら？」

「……あ」「」

誠一も祥吾も琉奈も、本来の目的をすっかり忘れていた。

来訪者（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

三人三色

2 - 2

琉奈が再びトコヨノ国に引き込まれたと告げた時、彰と恭子は

「それ、本当ですか？」

「嘘でしょ？」

と、俄かには信じられない、といった反応を示したが、事情を朱里は首を傾げてしまった。

誠一と祥吾は朱里に、琉奈の身に起こっていたことを説明し、改めて再び琉奈が引き込まれたことを告げると、

「何で？」

と、ようやく彰や恭子と同じ反応をした。

「飛鳥川さん、授業中に引き込まれちゃった時、何かいつもと違うことしたりしなかった？」

「いつもと違うこと、ですか？」

恭子は「そうそう」と頷く。

「あなたがしたことが、あなたのご両親以外の魂を刺激したって可能性もなくはないし」

琉奈は首を傾げる。

トコヨノ国に引き込まれそうになったのは数学の授業中で、ぼんやりと考え事はしていたものの、普通うに授業を受けていただけだった。

ただ、ぼんやりと、

「……トコヨノ国のことを考えてました」

ぼつりとそう漏らした琉奈に、周囲の視線が集中した。

「トコヨノ国について、どんなことを考えてたの？」

隣に座る祥吾がやや身を乗り出し、琉奈に尋ねる。

「えっと……その、ちょっとだけんだけど……もっかいくらい行

つてみたいなあ、なんて」

久留井家の面々に協力してもらい、トコヨノ国へ引き込まれないで済むようにしてもらった手前、少々言いにくそうにしつつ答える琉奈。

「きつとそれがきつかけね」

朱里が琉奈を指差し、断言する。

「何度もトコヨノ国に行つてた琉奈ちゃんには、トコヨノ国に対する、ある種の親和力がついてしまったのよ。そのせいで、自らトコヨノ国に行きたいと願ってしまうと、向こうに引き込まれるようになつちやつたんだわ。今まで考えなかったから気付かなかっただけで」

朱里に指摘された通り、両親の件が解決するまで、自らトコヨノ国へ行こうなどと考えたこともなかった。

久留井三兄弟に出会うまで、トコヨノ国に引き込まれることは迷惑でしかなかったし、自分から行こうと思わなくても勝手に引き込まれてしまう以上、そんなことを考える必要すらなかった。

父との決着をつける際も、向こうから手を出してくるのを待とうと言われていたので、自ら向こうへ行くという考えは浮かばなかった。

トコヨノ国へ行くことができる能力がついていたなど、全く知らなかった。

「自分の意志でトコヨノ国に行けるって……それ、巫女の実力じゃないの。巫女の実力は久留井の女性にしか発現しないんじゃないの？」

恭子に問われた朱里は「分からない」と首を横に振り、肩を竦める。

「ただ、うちにある資料に何か参考になるものがあるかも。巫女の実力から解放する方法も分かるかもしれないし」

「資料、ですか？」

「そ。久留井家はずっと昔からトコヨノ国や、そこに存在する魂た

ちと関わってきたの。だから、トコヨノ国関係の資料もたくさんあるのよ。ねえ、琉奈ちゃん、今度の日曜にうちに来ない？」

え？ と戸惑う琉奈に朱里が微笑みかける。

「ここから電車で少し行つたところに本家があるからいらっしやい。誠一と彰も、たまには本家連中に顔出したら？」

急に話をふられ、困惑の表情を浮かべる誠一と彰だったが、

「しゃーない、たまには行くか」

「朱里さんの命令とあれば、仕方ありませんね」

と了承する。

「じゃあ、日曜の午前十時までに来ること。二人とも、しっかり琉奈ちゃんをエスコートしてくるのよ」

「へいへーい」

「はい！ 任せてください！」

誠一が面倒くさそうな返事をし、彰がやたらと張り切る中、祥吾はずっと無言でハーブティーを口にしていた。

「俺は日曜行かないから。……ごめんね」

久留井家からの帰宅途中。琉奈を送る祥吾がそう切り出した。

「うん、分かった」

「……理由、訊かないの？」

「理由が言えるなら今言うでしょ。言いたくないものを無理して訊き出そうなんて思わないから。それに、さっき話してた時の雰囲気です。祥吾くんは行かないだろうなって思ってたし」

「そっか。ありがと。でもね……理由を訊かれても、きっと俺はうまく説明できなかったと思う。その、色々と複雑なんだ。事情も気持ちも、うまく言葉にできないっていうか。ホント、ごめん」

再度謝る祥吾に琉奈は、

「言いたくなったらいつでも聞くから、その時は声かけてね」

と笑いかけた。

祥吾もつられて「ありがとう」と微笑む。

「気持ちといえなさ、彰くんって朱里さんのこと好きだったりしない？」

「あ、やっぱり分かった？」

琉奈と祥吾は向かい合って互いを指差し、闇夜に瞬く色とりどりの星たちに届かんばかりの大声で笑う。

「すげえ分かりやすいでしょ、あいつ！」

「あそこまで露骨な人、初めて見た！ あたしの話の時以外、周りのことなんて目に入りませんってくらい朱里さんのこと見てたし！」

会話中、終始朱里を見つめていた彰の姿を思い出し、二人は腹を抱えて笑い合う。

「彰は昔から朱里さんが好きなんだよ。末っ子で甘えたがりなところがあるから、大人な朱里さんを好きになっちゃうのは自然なことなんだろうな。それが本当の恋なのかどうかまでは分かんないけど」「ふうん。ていうか、祥吾くんってさ、時々同年とは思えないくらい周りのことが見えてる時あるよね」

「え？ そうかな？ 俺の周りが子供っぽい人ばかりだからそう見えちゃうだけじゃないかな？」

祥吾が照れくさそうに後頭部を掻く。

「特にうちは兄貴がね。頼もしい時もあるにはあるけど、基本的に子供っぽいから。……あの人、たまに勉強教えてって、俺の部屋に乱入してくることあるんだよ」

宝物の在り処を話す盗賊のような怪しい顔で祥吾が言う。

「ホントに！？」

「マジマジ。数学とかね。弟に聞くなって感じでしょ？ 文系はわりと得意みたいだけど。あと、美術もね。まあ、毎日グラビアとか見てるからだろうけど」

祥吾の更なる暴露に琉奈はまた笑ってしまった。

数日後。

遠出する家族連れやデートへ向かうカップル、休日出勤のサラリーマンなどで混雑する駅に、飛鳥川琉奈、久留井誠一、久留井彰の三人の姿があった。

「本家までは乗り換えの時間も含めて、だいたい二時間くらいかな」携帯電話で乗り換える電車や時刻を確認しながら、誠一が説明を始める。

「で、駅からバスで三十分くらい。ただ、向こうはバスの本数が少ないからなあ。ちょうどいいのがあればいいんだけど」

「もし時間が合うバスがなかったら、車で迎えに行くって朱里さんが言っていましたよ!」

目を輝かせる彰。一方、誠一は「あの人運転下手だよな……」と呟き、バスがあることを心の中で切に願った。

やがて、電車の到着を告げるアナウンスが駅構内に流れ、銀色の車両がホームに滑り込んできた。

三人は口を大きく開けた電車内へと歩を進め、久留井家本家を目指す。

三人三色（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

心模様

2 - 3

「琉奈ちゃんの家はあれからどう？ 変わりない？」

運良く空いていた席に誠一、琉奈、彰の順で座るなり、誠一が琉奈に尋ねる。

「うちですか？ はい、特に以前と変わりないですよ」

トコヨノ国の件を解決する際、琉奈の本当の両親は既に故人で、今の両親は伯母夫婦であることが判明した。

しかし、その後も伯母夫婦は今まで通り、琉奈を本当の娘として育てているし、琉奈も伯母夫婦を本当の両親だと、これまでと変わらず思っている。

「そっか、良かった。仕方がないことだったとはいえ、大変な秘密を暴いちゃったわけだから、琉奈ちゃんの家が環境が悪化したりしてたらどうしようかと……」

「悪化なんて全然。あ、変わったといえば…… ちよつとしたことなんですけど、兄と話すようになりました」

「え？ お兄さんと？」

「はい。今回の件であたしとの関係を見つめ直してくれたみたいで、両親はあたしを引き取った時、すごく気にかけて、可愛がってくれたと思うんです。起きた事件が事件でしたし。幼い兄は急にやって来た、血の繋がりもあんまりない女の子に突然、大好きな両親を奪われたって思いますよね。その気持ちが悪い方向に振れていって、今までの冷たい対応に繋がったのかなって。」

最近、ホントにちよつとなんですけど、おはようって声かけてくれたりとか。これでもかなりの進歩なんですよ」

「そうなんですか。うちは半分しか血の繋がりありませんけど、誠一兄さんはうざったいくらい話しかけてきますけどね」

しみじみと話す彰に、「うざいとかゆーなよ」と誠一がむくれる。その誠一の仕草に、琉奈は思わず吹き出してしまう。

「ちよつと、なんで笑うの、琉奈ちゃん!？」

「すみません。この前、祥吾くんの言つてたこと思い出しちゃって

……」

「? 祥ちゃん、何て言つてたの?」

「先輩は基本的に子供っぽいつて……」

「あいつー!!」

拳を固め、齒軋りをする誠一。彰は琉奈の陰で小さく笑っている。ていうか琉奈ちゃん、祥ちゃんのこと名前で呼んでるんだ?」

「はい。前に、あたしのこと飛鳥川って長つたらしく呼ぶのもなんだから、アス力でいいよつて話したら、じゃあ自分のことも祥吾でいいよつて」

琉奈の説明に、誠一は感慨深げに「なるほどねえ」と相槌を打つ。

「だめですかね?」

「へ? いやいや、そういうんじゃない。祥ちゃんが他人に自分のことを名前で呼ばせるのつて珍しいから。しかも女の子に」

「そうなんですか」

「そうそう」

誠一は答えながら、満面の笑みを浮かべる。

何故誠一がこんなにも嬉しそうなのか、理由が分からない琉奈は頭上に巨大なハテナマークを浮かべる。

「先輩」

琉奈と誠一の会話を黙つて聞いていた彰が口を挟んでくる。

「何?」

「あの、僕もアス力先輩つて呼んでいいですか?」

「もちろん。飛鳥川先輩つて長いもんね。いつそ、アス力さんとかでもいいけど」

彰は琉奈の提案を「いやっ、先輩は先輩でっ!」と慌てて全力拒否する。

それを見た誠一は、「彰って変なところだわるよなあ」と呟いた。

出発からおよそ二時間。

途中、誠一や彰への逆ナンパをかわしつつ、二度の乗り換えを経て、三人は久留井家本家の最寄り駅に到着した。

「今更だけどさ」

駅の改札を出るなり、誠一が口を開いた。

「何ですか、誠一兄さん？」

「俺たち、こんなカツコで大丈夫かな？」

「……………」

沈黙が三人を包み込む。

琉奈は他人の家に行くということで、大きなフリルの付いた淡い黄色のキャミソールに、かき編みの白いカーディガン、紫色のロングスカートにピンクのパンプス、という余所行きの出で立ちだ。

一方、誠一と彰はそれぞれ色や柄の全く違うロングTシャツにジーンズ、そしてスニーカーと至ってラフな格好だ。

「どうせ何回も言ったことがあるしって思ったけど、ラフ過ぎじゃない？」

「いいんじゃないですか、別に。どこぞに嫁いだ娘が実家に帰るようなものなんですから」

全く男らしくないたとえで誠一を説得する彰。

誠一も何故か「そうだよな」と納得してしまった。

「さてと。バスは……………っと。お、十五分後に出るバスがあるな」

バスの時刻表を指でなぞりながら誠一が言う。

それを聞き、彰が小さく舌打ちする。
「おやおや、彰くん。せっかくちょうどいいバスがあったのに、どうして舌打ちしちゃうかなあ？」

誠一は彰の肩に手を回し、逃れられないようにきつく引き寄せる。

「ちよつ……やめて下さいよ！」

「少しくらい我慢しろよ。急がなくても、もうじき朱里さんに会えるんだから」

「な、な、なんの話ですか!？」

顔を真っ赤にして慌てふためく彰。

朱がさした彰の頬を指でつつき、「赤くなってるー！　かわいいー！」と、わざと高い声を作り、ギャルのような口調で弟をからかう誠一。

琉奈はそんな二人の姿をちよつと離れたところから見守る。

「あんたたち、駅前で何してんの？」

ぎゃあぎゃああと喚く誠一と彰、そして琉奈の前に、一台の乗用車が通りかかり、下がるパワーウィンドウの向こうから呆れ気味の声が投げかけられる。

「朱里さん！　来てくれたんですね！」

誠一の腕から逃れ、飼い主を見つけた犬のように嬉しそうに駆け寄ってくる彰に、乗用車の運転手　久留井朱里はサングラスを外し、ウィンクする。

「……あの、バスあつただけど」

誠一が言う。その顔はすっかり青ざめている。

「バスじゃお金かかるでしょ。あ、琉奈ちゃん、いらっしやい！」

「こんにちは。今日はよろしくお願いします」

「よろしく。じゃ、みんな乗って乗って！」

「……いや、俺はバスでオツケーなんで。大丈夫なんで、ホント」
「乗りな、誠一」

どすの効いた声で朱里が命令する。

すっかり萎縮し、小さくなった誠一は「……はい」と答えるしかなかった。

心模様（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

血縁

2 - 4

何故誠一が朱里の運転する車への乗車を頑なに拒んだのか。

琉奈はその理由を、走り出してから三十秒も経たずに理解した。とにかく運転が荒いのだ。

常に急停車、急発進。ハンドル捌きは荒々しく、同乗者は前後左右に揺らされ続けた。

車が久留井家本家に到着する頃、朱里以外の三人はすっかり疲れ果てていた。

「みんな、着いたわよ！　って、どうしたの？」

顔に死相が出ている琉奈たちを見て、目を丸くしている朱里。

本人は自分が酷い運転をしているという自覚がないらしい。

「さ、さすが朱里さん。非常にワイルドな運転でした……」

目を回し、頭を揺らしながら彰が親指を立てる。

朱里は「それって褒めてんの？」と眉根を寄せる。

「しゅ、朱里さん、早く中に入ろうよ。調べるんでしょ、巫女のこと……」

「なんか誠一もダメダメ状態だけど……。まあ、いいか。行きましょ」

唯一元気な朱里と、彼女曰くのダメダメ状態三人組は、久留井家本家へ向かうべく乗用車のドアを開けた。

「でっ……か……！」

大きな門をくぐり、久留井家本家を目の当たりにした琉奈は思わずそう零した。

広大な敷地に悠然と腰を下ろしている大きな屋敷は、テレビドラマなどで見る、代々続く名家の屋敷そのものといった風情だ。

「ただ大きいだけの古い家よ」

建物の巨大さに慄く琉奈に、朱里が溜息混じりに言う。

「さ、入って入って。誠一と彰は琉奈ちゃんと客間に行っててくれる？ あたしはお茶の用意させてくるから」

「はいよ。じゃ、行こっか、琉奈ちゃん」

「は、はい」

屋敷内も非常に広く、玄関から客間までは歩いて数分かった。

滅多に目にする事のない、古き良き日本家屋の趣を残した屋敷に、琉奈は視線をあちこちに泳がせてばかりだ。

「そんなに珍しい？」

客間に到着してもなお、そこら中を見回している琉奈に誠一は苦笑した。

「あ、すみません。うち、親戚とかみんな都会に住んでて田舎がないから、こういう家に来たことなくて……」

「そうなんだ。でも、居住性はあんま良くないよ。な、彰？」

「ですね。広さがある分、エアコンの効きが良くないので、夏は暑いし冬は寒いし。僕は今の家の方が好きですね」

「あたしもそっちの家に住もつかない」

茶碗を載せたお盆を持って現れるなり朱里が呟く。

彰は「それいいですね！」と同調しつつ朱里からお盆を取り、各人に配る。

「ダメですよ。あの家は四人が限界です」

「じゃあ誠一、あたしと交代ね」

「無理」

きっぱりと拒否する誠一に、朱里は「冷たい奴め」とむくれる。

「さてと。お茶飲んだら、誠一と彰は兄さんに挨拶してきなさい」

「！」「」

「本家に来た以上、それくらいは当然。琉奈ちゃんはちょっと待っててね。すぐに済ませてくるから」

「あの、朱里さんのお兄さんって、先輩たちのお父さんですよ？
今こうしてお邪魔してるわけですし、あたしもご挨拶した方が…

…」

琉奈の申し出を、朱里は首を横に振って拒絶する。

「兄さんに会える人は限られてるの。気持ちは嬉しいんだけど」

「そうですか……。分かりました」

面会できる人が限られてる人物。

そんな人間は今や、架空の世界にしか存在しないと琉奈は思っていた。

少なくとも自分の身近には存在しない。

琉奈は急に、自分が別の世界に来てしまったような気分になった。

居間から自室へ戻るべく廊下を歩いていた久留井由香理は、急に顔を顰めた。

見たくないものを見てしまった。

自分にとって、不浄と、穢れと言すべき存在。

それを己の視界に入れてしまったことが酷く口惜しかった。

「何故この子たちがここにいるの、朱里？」

甥である誠一と彰の前を歩く朱里に由香理が問う。

「ここに来ちゃいけない理由はないでしょ、姉さん」

由香理の威圧的な語氣に一切気圧されることなく朱里が言い返す。

「そうね。彰にはないわね」

「誠一にもない。咲良さんにもなかった」

「黙りなさい、朱里」

咲良、という名前が出た途端、由香理が鬼女の如き形相で言い放つ。

さすがの朱里も、これには口を閉ざした。

「飛鳥川琉奈さんが巫女能力を有してしまった可能性があるんで

す。僕たちはそれについて調べるためにここに来ました」

沈黙する朱里に代わり、彰が答える。

「飛鳥川琉奈？ …… ああ、この前の件の子ね。けど、あの子は久留井の人間じゃないじゃない？」

「ええ。ですから、そのことも含めて詳しく調べる必要があるので本家に」

「そうなの。大変そうだけど、頑張って」

心のこもっていない、抑揚のないエールを送った由香理は三人とすれ違い、去っていった。

「…… 朱里さん。俺、ちょっと出かけてきていいかな？ 行きたいところがあるから」

しばらくして、誠一が切り出す。

「分かった。兄さんのところへは、あたしと彰で行ってくるから。ごめんね、勝手に咲良さんの名前出したりなんかして」

「ううん、気にしてないから。じゃ、行ってきます」

誠一は来た道を引き返し、玄関へと急ぐ。

「…… さ、行きましょ、彰」

「はい、朱里さん」

朱里と彰が琉奈の元へ戻ってきたのは、彼らが客間を出てから三十分後のことだった。

「琉奈ちゃん、お待たせ」

さぞ待ちくたびれているだろうと朱里たちは思っていたのだが、琉奈は全く退屈していなかった。

先ほどまではいなかった、一人の幼い男の子といたからだ。

「…… 啓太」

今は琉奈の腕の中ににこにこ笑っている、二歳前後の小さな男の子を見た朱里が呟く。

「お帰りなさい。あれ？先輩は？」

「誠一なら別件があつて。それより琉奈ちゃん、その子は……」

「ここで一人で待ってたら突然入ってきて。呼んでも誰も来ないので、しばらく一緒に遊んじやっただんですけど。……あの、まずかったですか？」

「ううん、それは構わないけど」

「！しゅり！」

朱里の姿に気付いた男の子は琉奈の腕から飛び出すなり朱里に駆け寄り、抱きついた。

「可愛い子ですね。利発そうだし。朱里さんのお子さんですか？」

「あたしの子じゃないよ。琴子さんの子」

「琴子さん？　って、ええつと……？」

「祥吾兄さんのお母さんです」

彰の返答に琉奈は手を打った。

「祥吾くんの弟なんだ！　道理で似てると思った！」

「……祥吾に似てる？」

「はい、そっくりです」

「そっか。啓太、あんたは祥吾にそっくりだつて」

朱里が抱き上げた啓太に言う。啓太は祥吾が誰だか分かっていないらしく、きよんとしている。

「しょーごにいちやんだよ、啓太。何回も会ってるでしょうに」

「ぼく、しょーごにいちやん、きらい」

啓太は眉をきゅつと寄せ、ぼつりと呟く。

「しょーごにいちやん、こわい。だからきらい」

「……彰、啓太を琴子さんのところに連れてつてくれる？　今頃捜してるだろうから」

彰は朱里に言われるまま啓太を受け取り、その場を後にした。

血縁（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

物思い

2 - 5

琉奈は朱里に連れられ、屋敷の隣に建っている蔵へとやって来た。朱里は慣れた手つきで門を外し、歴史を感じさせる重厚な木の扉を開く。更に、その向こうにある鋼鉄の扉を、複雑な形をした鍵で開ける。

「ここにトコヨノ国に関する資料が収めてあるの」

朱里が説明しながらスイッチを入れると、天井に吊るされている電球に明かりが灯り、闇の中に眠っていた資料が姿を現す。

琉奈はぽかんと口を開け、周囲を見回す。

広々とした蔵の中に所狭しと棚が並び、その中には本や巻物などが隙間なく積み重ねられている。

「すごく古そうな資料ばかりですね……」

「最近の資料は家にあるんだけど、あたしが知ってる限り、久留井の人間以外に巫女有能力持ってる人っていないから。昔の方から調べた方が早いと思って」

じゃ、適当に資料漁ってみて、という朱里のアバウトな指示を受け、琉奈は彼女と共に蔵の資料を調べ始める。

途中で彰も合流し、三人で次々に資料を見ていく。

古すぎて琉奈や彰では解読できないものを朱里が担当し、それ以外のものを学生コンビが担当する。

資料にはトコヨノ国に関する様々な記述があった。

転生の時を待つ、魂の集積場。トコヨノ国。

常夜であり、常世である場所。

魂はそこで生前の記憶を濯ぎ、転生に備える。

しかし、生前の記憶を宿し続ける魂も時に存在する。

正にしる負にしる、強い想いを残して死んだ魂ほど記憶が残りやすい。

その記憶が、トコヨノ国に新たな場所を創造する。魂たちが一番、強烈に記憶している場所がトコヨノ国に造られては消え、造られては消えていく。

トコヨノ国は魂の力が強く作用する世界。魂の力が全て。

人間の力では干渉できない世界。

……でも、久留井くんたちは違うんだ。

琉奈は資料を読みながら、内心独りごちる。

誠一、祥吾、彰はトコヨノ国で、己の魂の力を武器の形に具現化し、現世の人間に危害を及ぼす魂と戦う。

他の人間とは異なる力を持っている。

昔から、と言っていた。

幼い頃からずっと、あんなふうに彼らは戦ってきたのか。

苦しくなかったのだろうか。

辛くなかったのだろうか。

己の力を憎み、疎み、周囲にその怒りをぶつけたりしなかったのだろうか。

琉奈は資料のページを繰っている彰を見て、ふとそんなことを考えた。

数時間後。

陽が傾き、木組みの小さな窓枠に切り取られた橙色の空から西日が差し込む蔵の中に、膝を折って座り込む琉奈、彰、朱里の姿があった。

三人は肩を落とし、ほぼ同時に深い溜息をついた。

「こんだけ資料があるのに、久留井以外の巫女に関する情報が全然ないなんて……」

力ない朱里の呟きに、琉奈と彰も無言で頷く。

「……こうなったら」

「「なったら？」」

「琴子さんに見てもらおう！」

朱里は勢いよく立ち上がり、言い放つ。

「ええ！？ 琴子さんにですか！？」

「何よ、文句あるの、彰？」

「文句って訳ではありませんが…… 琴子さん、大丈夫ですかね？」

見知らぬ人と会うなんて……」

朱里は腰に手を当てて、「んなことも言ってられないでしょ」と彰の苦言を切り捨てる。

「とりあえず、琉奈ちゃんが本当に巫女になっちゃったのかだけでも確かめなくちゃ。じゃないと、わざわざここまで来てもらったイミがないし」

「……それもそうですね」

「琉奈ちゃん、これから琴子さんっていう、祥吾のお母さんに会いに行くんだけど…… 彼女の前では祥吾の名前を出さないでもらえるかな？」

「え？」

琉奈は思わず眉を顰めた。

祥吾と、彼の母親である琴子の間には何か問題がある。

先日、祥吾に彼の母親について尋ねた時の彼の反応から、琉奈もそれには気付いていた。

しかし、母親の前で息子の名前を出すことを禁じられるほどとは、さすがに思わなかった。

一体祥吾と琴子の間にどれほどの事情があるのだろうか、と琉奈は疑問に思わずにはいられなかった。

「理由はそのうち話すから。ね？」

胸の内を見透かしたような朱里の言葉に、琉奈は頷くしかない。
今はとにかく、自分の身に起きたことの真相に辿り着くのが先決だ。

蔵から屋敷へ戻った三人は、朱里の先導で廊下の奥へと進む。
歩くこと数分。

到着したのは、一枚の襖の前。

「朱里様。何の御用ですか？」

襖の側に立つ、黒い着物の中年女性が問う。

「琴子さんにこの女の子を会わせたいんだけど」

「何故です？」

「巫女 of 能力を得てしまったかもしれないの。だから、琴子さんに見てもらって、本当に巫女になってしまったのか確かめたくて」

「菊野」

襖の向こうから突然、女性の声がした。

玉を転がすように美しく、そして愛らしさも感じさせる声。

黒い着物は「はい」と答え、膝をつく。

「その方たちを中へ」

「しかし、琴子様……」

「朱里さん、入ってちょうだい」

美しい声が朱里を中へと誘う。

朱里は言われるまま襖を開け、室内へと足を踏み入れる。琉奈と彰もそれに続く。

室内は至って普通の、広い和室だ。しかし、静謐な空気が保たれており、おいそれと歩み入れないような、荘重な雰囲気包まれている。

三人を待ち受けているのは、部屋の奥に座っている、白いワンピースの小柄な女性。

「こんにちは、朱里さん。……あら、久しぶりね、彰くん」

女性はしなやかな動きで立ち上がり、三人に歩み寄り。

どんな御伽噺の王子でも一瞬でひれ伏すだろう、天女のような美しい女性に、琉奈は言葉を失った。

物思い（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

呼謎

2 - 6

「あなたが巫女になった女の子？」

「は、はい。飛鳥川琉奈と言います」

「私は琴子。久留井琴子よ」

ワンピースの女性　久留井琴子に微笑みかけられ、琉奈は顔を紅潮させつつしゃちほこばる。

「ごめんなさいね、朱里さん。菊野がお邪魔して。今日は調子がいって言うておいたのだけど」

「いえ、構いませんよ。……それで、どうですかね？　彼女、巫女ですか？」

朱里に問われた琴子は琉奈に近づき、彼女の頬に細い指を添える。間近の麗人に、琉奈はますます固まってしまう。

琴子は美しい上に若々しく、とても自分と同じ年の息子がいるように思えなかった。

「……そうね、この子はおそらく巫女だわ」
琴子が静かに告げる。

朱里はそれを聞き、「やっぱり」と頭を振る。

「実際の能力を見せてもらえるとありがたいのだけど。今、彰くんと一緒にちよつと行ってきてもらえるかしら？」

近所におつかいに行ってきた、とでも言うように話す琴子に、琉奈と彰は思わず「は？」と聞き返す。

「行ってきたって……どうやって帰ってくればいいんですか！？」
「簡単よ。戻ってくるように念じればいいのよ、行くのと同じ要領で。ただ、向かった先にあなた以上の力を持った魂がいた場合、その空間の支配者は魂の方になるから、その時は彰くんに散らしてもらって」

何か問題でも、と言わんばかりの琴子に琉奈は絶句する。

「朱里さん、誠一兄さんが戻ってくるのを待った方が良くないですか？」

「それが、さつき調べものを手伝えようと思って電話かけたんだけど、繋がらないのよ、あいつ。多分まだ病院にいるんだと思うんだけど」

朱里は自分の携帯電話片手に溜息をついた。つられて彰も溜息を漏らす。

「……仕方ありませんね。アス力先輩、行きましょう。僕が必ず、全てなんとかどうにかこうにかしますから」

彰から、頼りになるようなならないような後押しを受け、仕方なく頷く琉奈。

目を閉じ、精神を集中させる。

彰はその肩に手を掛ける。

行こう。

あの場所へ。

魂の世界へ。

トコヨノ国へ。

不意に、懐かしい感覚が琉奈の全身を覆う。

沼の底へ、地の底へ引きずりこまれる感覚。

トコヨノ国へ向かっている。

そのことを肌で感じた。

「アス力先輩」

己の名を呼ぶ声を知覚し、琉奈は我に返る。

荘重な和室から一転、琉奈たちの周囲は草木が生い茂り、木漏れ日が燦々と降り注ぐ森林に変わっていた。

「ここは……」

「トコヨノ国ですよ。近くに魂がいて、その魂の生前の記憶がこの

森を造っているんです」

彰は淀みなく説明しながら周囲を見回し、この森林を形成している魂を探す。

と、突然一つの白い光りの塊が、木々の間から琉奈たちの前に飛び出してきた。

光は輪郭を崩したかと思うと、一人の老年女性の姿に再構築される。

『あなた方はどなた？』

「お邪魔してすみません。僕たち、たまたまここに迷い込んでしまつて」

老婆は『ここはそうそう迷い込むような場所じゃないのだけど』と彰を訝るが、すぐににこりと柔和な笑みを浮かべる。

『まあいいわ。せつかく来てくれたんだもの』

「あ、あの……ここは？」

『ここはね、私がプロポーズしてもらった場所なのよ。緑がたくさんあつて素敵でしょう？』

少し照れくさそうに話す老婆に、琉奈は自然と微笑んでしまう。

しかし、その笑みは老婆の次の言葉であっさりと拭われる。

『私が一番つて言っていたのに、知らない間に二番に落として。だからこの手で殺してあげたのよ』

「！先輩！」

彰が素早く琉奈の前に立ち、光の壁を出現させる。

刹那、鋭く尖った木の枝が琉奈の体を串刺しにせんと襲い掛かってくるが、全て彰の壁に弾かれる。

魂の力。トコヨノ国で大きな影響を及ぼす力。

琉奈の脳裏を、資料で目にした様々な言葉が次々と駆けていく。多種多様な空間を造り出す、トコヨノ国の魂。

自らの魂の力で戦う彰たち。

ならば、今トコヨノ国にいる自分は。

自分の魂の力とは。

『私、聞いたことがあるのよ。生きてる人間の魂を取り込むと、私たちはもつと強くなれるって』

「誰がそんなことを？」

鋭い声で問う彰を老婆は笑って指差し、言い放つ。

『女さ。お前にそっくりのね』

「何……！？」

驚きのあまり、思考を停止させてしまった彰。

その隙を突き、老婆は予め彼らの語に浮かばせておいた巨木で、二人いっぺんに押しつぶしてしまおうとした。

が、それは叶わなかった。

周りの景色が突然薄れ始めたのだ。

更に、薄れ行く森林に代わり、学校の教室のような風景が滲み出てくる。

「これは……うちの学校……！？」

『何なんだい、これは！？ あたしの森が……！ ちくしょう！』

老婆が心底悔しそうに吼えたかと思うと、次の瞬間、

「……あれ？」

琉奈と彰は元の和室に戻っていた。

どうやら老婆の魂により、強制的に現世に戻されたらしい。

「お帰りなさい」

茫然と立ち尽くす琉奈と彰に琴子が声をかける。

「？ どうしたの、彰？ 琉奈ちゃんはともかく、あんたは何回もトコヨノ国に行ってるでしょ？ 何驚いてんの？」

「えっと……、後で説明します。それより、琴子さん。どうでしたか？」

琴子は深く頷き、告げる。

「飛鳥川琉奈さん、貴女はトコヨノ国への転移能力を持った巫女です」

琉奈は返す言葉が見つからなかった。

やっぱり、という諦めに似た気持ちと、この先再びトコヨノ国と

関わる破目になることへの不安と、他人と違う力を得たというちょっとした優越感とが入り混じり、心の中に巨大な渦ができていた。その渦中では、何を言うのが正解なのか分からなかった。

「おっかえりー」

琴子の部屋から客間に戻った琉奈、彰、朱里を出迎えたのは、いつの間にか屋敷に戻っていた誠一だった。

「誠一兄さん！　いつ戻ってたんですか？」

「ついさっき。蔵にいないから客間かと思って来てみても誰もいないから、てっきり俺を置いて帰っちゃったのかと思ったよ」

「遅かったじゃない、誠一」

「すみません。用事済ますついでに墓参りにも行ってきたんで」

「お墓参り……？」

琉奈はつい訊いてしまってから、悪いことをしたと後悔した。

けれど、誠一は全く気にする様子はなく、世間話でもするように母親のね。俺が生まれてすぐに死んじゃったんだけど」と答えた。「墓の掃除、朱里さんがやってくれてんの？　思いのほか綺麗だったからびっくりしたよ」

「できる時だけ、だけどね」

「そっか。ありがとーございます。で、琉奈ちゃんの方は？」

「はい。あたし、やっぱり巫女っていうのになっちゃったみたいですよ」

琉奈の返答に、誠一は困惑と疲労が入り混じった溜息を漏らした。「マジなんだ？」

「琴子さんに確認してもらって確定。蔵の資料はめばしいものはなし。こんなとこよ」

「え？　琴子さんに？　大丈夫だったの？」

心配そうな誠一に、「今日は大丈夫だった」と朱里がウインクス

る。

「さてと。そろそろ日が暮れるし、今日のところはここまできな。

こっちでもまた詳しく調べてみるから。何か見つけたら連絡するね」

琉奈は朱里の言葉に「よろしくお願いします」と深く頭を下げた。

呼謎（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

深縁

2 - 7

「巫女になったらどうすればいいんでしょう?」

帰りの電車内。

行きに比べて人の少ない車内で琉奈がぼつりと呟いた。

琉奈自身はあまり実感は湧かないが、それでも自分が他人と違う能力を得てしまったのは事実だ。

果たしてこれから自分はどうしていくべきなのか、この能力とどう付き合っていけばいいのか、まだ掴めずにいた。

「無理にその力をどうこする必要はないと思うよ」

隣に座る誠一が優しく語りかける。

「琉奈ちゃんはやっとトコヨノ国から解放されたばっかだったんだから、無理してまたトコヨノ国に関わる必要なんてない。琉奈ちゃんは久留井の人間じゃないわけだし」

「それはそうですけど……」

「今日行ってみて分かったと思うけど、うちの一族って結構閉鎖的だから、琉奈ちゃんが巫女の力を得たからってみんながみんな歓迎するとは思えないしさ」

苦々しく、吐き捨てるように言う誠一。

彼の横に座る彰は、現実から視線を逸らすように目を伏せている。誠一の言う通りなのかもしれない。

今日、久留井家であったことを思い返し、琉奈は胸中でひとりこちた。

大きな屋敷も、中にいる人々も、琉奈の日常とは違う、異質な世界に住んでいた。

もし今後、自分が巫女として能力を役立てていくなれば、本家の人々とも関わることになるだろう。

それは自分にとっていいことではないような気がした。けれど、もし自在にトコヨノ国へ行けるようになれば、誠一たちの力になれるかもしれない。

トコヨノ国という、異世界で戦う彼らの力に、自分が　。

琉奈、誠一、彰の三人を雨雲のように重く垂れ込めた空気が包む。それを打ち破ったのは、突然鳴り出した電子音だった。流れるメロディは『津軽海峡冬景色』。

レトロな着信メロディを奏でる携帯電話の持ち主は、彰。

「なんでその曲だよ。つーか、マナーモードにしたらかなきゃダメだろ」

誠一に注意され、「すみません」と殊勝に謝りつつ、彰は鞆の中から携帯電話を取り出す。

「あれ？ お前、いつの間にスマホにしたの!？」

演歌を流し続けるスマートフォンを自慢げに掲げ、操作する彰。

「メールか。……げ、野乃さんだ」

げんなりした顔で彰が呟く。

野乃という名前を聞いた誠一もまた、心底嫌そうな表情を浮かべる。

「あの、野乃さんって誰なんですか？」

「……由香理さんの娘」

疲れきった表情で答える誠一。

琉奈はなんとなく誠一が嫌な顔をしている理由を察し、「ああ……」と漏らす。

「由香理さんにそっくりでさあ。自分は特別だって考えがちで、自己中で。親類じゃなかったら関わりらないタイプだね。関わりなきやいけないのがホント残念。んでもって、祥ちゃんのが大好きなの」

「祥吾くんの方はどうなんですか？」

「祥ちゃんも苦手なタイプだと思うけど、邪険にはしてないよ。優

しいからね、祥ちゃん。俺だったら蹴飛ばしてやるね。まあ、俺は嫌われてるからいいんだけどさ。つーか、彰はいつの間にあいつとメアド交換したわけ？」

「交換したわけではないですよ。今日、父さんのところに行ったら鉢合わせして、強制的にメアドを奪取されたんです」

答える彰はきつく顔を顰めていて、眉間にはたくさんの皺が刻まれている。

「そりや大変だったなあ。で、メールには何て？」

「ええつと……要約すると、帰りの挨拶をしなかったことに対するお叱りと、祥吾兄さんを連れてこなかったことに対する文句ですね」

「何様だよ、あいつ」

誠一が言い捨てる。

どうやらよっぽど野乃という女の子を嫌っているようだ。

「何をどう考えたら祥ちゃんが本家に来るって思うのかね？」

「あの人のことだから、自分のためになら来てくれると思ってるんじゃないですか？」

「おめでたい思考回路だな。生きるの楽そうで羨ましいよ」

誠一と彰の辛らつな物言いに、琉奈は珍しいものを見た気分になる。

「……あつ、琉奈ちゃん！俺たちいつもはこんなこと考えないからね！？」

「そ、そうですよ！誤解しないで下さいね！普段は至って善良な一市民なんですよ僕たち！ていうか駅に着きましたよ！ちゃんと送っていきますからね、アス力先輩！」

恥部を見られたかのように慌てふためく兄弟の姿に、琉奈は思わず苦笑した。

琉奈を自宅へ送り届けた誠一と彰が帰宅したのは、夜九時を回っ

た頃だった。

「お帰り、二人とも」

二人を迎え入れたのは、自宅で休日を過ごしていた次男の祥吾だ。
「今、恭子さんが夕飯の支度してるよ。今日は恭子さんのカレーライスと、俺が作った鶏肉の炒め物だよ」

「ホントですか！？」 嬉しいなあ。僕、ちょっと母さんのところに行ってきますね」

彰は靴を脱ぎ、足早にキッチンへと駆けていく。

「ちゃんと手洗ってうがいしろよ……」 っ て聞いてないな、あいっ

やれやれ、と言わんばかりに誠一は頭をがしと掻く。

「ところで祥ちゃん」

「何？」

「俺、カレー大好物」

「？ 知ってるけど」

「彰は祥ちゃんが作ったものが好きじゃん」

「まあ、そうだけど」

「今日の夕飯、祥ちゃんがリクエストしたでしょ？」

「……うん」

祥吾の返答を聞いた誠一は、おもむろに膝で祥吾を蹴った。

「っ！ ちょっと、痛いんだけど」

「ばか」

「はあ！？」

「兄弟に気イ遣ってんじゃねえよ」

「……！」

祥吾は目を見開き、不機嫌になった兄を見つめる。

「祥ちゃんは普段から気イ遣ってたんだから。俺らに対してまで遣ってたら気がなくなっちゃうじゃん」

「なくなるって、回数券じゃあるまいし」

「ものの例えだよ、例え！ 俺が言いたいのは」

「……分かつてるよ。ありがと、兄貴」

祥吾が柔らかに微笑む。その姿に、誠一は安堵の溜息を零す。

「それと、一応報告。琴子さんも啓太も元気そうだったってさ」

「そっか。なら良かった」

「ん。じゃ、早くリビング行こうぜ。俺、腹減ったわ」

「今日の炒め物、超美味しいよ」

自慢げな祥吾に、「そりゃ楽しみだ」と誠一が笑った。

「母さん」

忙しくキッチンで夕食の準備をしている恭子の背に、彰が声をかける。

「あら、お帰りなさい、彰。今日はカレーよ。そうそう、祥吾ったら酷いの。私が干し柿入れようとしたら全力で止めるの。いい出汁が出て美味しくなると思っのに」

「……それは祥吾兄さんが大正解だと思いますけど。それより、聞きたいことがあるんです」

「何？」

振り返った恭子の目に映ったのは、いつになく真剣な目をした息子の姿。

つられて恭子も真顔になる。

「母さん、僕……女の兄弟っていますか？」

「」

恭子は彰の問いの真意を掴みかね、小首を傾げる。

「……妹が欲しいの？」

「！ち、違いますよっ！」

顔を真っ赤にして否定する彰を恭子が鼻で笑う。

「そうじゃなくてですね……何て言えればいいんだ、もう」

「何？向こうで何かあったの？」

「はい……。今日、トコヨノ国に行ったんですけど、そこで会った老婆の魂に言われたんです。僕とそっくりの顔した女と会ったこと

があるって」

「……は？」

恭子は首を傾げる角度を深めた。

「言っておくけど、私はトコヨノ国に行ったことないわよ？」

「知ってます。ていうか、そもそも僕はどちらかと言えば父さん似ですし。でも、父さんは男だし。意味分らないんですよ」

「ホント分らないわね……。あまり厄介なことにならなきゃいいけど」

心配する恭子に「そうですね」と答え、彰は嘆息した。

深縁（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

不平穩

2 - 8

「琉一奈ー！」

翌日。月曜日。

教室に入るなり、友人の松下綾が琉奈に詰め寄ってきた。その顔は怒りで満ち溢れている。

綾の怒りを買った覚えのない琉奈は困惑しつつ、「落ち着いて、綾」と友人を宥める。

「ごめん、なんでそんなに怒ってるのか全然分かんないんだけど……」

「昨日！ 誠一先輩と出かけたんだって！？」

「え？ あ……うん。調べものしに一緒に」

「あたしが誠一先輩のこと好きだって知っててなんでそんなことすんの！？ 酷くない！？ 二人で出かけるなんて、それでも友達なの！？」

「二人って、違うから！ 彰くんも一緒だったから！！」

綾の怒りの炎を鎮火すべく、早口でまくし立てる琉奈。

琉奈の弁明に綾は目を点にする。

「……二人きりじゃなかったの？」

「違う違う！ あたしと先輩と彰くんの三人！」

「……ホントに？」

「先輩か彰くんか、なんなら祥吾くんに確認取ってくれていいよ。マジで先輩と二人きりじゃないから」

力説する琉奈に綾もようやく納得し、「それならいいけど」と胸を撫で下ろす。

「二人きりだったらちゃんと綾に言うよ」

「そっか。でも三人でも誠一先輩とあたし抜きで出かける時は教え

てよね。抜け駆けされちゃたまないし」

「抜け駆けって……。友達が好きな人を好きになったりしないよ」
苦笑している琉奈の言葉を綾は「甘い！」という力強い一言で一蹴する。

「恋ってのはね、相手がどんな人だろうと、気付いたら落ちちゃってるもんなの。例えば相手が身分の差がある人だろうと、テレビの向こうでしか会えないアイドルだろうと、友達との好きな人だろうとね」

「そういうもんなの？」

「そういうもんなの！」

琉奈は「ふうん」と、納得している成分と納得していない成分を半分ずつ含んだ呟きを漏らした。

「ずい分賑やかだね、二人とも」

遅れて登校してきた祥吾が琉奈と綾に声をかける。

「あ、おはよう、久留井くん」

「おはよう。ごめんね、うるさくて」

「おはよ。いいんじゃないかな、二人ともいつも明るくて」

微笑みかける祥吾。その瞬間、星のように瞬く光が無数に飛び散ったように琉奈と綾の目に映った。

何故か照れてしまった二人は「あ、ありがとう」と口ごもりつつ言う。

「なあに朝から殺し文句炸裂させてんだよ、久留井」

三人の会話に新たな声が割って入る。

声の主は、朝の部活を終えたばかりの秋川浩太だ。

浩太に睨まれた祥吾は肩を竦める。

「殺し文句って……。俺は思ったことをそのまま言っただけなんだから？」

「それがダメなんだよ。久留井はただでさえ顔で得してんだから、せめて言うことはもっと気イ遣ってくれよ。俺に不利じゃなか」

褒められているのか貶されているのか判然としない浩太の台詞に、

祥吾が苦笑する。

「不利って何なの、浩太？」

顔を覗き込みながら尋ねてくる幼馴染に、浩太はやや顔を紅潮させつつ「何でもないっ」とそっぽを向く。

さっぱり事情が分かっている様子で、琉奈に、祥吾と綾は「鈍感さもここまできると清々しいな」と内心呟く。

祥吾と浩太は以前、琉奈のトコヨノ国関連の件を解決する際に協力し合い、浩太は祥吾を敵視するのをやめていたのだが、事件以降、琉奈が祥吾のことを名前で呼ぶようになってから、再び祥吾を勝手にライバル扱いするようになった。

とはいえ、祥吾はほとんど相手にしていないが。

「あ、久留井くん。今日の放課後、お願いね」

「あー……あれかあ。うん、こつちこそよろしく」

「放課後って何？」

小首を傾げる琉奈に、綾は不敵な笑みを浮かべる。

「校内新聞の特別企画で、学内のプリンス&プリンセスを決めようっていうのが持ち上がったの！ 新聞部が周囲の意見プラス独断と偏見込み込みで、中等部と高等部から合わせて、男女それぞれ六人候補に出して、メールで投票してもらって一位を決めようっていうで、候補者には事前の新聞に載せるインタビューをお願いすることになってて、それが今日なの」

「へえ、そんなことしてたんだ、新聞部。ていうか、祥吾くん選ばれたんだね」

「うん。正直、こういうのはちょっと苦手なんだけど」

「そうなの？ 同じように選ばれた誠一先輩は結構ノリノリで、さつきも「インタビューではよろしくね」ってメールが来てたけど」

綾の言葉に琉奈と祥吾は顔を見合せ、思わず吹き出してしまう。

その横で浩太が嫉妬の炎を燃え盛らせているが、二人は全く気付いていない。

「ちなみに、中等部から彰くんも選ばれてるの。インタビューのお

願いしに行つた時に超渋い顔されたけど」

「彰くんの渋い顔……」

「めっちゃ顔に皺寄つてそうだね、あいつ」

彰の超渋い顔を想像し、今度はお腹を抱えて笑い出す琉奈と祥吾。その様子を涙目でじつと見つめる浩太の姿に、綾はもらい泣きしそうになってしまった。

「なあんだ、じゃあ結局俺たち三人とも選ばれてんだ」

昼休み。低く雲が垂れ込める灰色の空に、久留井誠一のつまらなそうな呟きが響いた。

ここ最近、誠一、祥吾、彰の三兄弟は琉奈、綾と共に屋上で昼食をとっている。

青空の下で食事をするのが思いのほか気持ち良かったのと、食堂は人が多く、落ち着いて食事ができない、というのがその理由なのだが、今日は朝から太陽が分厚い雲に邪魔されて顔が出せない、生憎の空模様となっている。

「せっかく祥ちゃんと彰に自慢しようと思つてたのに」

不満げに呟きつつ、誠一はナポリタンとカルボナーラを挟んだ、パスタミックスドックを頬張る。

「残念だったねえ、兄貴」

「すみません、僕もハンサム認定されてしまいました」

弁当に箸をつけつつ、全く悪びれることなく謝る祥吾と彰。

誠一はそんな弟たちを見て、フン、と鼻を鳴らす。

「先輩はもちろんですけど、祥吾くんも彰くんも選ばれないわけないじゃないですか。みんなカッコイイんですから」

「それはそうかもしれないけどさあ。つまらないじゃん、三人とも選ばれるなんて」

「でも、決戦はこれからですから！　きつと誠一先輩が一番ですよ

！」

拳を握り、力説する綾。

その言葉に、荒々しくパンに歯を立てた誠一の目が不敵に歪む。

「にしても、新聞部も頑張るよね。準備とか大変なんじゃない？」

「大変は大変ですけど、部としては楽しい話題を提供して、学校を盛り上げていきたいんです。あ、そうそう。これも新聞部情報なんですけど、明日、高等部の一年A組に転校生が来るらしいですよ」

「転校生？　また来るんだ。でも、一年生じゃ誰も一緒じゃないね」

高等部二年A組の琉奈の言葉に、同じクラスの綾と祥吾、三年B組の誠一、中等部の三年A組の彰がそれぞれ頷く。

「でも、もうクラスまで分かるんだ。新聞部の情報って早いね」

「それもあるけど、うちの学校って試験結果でクラスが決まるから、すぐ分かるんだよね」

綾の説明を聞き、祥吾と誠一は「そうなの！？」と目を丸くする。

一方、彰は知っていたようで、驚いている兄たちを見て嘆息する。

「てつきりランダムにクラス分けされてるんだって思ってた」

「クラスは全学年試験結果で決まるんです。誠一先輩たちは多分、編入試験の結果ですね」

「なるほど、そんで俺はB組で……」

そこまで口にしたところで何かに気付いたらしい誠一は、一瞬目を大きく見開いたかと思うと、急に表情を曇らせ、肩を落とした。

「気に病むことはないですよ、誠一兄さん」

「そうだよ、兄貴。一人だけB組でもいいじゃん」

誠一が落ち込んだ理由　自分以外全員A組　に気付いた祥吾と彰が兄の方を優しく叩く。

慰められてしまった誠一は、「どおせ俺はB組だよ。つか、B級品なんだよ」といじける。

「て、転校生は男子なの？　それとも女子？」

「女子らしいって話だよ」

慌てて話題を変えた琉奈に綾が答える。

「まあ、どんな子が来ようと、あたしたちには関係な……あ」
話している途中、綾がおもむろに視線を天へと持ち上げる。
琉奈たちもつられて空を見上げた。

「！」

琉奈の額に一粒の水滴が降ってきた。雨だ。

そうこうしているうちに空は本格的に泣き出し、涙の量を次第に増やしていく。

五人は急いで広げていた昼食を片付け、屋上から退散する。
今日雨が降るなんて、天気予報で言ってなかったのに、
屋上から走り出しながら、琉奈は胸中でひとりごちた。

不平穩（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

「そういえば、さっき話しそびれたんですけど」

放課後。新聞部が企画した、『学内のプリンス&プリンセス決定戦』のためのインタビューを行うために呼び出された、新聞部の部室前の廊下で久留井彰が口を開いた。

「何？」

「どうかしたの、彰？」

側にいる兄の誠一、祥吾が尋ねる。

「本家に行った時のことなんですけど。僕、アスカ先輩と一緒にトコヨノ国に行ったんです。先輩に本当に巫女の方が能力が備わっているのか確かめるために」

「あれだろ、そこにいた老婆の魂から、お前そっくりの女に会ったことがあるって言われたって話だろ？ それなら昨日、俺たちも恭子さんから聞いたけど」

話のショートカットをしようとした誠一だったが、彰は「それもあつたんですけど、違うんです」と否定し、話を続ける。

「僕は老婆が攻撃してきたので応戦していたんですけど、途中で周囲の風景が変わったんです」

「風景が変わった……？」

自分の言葉を反芻する祥吾に、彰は「ええ」と頷き、更に続ける。
「具体的に話すと、老婆の魂が造り出した森林が、学校の教室に変わりました。こんなこと、僕は今まで体験したことないんですが、兄さんたちはありますか？」

彰の問いかけに、誠一と祥吾は首を横に振る。

「んなこと一度もないよ。なあ、祥ちゃん？」

「うん。トコヨノ国の魂が造り上げた空間を変えるなんて、よっぽ

ど強い魂の持ち主じゃないと出来ない芸当だと思うよ。彰、そんな力あったの？」

「ありませんよ、そんなの。それに、僕はあの時戦闘に集中していて、学校のことなんて全く考えていませんでしたし、学校が僕の一番印象に残ってる場所とも思えませんし」

「じゃあ……琉奈ちゃんってこと？」

誠一の一言に、祥吾と彰は沈黙する。

長きに渡ってトコヨノ国と関わってきた久留井の人間ではない飛鳥川琉奈。

彼女は久留井家の者ではないにも関わらず巫女 of 能力を得た上、トコヨノ国の魂を凌ぐほどに強い力を得たというのか？

だとしたら、何故彼女はそんな力を得ることになったのか？

一体彼女に何があったのか？

疑問に次ぐ疑問に頭を悩ませる誠一、祥吾、彰の三兄弟の元へ、

「お待たせしました！」と新聞部員の松下綾がやって来る。

「綾ちゃんも大変だねえ、みんなからインタビューなんて」

先ほどまでの険しい表情から一転、朗らかな笑顔で誠一が綾に話しかける。

「大変だけど、楽しいですよ。じゃ、せっかくなんで、三人は一緒にお願いします」

三人は綾に促されるまま新聞部の部室へと入っていった。

翌日になっても雨は降り止まず、自転車通学をしている琉奈や綾は、親に車で送ってもらい、登校した。

土砂降りの雨は絶え間なく降り続け、その雨音は時折、談笑している生徒たちの会話をかき消すほどに激しく教室中に響き渡る。

「琉奈琉奈琉ー奈！」

巨大な水溜りと化してる校庭を窓越しに見下ろしている琉奈に、

綾が教室に入ってくるなり声をかける。

「お、おはよ、綾……。朝から元気だね」

綾のハイテンションぶりに顔を引き攣らせつつ琉奈が言う。

「あのねっ、さっき職員室に行つて、転校生の顔を覗いてきたんだけど、めっちゃ可愛いの！ も、超っ絶美少女！！ アイドルみただった！！」

興奮気味に「なんでうちのクラスじゃないんだろう！？」と喚く綾を、琉奈は苦笑しつつ見つめる。

「朝からテンション高いね、松下さん……」

遅れて登校してきた久留井祥吾が言う。彼の表情は暗く、かなりのローテンションだ。

「おはよう。どうしたの、祥吾くん？」

「昨日、兄貴と一緒にうっかり徹夜でプレステやっちゃってさあ」

「なにになに、エッチなやつ？」

「なんでそうなるの、松下さん！？ ただのレースゲームだよ。兄貴はやり込んでるから上手くて、徹夜の変なテンションで挑み続けちゃって、気付いたら朝だよ……」

げんなりしている祥吾に、琉奈と綾は哀れみの目を向ける。

「きつと久留井くんも転校生の顔見たら元気になるよ！」

「転校生？ ああ、昨日話してた？」

「そうそう！ もうね、有り得ないくらい可愛いの！！ 目の保養になること間違いなし！！」

「へえ。けど、俺は目の保養は必要ないかな。アス力さんと松下さんで十分だよ」

穏やかな微笑みを浮かべて話す祥吾に、琉奈と綾は思わず赤面し、彼らの近くにいた女子生徒たちまで顔を赤らめ、祥吾に視線を送る。「何だよ、その女たらし発言」

いつの間にか朝練を終えて教室へやって来ていた秋川浩太が祥吾を睨む。

浩太の中で、祥吾は完全に敵に戻ったようだ。

「おはよ、秋川くん。最近また当たりが強いね……。ていうか、今の
が女たらし発言だと思ってることは、秋川くんはアスカさんや松
下さんが側にいても目の保養が必要なんだ？」

「え！？」

想いもよらない祥吾の逆襲に浩太がたじろぐ。

「そ、そんなこと……俺だって、アスカがいれば目の保養なんて…
…」

「浩太、キモい」

「あたしはぶさいくだつての！？」

更なる琉奈と綾からの攻撃でますます後退する浩太に、祥吾が思
わず苦笑してしまった。

嵐前（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

襲来

2 - 1 0

昼休みになっても雨は止まず、琉奈と綾、そして久留井三兄弟は、昼休み中は使用していないという新聞部の部室で昼食をとることにした。

「食堂だと人が多いし、俺ら三人が揃うと目立つちゃうみたいだから。でも、ホントに部室使っちゃっていいの？」

購買で予め購入しておいたパンが入った紙袋を机に置いた久留井誠一が言う。

「全然。他の部は結構部室でお昼食べたりしてますし」
「ちやつかり誠一の向かいの席を確保しつつ綾が答える。」

「確かに、浩太もバスケ部の部室でお昼食べたりしてるし」
「そうなんだ。どこで食べてるんだろうって思ってた」

琉奈が綾の隣に座り、その向かいの席に祥吾が座りながら話す。

「おおー！ 祥吾兄さん、今日もまた美味しそうなお弁当ですね！」
祥吾の隣に座る彰は弁当箱を開け、その彩り鮮やかな中身に目を輝かせる。

「いいなー、俺も購買パンをコンプしたらお弁当作ってもらおう」
「やだよ、面倒だから。兄貴は恭子さんに造ってもらいなよ」

顔を顰めた祥吾の提案に、「それはヤダ」と誠一も顔を顰める。

「恭子さんのお弁当、そんなにすごいですか？」

琉奈の問いに、三兄弟は揃って頷く。

「昔、タッパーいっぱいのおどんと、水筒いっぱいビーフシチュー持たされて、うどんにかけて食べるって言われたことがある」
渋い顔で話す誠一の体験談に、琉奈と綾は何も言えなくなる。

女子二人の沈黙を重く感じた祥吾の「じゃ、食べよっか」という言葉をきっかけに、口々に「いただきます」と告げ、一同は自分の

昼食に口を付け始める。

その時だった。

「見つけたっ……！」

突然、ものすごい勢いで部室のドアが開かれたと同時に、女の子の声飛び込んできた。

一体何事かとドアへと視線を向けた十個の目に映ったのは、高速で琉奈たちの方に向かってくる、二本の尻尾のようなものが生えた物体。

それは猛烈な速さで部室内を駆け、祥吾の体に突撃した。

ようやく動きを止めた物体の正体は、長いツインテールの小柄な少女で、強く祥吾に抱きついている。

「あ……あの……？」

「やっと見つけた！ 会いたかったよ、祥吾！」

祥吾の胸に埋めていた顔を上げ、彼を見上げる少女。

その顔を見た誠一、祥吾、彰は「はあ！」「ええ！」「なんで！？」と零す。

「やだ、転校生！？」

思わず叫んだ綾の言葉に、三兄弟は「「「なにい！？」」「」」と同時に声を張る。

「んふふ、びつくりした？ 野乃、祥吾に会いたくて、こっちに来ちゃった」

野乃、と名乗った少女は嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「彼女は佐虎野乃^{さけの}さん。伯母の由香理さんの娘で、俺たちの従姉妹」
動揺が落ち着いたらしい祥吾が琉奈と綾に紹介する。が、野乃は祥吾のことしか見ておらず、二人には全く関心がないようだ。

「こんな可愛い親戚がいるなんて、久留井家って美形しか生まれない家系とか？」

野乃を見つめながら綾が溜息混じりに尋ねる。

佐虎野乃は身長が一五〇センチあるかないかと小柄だが、顔も小

さい。しかし長い睫に縁取られた瞳は大きく、アイラインが引いてあるかのようにぱっちりとしている。ふくよかな唇が印象的な彼女は、可憐という言葉をそのまま人間にしたかのようなようだ。

「本とは前から転校するって決めてただんだけど、祥吾をびっくりさせたくて、ずっと内緒にしてたんだよ」

両耳の上で結った、腰の辺りまである長いツインテールを揺らしながら野乃が言う。

そっぽを向き、野乃から視線を逸らしている誠一はそれを聞き、はん、と鼻で笑う。

琉奈は野乃という名前と誠一の態度から、久留井本家からの帰りの電車内での会話を思い出していた。

自己中で、あまり関わりたくないタイプ。祥吾のことが大好きだが、誠一のことは嫌っている。

今見ている限り、誠一と彰が話していた通りの人物のようだ。

「野乃、こちらは俺のクラスメイトで、飛鳥川琉奈さんと松下綾さん」

祥吾に女子二人を紹介され、ようやく野乃は琉奈たちを見るが、その宝玉のように美しい瞳は冷たく、彼女たちに興味がないのは明らかだった。

「なんでこんな平民が祥吾と同じクラスで、野乃は違うクラスなの？」

愛らしい唇が零した「平民」という言葉に、琉奈と綾は絶句する。「学年が違うからに決まってるだろ。小学生でも分かるぞ、んなこと」

「うるさい、誠一」

「年上を呼び捨てにしてんじゃねえよ、ガキが」

誠一と野乃の刺々しい言葉の応酬に、久留井家の人間ではない琉奈と綾は口を挟むことができず、沈黙する。

「二人とも落ち着いて」

琉奈と綾の戸惑いを察し、祥吾が慌てて誠一と野乃の仲裁に入る。

誠一は苛立った感情を剥き出しにした顔のまま、荒々しく立ち上がる。

「どこに行くんですが、誠一兄さん？」

「教室に戻る。こいつが一緒じゃどんな飯も不味くなるから」

そう言い捨て、誠一は新聞部の部室を出て行ってしまった。

普段と全く違う誠一の態度に、琉奈と綾は特に綾は茫然とし、ただ誠一を見送ることしかできなかった。

「短気な男ね。品もないし。同じ久留井の人間として恥ずかしいわ」

「野乃。それ以上兄貴のこと悪く言ったら、今度は俺が怒るから」

「！ ごめんね、祥吾。もう誠一のことなんて何も言ったりしないから許して」

野乃は科を作り、祥吾に許しを請う。

祥吾は答えず、ただ深い溜息をつくばかりだ。

「あの……あたしたちも邪魔だったら教室に……」

「！ だめ、ここにいて！」「すぐ教室に戻って頂戴」「できればこのままいて下さい、先輩！」

すっかり居心地が悪くなってしまった琉奈の発言に、祥吾、野乃、彰が一斉に食いつく。

どう対応すればいいのか分からなくなり、たじろぐ琉奈に祥吾が、「アスカさん、お願いだからここにいて」

と、捨て犬のような瞳で懇願する。

琉奈と綾は見つめ合い、このまま部室に残ることに無言で決めた。

結局、その後も終始祥吾に引付く野乃の姿を見せられ、琉奈、

綾、彰はほぼ無言で昼食を済ませた。

やや疲れた面持ちで先に教室へと戻った琉奈と綾の携帯が同時に鳴り出した。

二人が携帯電話のディスプレイを確認すると、誠一からのメール

が届いていた。

開いたメールに書かれていたのは、途中で部室から出て行ってしまったことに対する謝罪と、その後を心配する文章だった。

「あんな態度取られたら、誰だって出て行くよ。ね、アス力？」

綾の問いかけに琉奈が深々と頷く。

佐虎野乃の態度は彼女の母親を彷彿とさせた。

三兄弟の伯母である、久留井由香理。

彼女は誠一に対して常に冷たく対応しており、その光景は琉奈も綾も目の当たりにしている。

そして、野乃の誠一に対する態度は由香理のそれと全く同様であり、年上に対する敬意の欠片もなかった。

彼女の態度には、琉奈も綾も傍らで見ていて気分が悪くなった。

「いつもにこにこ笑顔で優しい誠一先輩があんなにキレるってことは、あの子よっぽど酷い性格してんだろうね。ああもう、アイドルみたいとかはしゃいでた朝の自分を殴りたいよ！」

「あの子や伯母さんの先輩嫌いは、先輩のお母さんと関係あるらしいけど、見てて気分いいもんじゃないね」

「ホントだよ！ 誠一先輩、可哀想だよ……」

「……心配かけてごめんね、アス力さん、松下さん」

遅れて教室に戻ってきた祥吾が、琉奈と綾に開口一番謝った。

「！ 祥吾くん、大丈夫だった？」

「なんとかね。無理やり一年の教室に置いてきた」

心配する琉奈に祥吾が苦笑しつつ答える。

「まさかあいつがこっちに来るなんて……。先が思いやられるよ」

襲来（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

騒乱

2 - 1 1

祥吾の嫌な予感はずな中ずることになった。

帰りのホームルームが終るなり、祥吾は鞆を抱えて駆け出した。もちろん、再び祥吾を訪ねてくるだろう野乃から逃れるために。しかし、その努力も空しく、あと一歩で教室から脱出できる、というところで恐れていた事態に陥ってしまった。

「祥吾！ そんなに慌ててどこへ行くの？」

満面の笑みで二年A組にやってきた佐虎野乃に、祥吾は大きく肩を落とした。

その後姿を琉奈と綾が憐憫の情溢れる瞳で見守る。

「来るの早いね、野乃……」

「でしょ？ ホームルーム抜け出して、こっちのが終るまで待ってたの」

「抜け出してって……ダメだろ、そんなことしちゃ」

「だって野乃、早く祥吾に会いたかったんだもの。授業の合間の休み時間は短いから会いに来れないし。やっぱり、無理にでもこのクラスにしてもらえば良かった」

「それはどうしたって無理でしょ……」

溜息を漏らす祥吾。野乃はそんな彼を見てもなお、嬉しそうに微笑んでいる。

「何、その子つてもしかして久留井の彼女？」

側にある席に座っていた浩太が野乃を指差しつつ、祥吾に話しかける。

祥吾と野乃に興味を持っていたらしい他の男子二人も続いて、「すげえ可愛いじゃん」「何年生？」「どこで知り合ったんだよ？」などと問いかける。

無遠慮に話しかけてくる彼らの姿に、野乃の顔から笑顔が消え失せ、代わりに憤怒が現れる。

「祥吾や野乃にそんな口の利き方……無礼者ね」

「！ 野乃！！」

祥吾が鋭い叫び声をあげる中、野乃は自分と祥吾を取り囲んでいる男子たちに向けて、野球のバットを振るように大きく腕を振るった。

一瞬の間の後。

男子たちは突然、床に膝をついた。その呼吸は何百メートルも全力疾走した後のように荒く、大量の汗をかいている。

「こんのバカ……！」

男子たちの異変を目撃したクラスメイトたちが茫然とする中、祥吾は野乃の腕を掴み、共に教室から出て行く。

「浩太！ 大丈夫！？」

我に返った琉奈が浩太に駆け寄る。

浩太は突如わが身に起こったことに思考を停止させつつも、「あ……」と答える。

「なんか、急に体が……立ってらんないくらい、力、入らなくなっ
て……。あの女、一体俺らに何したんだ？」

「祥吾くんなら何か知ってるかも。行こ、綾」

琉奈が後ろについてきていた綾に声をかけ、彼女も頷く。

二人は急いで祥吾と野乃の後を追った。

「何てことすんの！？」

祥吾の怒号が駆け込んだ進路指導室に響き渡った。

野乃は両耳を人差し指で塞ぎつつ、「そんなに怒らないでよ」と祥吾を宥めるが、眼前の男の怒りが収まる気配はない。

「俺たちみたいな力を持たない人にあんなこと……有り得ないよ！」

「だって、あの人たちしつこかったし。だいたい、力がないのが悪いのよ。力があればあんなの簡単に防げるもの」

「言ってることがめっちゃくちゃ過ぎる……」

祥吾は疲れた顔で頭を抱える。

「祥吾くん、いる？……あ、いたいた」

不意に指導室と廊下を隔てるドアが開かれ、琉奈と綾がやってくる。

「アスカさん。松下さん」

「……あなたたちはお昼に会った人たちね」

野乃が琉奈たちに警戒の眼を向ける。

「祥吾くん、浩太たちは一体どうなっちゃったの？ この子は浩太に何を……？」

「野乃は秋川くんたちの魂の力を切り取ったんだ」

「魂の力を、切り取る……？」

「それってマズインじゃないの？ 秋川たちはどうなっちゃうわけ？」

青ざめる琉奈と綾を、「大したことないわ」と野乃が鼻で笑う。

「魂の力なんてそのうち回復するわ。そもそも、私たちのように魂の力を利用する術を知らない一般人は必要以上に溜まった魂の力を日常的に、無意識に放出してるし。私はそれを少し早めたようなものよ」

全く悪びれることなく、歌うようにスラスラと説明する野乃に、琉奈も綾も開いた口が塞がらない。

彼女は自分のせいで、例え短い間でも苦しむ羽目になった人間を見ても、何とも思わないのだ。

「野乃。秋川くんたちに謝りなさい」

「ええ！？ 嫌よ、悪いのはあっちじゃない」

「なんでそうなるかな……。能力使えない人に対して使うって言われてないの？」

「別に。みんなに話しても、きつと力が使えない方が悪いって言う

わ」

野乃の主張に、祥吾は「確かに本家の奴らはほとんどがそう言いそうだけど」と額を押さえる。

「あの、あたし、浩太の様子を見に戻るね」

祥吾と野乃の話が平行線で終わりそうな気配を察した琉奈が告げる。

綾も「あたしも！」と便乗し、二人が進路指導室を出ようとした刹那。

祥吾、野乃、そして琉奈の三人は悪寒がした。

微動だにすることすら躊躇われるほどの重圧にも同時に襲われ、三人は身動きが取れなくなる。

「？ どうしたの、琉奈？」

唯一人何も感じず、平然としている綾が琉奈の肩に手を置いた瞬間、進路指導室にいた四人の意識は別次元に飛ばされてしまった。

「アスカさん！ 松下さん！」

祥吾に名前を呼ばれ、琉奈と綾は目を覚ました。

二人は辺りを見回し、すぐに再びトコヨノ国に来てしまったことを実感した。

周囲の風景は先ほどまでいたはずの進路指導室ではなく、時代劇のセットのような江戸時代風の街並みに変化していたのだ。

「暴 ン坊将軍がいそうな世界ね」

「そう？ あたしは鬼 が浮かんだ」

「アスカ、池波 太郎好きなんだ？ 知らなかった」

「あの…… 渋い話してるとこ悪いけど、いい？」

江戸時代を舞台にした作品トークをしている琉奈と綾の間に、祥吾が呆れ顔で割って入る。

無言で前を指差す祥吾。 つられてその先へと視線を向ける琉奈と綾。

そこには光の塊が三つ浮いている。

宙に浮く三つの光　魂たちは次第に形を変え、やがて侍、日本軍兵士、着物の女性の形をそれぞれ取った。どうやら周囲の景色は侍の魂が影響しているらしい。

「この戯け者共め」

侍が差している刀の柄を握る。

「われらが守護せし子孫に何たる仕打ち！」

「此度の狼藉、許しませぬ！」

兵士がサーベルを抜き、着物の女性は袷から短刀を抜き出す。

「守護せしつて……そっか、この人たちは秋川くんたちの守護霊か」

「あ、守護霊つてやつぱいるんだ」

綾の呟きに祥吾が頷く。

「トコヨノ国に渡った先祖の魂のうち一つが子孫を守るために現世に戻って、守護霊としての役割を果たすことになるんだ。そして、力を使い果たして守護する力がなくなったら別の霊と交代する。彼らは今、秋川くんたちを守っている魂だよ」

琉奈と綾は改めて三つの魂　秋川浩太らの守護霊と対峙する。

彼らは誰もが怒りに満ちており、今にも琉奈たちを取って喰わんとせんばかりの殺気を放っている。

「参ったなあ……」

祥吾がぼつりと漏らす。

「や、やばいの？」

「戦えなくはないけど、良くて相討ちだね。守護霊つてのはそういう役割を任されるだけあって、力が強い霊が多いんだよ。まして相手は三人だし。説得できればいいんだけど……」

琉奈の問いに答える祥吾のこめかみから流れ落ちた冷や汗が頬を滑り、顎へと伝い落ちる。

いかに自分たちが苦境に立たされているか実感した琉奈と綾は返す言葉を失う。

「説得なんて、面倒なだけよ」

野乃が　この事態を引き起こした張本人が、結った髪の今朝氣

を指で弄りながら言い捨てる。

その一言に琉奈たちは絶句し、守護霊たちは怒りを倍加させる。

「野乃、お前今の状況が分かって」

「やつつけちゃえばいいだけの話でしょ」

現状を悪化させた野乃を叱責する祥吾の言葉を遮り、傲慢な口調で野乃が言い放つ。

刹那、野乃の右手が強い光に包まれたかと思うと、次の瞬間、彼女の背丈よりも大きな光の鎌が、その小さな手に握られていた。

「大丈夫よ」

鎌の出現に茫然としている守護霊たちに、野乃が砂糖菓子よりも甘い微笑を向ける。そして、地面を強く踏みしめ、

「あんたたちの代わりなんていくらでもいるか、らあああッ!!」
力一杯鎌を振るう。

突然の攻撃に対処できなかった守護霊たちは、三人いっぺんに大鎌に薙ぎ払われてしまった。

彼らはすぐさま立ち上がろうとするが、耐え切れず地面に崩れ落ち、やがて次々に霧散していった。

騒乱（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

矜持

2 - 1 2

気が付けば、琉奈たちは進路指導室に戻っていた。

侍たちの魂が倒されたことにより、トコヨノ国から脱出できたらしい。

「守護霊のわりに大したことなかったなあ。もっと手ごたえがあると思ったのに」

腰に手を当てて呟く野乃。先ほどまでその手が握っていた大鎌は既に消え失せている。

「彼らはただ、子孫を守りたかっただけだったんだよ」

「そうかもしれないけど、野乃や祥吾を殺そうとしたのよ？ 攻撃するのは当然でしょ。ああしくっちゃ野乃たちが殺されてたのよ」
「けど……」

「祥吾は甘いよね。そういうところも好きだけど」

野乃は組んだ両手を朱の差した自分の頬に寄せ、祥吾の側で囁くが、祥吾は険しい表情を崩さぬまま、野乃を見つめるばかりだ。

「あの……祥吾くん、浩太たちの守護霊は……」

沈黙している祥吾に、琉奈がおずおずと話しかける。

「ああいうのはいないとマズイって、前にテレビか何かで見たことがあるんだけど。浩太、大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、アス力さん」

視線を野乃から琉奈に移し、祥吾が答える。

「不測の事態で守護霊が消えてしまうことはたまにあるんだ。その場合、すぐに次来る予定の魂がトコヨノ国から来る。今回もきっとそうなると思うよ」

「……祥吾『くん』？」

野乃が琉奈と祥吾の会話に割って入る。

琉奈を見つめる大きな瞳には、ナイフに似た鋭い光が宿っている。美しい眼に射抜かれた琉奈は全身を縫いとめられたように動けなくなり、無言で野乃と視線を絡める。

「さつきから気になってたんだけど、なんで平民が祥吾を名前で呼んでるの？」

「俺がそう呼んでって言ったんだ」

抑揚のない声で問い詰める野乃に、祥吾が代わりに答える。

「どうして？」

「別にいいじゃん、友達なんだから」

「友達？ 平民風情と？」

「……さつきから聞いてりゃ、平民平民って……」

琉奈の後ろにいる綾が静かに呟く。力のこもっているらしい彼女の両肩は激しく震えていた。

「ちよつと他人と違う力があるからって何なのよ偉っそーに！ あんたなんて力がなければちよつと可愛いだけのただの小娘じゃない！」

額に青筋をたて、野乃を指差しながら、綾が怒りを爆発させる。

綾の発言に、野乃も不機嫌そうに眉を顰める。

「小娘……？ なんて無礼な奴なの、無力なくせに。あの男たちのように魂の力削がれたいわけ？」

「野乃！」

祥吾が野乃の脅しを制止する。

注意された野乃はばつが悪そうに俯く。

「野乃。せつかく教室まで来てくれたのに悪いけど、先に帰っててもらえる？」

「え？ でも野乃は」

「帰ってて」

野乃は不満げな表情を浮かべつつも、黙って進路指導室を後にした。

従妹の姿が見えなくなったのを確認した祥吾は肩を竦め、

「じゃ、秋川くんたちの様子見に行こっか」
と琉奈と綾に笑顔を向けた。

佐虎野乃から目に見えぬ攻撃を受けた秋川浩太他三名の男子は、琉奈たちが教室に戻って来た時にはすっかり元気を取り戻し、教室掃除に励んでいた。

「浩太！ もう大丈夫なの？」

「もうすっかり良くなったよ。五分くらいしたら普通に」

力瘤を作る仕草で元気になったことをアピールする浩太の姿に、琉奈は安堵の表情を浮かべる。

「久留井」

浩太が真剣な面持ちで、琉奈の後ろに立つ祥吾に声をかける。

「ちゃんと説明してくれよな」

「……うん、分かった」

祥吾は真摯な眼差しで浩太に答えた。

掃除が終わり、大半の生徒が部活や帰宅で去っていった二年A組の教室で、久留井祥吾は飛鳥川琉奈、松下綾、秋川浩太の三人に、佐虎野乃について話し始めた。

トコヨノ国の魂に干渉する能力を持つ久留井一族の一人、久留井由香理の娘であり、祥吾たち三兄弟同様、魂を散らす能力を有していること。

その能力を現世で用い、浩太たちの魂の力を削り、一時的に立てなくなるほどまでに消耗させたこと。

能力者ゆえのプライドと、他者に対する強烈な優越感を持っていること。そのため、極端に他者を見下す傾向があること。

そして、由香理同様、祥吾の兄である誠一を嫌っている一方、祥吾のことは好いていること。

これらのことを祥吾は身振り手振りを交えながら説明した。

「久留井くん自身はどうなの？ あの子のこと、好きなわけ？」

「恋愛感情はないよ。ただ、従妹だから蔑ろにはできないし」

「そういえば、前に先輩が、親戚じゃなかったら関わらないタイプって言うってた」

「兄貴は特にそうだと思うよ。兄貴も野乃も、お互いに嫌ってるし」

「さっきアスカから、あの子が誠一先輩を嫌ってるのは、あの子の母親と誠一先輩の母親が関係してるって聞いたんだけど、具体的にどういうことなの？ なんで先輩のお母さんは嫌われてんの？」

「簡単だよ。兄貴のお母さん 咲良さんが久留井の人間じゃないからだよ」

祥吾が告げたストレート過ぎる理由に、三人は返す言葉を失った。「俺の母親と、彰の母親の恭子さんは久留井の人間。だから兄貴のように伯母さんや野乃から嫌われてはないんだ。昔から久留井一族は近親婚が多くて。今も、遠縁との結婚が多いとはいえ、その風習は残ってる。きっと俺たちも、久留井の血筋の女性と結婚させられるだろうね。」

けど、咲良さんは久留井とは全く無関係の人だった。当時、父と咲良さんの結婚に反対した人間は多かったらしいよ。だから、伯母さんと同じ理由で咲良さんを嫌ってる人は他にもいると思うよ」

「……なんで、それでも二人は結婚したの？」

ぼつりと零した琉奈の問いに、祥吾が答える。

「恭子さんが生前の咲良さんに同じこと訊いたら、咲良さんは「好きになっちゃったから」って答えたんだって。咲良さんらしい、ストレートな答えだったって、恭子さん笑ってたよ」

天気はすっかり回復し、帰路は茜色に染まっている。

前日高校に置いていった時点のペダルをゆっくりと踏んでいる綾

が、「ねえ、アスカ」と声をかける。

「んー？」

「あたし、今の普通の家に生まれてきて良かったわ」

「あたしも。今の普通の家に取り取られて良かったよ」

「ね。自由に恋愛もできないなんて辛いし」

「だね。まして綾は恋愛体質だもんね」

太陽は燃えるような赤をその身に宿している。

コンクリートの山の中に埋もれつつあるそれは大きく、手を伸ばせば届きそうな気さえする。

「ねえ、アスカ」

「んー？」

「誠一先輩も、一族の人と結婚しちゃうのかなあ？」

「どうだろ？ 先輩はお母さんが一族の人じゃないから、大丈夫じゃないの？」

「でも、久留井くんは俺たちって言うてたし」

「綾、彰くんのこと忘れてるでしょ」

「あ」

「その当たりは分かんないけど……少なくとも、祥吾くんはそうなのかなあ？」

「どうだろうねえ？」

女子高生二人の、答えの出ない問答は片方の家に到着するまで続き、その後もなお、彼女たちの胸中で続いた。

矜持（後書き）

番外編的短編小説を書いてみました。

浴衣と神輿と寂しい笑顔 <http://ncode.syosetu.com/n8885v/>

転校初日の久留井三兄弟 <http://ncode.syosetu.com/n1198u/>

久留井三兄弟のお引越し <http://ncode.syosetu.com/n1078u/>

心闇

2 - 1 3

「んなにいいいい!？」

帰宅して間もない久留井誠一の絶叫が、夕食時を迎えた閑静な住宅街に響き渡った。

「近所迷惑ですよ、誠一兄さん」

あぐりと口を開け、一点を見つめたまま呆然としている兄を、弟である彰が窘める

「驚き過ぎでしょ、兄貴」

「だ、だってなんでこいつがここに!？ てか、なんで祥ちゃんも彰もそんな平然としてられんの!？」

混乱しきりの誠一。その切れ長の瞳に映っているのは、転校してきたばかりの従妹・佐虎野乃。

しかも彼女はルームウェアに着替え、ソファの上ですっかり寛いでいる。

「うるさいわよ、誠一。今日から野乃はここに住むの」

「はあ!？」

誠一はますます開いた口が塞がらなくなり、ショックのあまり、肩に下げていた鞆を床に落とした。

「祥ちゃんも彰も知ってたの？」

「知りませんでしたけど、なんとなくそんな気はしていたので」

「女子高生に一人暮らしさせる訳にはいかないでしょ、普通に考えて」

至って冷静に分析していた弟たちに誠一は絶句する。

「読みが甘いよ、誠一は。だからトコヨノ国の奴らに対しても、いつも直情的な攻撃しかできないのよ」

野乃が溜息混じりにマグカップいっぱいのアールグレイを啜る。

「そういうことだから、よろしく頼むわね、誠一」

キッチンにいる恭子が手を合わせる。

誠一はうなだれながらも「ハイ……」と答えるしかなかった。

「それにしても、誠一だけ帰りが随分遅かったわねえ」

五人で囲む食卓。

白い平皿に、大半を祥吾が作ったクリームシチューを装いながら恭子が言う。

「あー……実はさ、友達何人かと掃除の時間中にふざけてたら、すっかり備品壊しちゃって。化学の先生にがつつり搾られちった」

後頭部を掻きながら苦笑する誠一を、呆れかえった八つの目が凝視する。

「何やってんの、兄貴……」

「いやー、つい白熱しちゃって。弁償とかは大丈夫だったんだけど、先生が超っ怖かった。篠田先生つつたっけ、あの女の先生。目とかこんなだったもん」

中指で自分の目じりをつり上げながら力説する誠一に、「僕、あの先生が怒ったところ見たことないですよ」と彰が溜息を漏らす。

「なんて男なのかしら。久留井家の恥さらしね」

年下に罵られたものの、反論することができない誠一は小さく「うるせつ」と呟く。

「危ないことしちゃダメじゃない、誠一。今度そんなことしたら、誠一だけ一週間三食全て私の手料理にするからね」

「！ やめて、恭子さん！ それだけはやめてえ……！」

「つか、料理オンチの自覚あったんだ、恭子さん」

夕食後、三人に一部屋ずつ割り当てられていた子供部屋の部屋割りを、誠一・野乃・祥吾&彰、という割り当てに変更したこと、家

具などは野乃の荷物を届けに来た業者と既に行ったこと、そして、部屋割りの変更ついでに各人の部屋の簡単な掃除を行ったことが恭子の口から説明された。

説明が終わり、各々夕食の片付けや入浴準備、自室へ戻るためにダイニングを離れていく。

「誠一兄さん」

自分の部屋に戻るため、二階への階段を上っていた誠一を彰が呼び止める。

「何？ どうしたの、彰？」

笑顔と共に振り返る誠一。彼を見つめる彰の眼は穏やかなものではなかった。

「なんだよ、怖い目エして」

「どうしてそんなにはしゃいだんです？」

「んなこと言われても……。はしゃいじやったもんはしょうがないじゃん」

「はしゃいで、何を紛らわそうとしてるんですか？」

刹那、誠一の顔から笑みが消える。最初からそんなものは存在していなかったの如く。

感情の読めない、漆黒の瞳が彰を見つめる。

彰はその眼と正面から向かい合う。

「このところ、無理してますよね。今日のこと然り、プリンス決めの話のとき然り。本家から戻った頃からでしょうか。あの時、何があつたんですか？ 誠一兄さんは何から目を逸らそうと」

「彰」

誠一が彰の話を遮る。

たった一言。ただ名前を呼ばただけだった。

なのに、彰は話の続きを声として紡ぎ出すことができなくなった。抑揚のない声。

暗い瞳。

それだけで、先の見えない奈落の底に叩き落されんばかりの恐怖

に全身を支配された。

あと一歩でも進めば、闇の中へ落ちていく。

あの一言は、そんな己を制止するものだったのだと、彰はようやく理解した。

「やだなあ。俺、隠し事とか下手なの知ってんだろ？ 何でもないっば」

普段と変わらぬ口調で誠一が言う。

「……そうですか。ならいいです」

「そうそう。じゃ、俺は部屋に戻るから」

「分かりました。あ、誠一兄さん、母さんに見られたらまずそうな本やDVDは僕の部屋に避難させておいてあるので、後で取りに来て下さい」

「ん。サンキュ」

弟の気遣いに感謝し、誠一は再び階段を上り始める。

が、その途中でぴたりと立ち止まり、

「あいつ……いつの間に新しい隠し場所見つけたんだ？」
と首を傾げた。

「すみません、遅くなりました」

恭子と祥吾が夕食の片づけをしているキッチンに彰が戻ってくる。

「大丈夫だよ、もうほとんど終わったし。……彰、何かあった？」

眉を顰める兄に、彰は「何ですか？」と問い返す。

「汗すごいよ」

「あ、本当ですね」

祥吾に指摘されて初めて、彰は自分の体が汗に塗れていることに気が付いた。

「大丈夫か？ 何があった？」

「いえ、何でもないですよ」

祥吾がいくら問いかけても、彰は詳細を話そうとはしなかった。
話してはいけない気がした。

遭遇

2 - 1 4

翌日以降も、佐虎野乃による久留井祥吾への、久留井誠一曰くの襲撃は続き、その姿を見る度に飛鳥川琉奈や松下綾は心の中でエールを送った。

そうして日々は過ぎていき、日曜日がやってきた。

休日ではあるものの、特に出かける予定もなく、出かける気もない飛鳥川琉奈はソファの上に寝転び、ぼんやりとバラエティ番組を見ていた。

「琉奈、ご飯食べてすぐに横になつたら太るわよ」

「それって嘘らしいよ。右向きに横になると、消化の助けになるんだって」

「もう、ああ言えばこう言うんだから……」

母の溜息に琉奈が楽しげに笑った時、不意に飛鳥川家のインターホンが来客を知らせる電子音を鳴らした。

「あら、誰かしら？」

「お前が頼んだダイエツト食品が来たんじゃないか？」

夫の意地悪な一言に、「そんなもの頼んでません！」と反論しつつ、琉奈の母が応答する。

「はい。……ちょっと待ってもらえるかしら？　琉奈、あなたにお客さんよ」

「え？　あたしに？　綾？」

「うっん、久留井くんって男の子」

「男！？」

琉奈より先に、父親が素早く反応する。

父親は読んでいた新聞を折りたたみ、鋭い眼光と共に娘に問いか

ける。

「……彼氏か？」

「違うから。ただのクラスメイト！」

否定したにも関わらず、「ホントか！？ ホントにか！？」としつこく訊いてくる父を無視し、琉奈は玄関へと向かった。

飛鳥川家の門の前にいたのは久留井祥吾、久留井彰、そして佐虎野乃の三人だった。

「ごめんね、突然押しかけて」

側にやってきた琉奈に祥吾が謝る。

「ううん、構わないけど……。どうかしたの？」

「ちよつとアス力さんに訊きたいことがあって」

「訊きたいこと……？」

「とりあえず、あなたの家にお邪魔させてくれない？ こんな所で立ち話もなんでしょ？」

祥吾と琉奈の会話に、不機嫌そうな野乃が割って入る。

「野乃！」

「いいよ。確かにいつまでも外で話してるのもなんだし。上がった琉奈の言葉に甘えることにした祥吾と彰は申し訳なさそうに、野乃は澄ました顔で飛鳥川家の門をくぐった。

客人たちを自室に通し終え、飲み物などを用意するために一階へ降りてきた琉奈を待っていたのは、興味津々顔をしている両親だった。

「な……何？」

「琉奈、いつの間にあんな綺麗な子たちと知り合いになってたの！？」

「いったいどっちがお前の彼氏なんだ、琉奈！？」

娘に詰め寄る両親たち。その姿に、ソファで寛いでいる琉奈の兄は深い溜息を零した。

松下綾は駅の側にあるショッピングモールへと向かっていた。

ファッション誌で見つけたワンピースが欲しくなり、小遣いをはたいて買うつもりだった。

しかし、彼女の予定はすぐに変更されることになる。

「……あれ？」

モールの入り口までやって来た綾の視界に、一人の男性が不意に飛び込んできたのだ。

綾は彼の元に駆け寄り、その肩を叩いた。

「誠一先輩！」

「！ あ……綾ちゃん。おはよう」

肩を叩かれた瞬間、久留井誠一は警戒心剥き出しの表情を浮かべるが、自分に声をかけたのが綾だと分かった途端、その顔は柔和な笑みに変わった。

「奇遇ですね。朝から先輩に会えるなんて！」

「ホントだねえ」

心底嬉しそうに微笑む綾。

誠一もまた笑顔を浮かべてはいるものの、その表情はどこか固い。

「綾ちゃんは買い物？」

「はい！ 誠一先輩も買い物ですか？」

「いや、俺はちよつと遠出しに」

「どこに行くんですか？」

「えっと……その……」

答えを言い淀む誠一。

いつになく歯切れの悪い誠一の姿に綾は小首を傾げる。

やがて、誠一はジーパンのポケットにかけている手を強く握り締めた。

「綾ちゃん」

「あの、言いたくなければ言わなくていいですから」

「じゃなくて。もし良ければ、今日俺に付き合ってくれないかな」

「え？」

突然の懇願に、綾は大きく眼を見開いた。

「で、あたしに訊きたいことって？」

予め作り置きしておいたアイステイーを注いだマグカップを祥吾、彰、野乃に配りながら、琉奈が問いかける。

「ええ、それなんですけど。先週うちの本家でトコヨノ国に一緒に行った時のことなんですが」

「彰さんと一緒に行った時……って、お婆さんの魂と会った時だよね」

「え？ あなた、この前のが初めてじゃないの？」

いきなり話の腰を折った野乃を、「後で説明するから」と祥吾が窘める。

「……続けますね。その時のことなんですけど、僕たち、森林にいましたよね」

「うん。あのお婆さんが造った森林だよ」

「ですよ。でも、僕があのお魂と戦っている時、途中で風景が森林から学校の教室に変わったんですよ。あの空間にいた三人のうち、僕は何もしていませんし、驚いていたようなので、老婆にとつても予想外のことだったと思うんです。……先輩、何かしましたか？」

琉奈は顎に手を当て、当時のことを無言で思い起こしていたが、しばらくして、「あつ」と手を打った。

「あそこに行く前、トコヨノ国では魂の力が大きく作用するっていう資料をたくさん読んだの。で、彰くんが戦ってる最中、あたしの魂の力はうまく使えないのになって考えて。それで、あの空間につてきつと魂にとって次男の言い空間だろうから、それを変えちゃ

えばこつちに有利になるんじゃないかと思ったの。で、あたしと彰くんの共通点つてので咄嗟に学校が思い浮かんで、そうなるようにずっと念じてはいたけど。それかな？」

琉奈は淡々と話していたが、話の終わりに琉奈が祥吾たちに問い返した時、彼らは驚愕のあまり絶句していた。

「……えと、ヤバかった？」

「ヤバイなんでもんじゃないよ……」

静かに答える祥吾。そして彼は琉奈の手を取り、

「すごいよ、アスカさん！ トコヨノ国の魂が形成した空間を変化させるなんて！ そんなことができる巫女なんて今までいなかったんじゃない！？」

「ですね。それにしても、魂の力を肉体にも分散させている人間に比べて、魂の力を純粹に自分の力として使えるトコヨノ国の魂の方が、基本的にトコヨノ国の空間に干渉する力は強いはずなのに。アスカ先輩はどうしてそんなことができるのでしょうか？ 相当魂の力が強くないとできない芸当ですよ？ そもそも、先輩は久留井と無関係の人間なのに」

「魂の力の強化……ってもしかして、アスカさんの本当のご両親が関係してるんじゃない！？」

祥吾の指摘に、琉奈と彰が同時に「あ！」と声をあげる。

と、突然バンツと何かを叩きつける音がして、琉奈たちの思考を一旦停止させる。

音の原因は野乃で、彼女は話に加わることができない苛立ちから、テーブルを平手で叩いたのだ。

「ちよつと！ 何のことが全っ然分かんないんだけど！？ 分かるように説明してよっ！」

怒りを爆発させる野乃。そんな従姉妹に、祥吾と彰は顔を見合わせ、溜息をついた。

閉口

2 - 1 5

「はい、綾ちゃんの」

誠一が差し出した切符を受け取る綾。

切符には見慣れぬ地名と、四桁を超える金額が書かれていた。

「誠一先輩、ここ、どこなんですか……？」

「うちの本家がある所」

「本家って、この前アスカと一緒に行ったっていう？」

「うん。でも、今日は本家には用はないんだ」

色々突っ込みたいトコあるだろうけど、まずは聞いててね、と野乃に前置きし、祥吾が説明し始める。

「アスカさんは幼い頃からよくトコヨノ国に引きずり込まれてたんだ。原因は彼女の実の父親の魂。父親はアスカさんのことを憎んでいたから、トコヨノ国に引きずり込んで、殺そうとしてたわけ。でも、いつも実の母親の魂がそれを阻止して、彼女を現世に戻してあげてたから無事だった。」

少し前、俺たちがアスカさんの両親の魂を散らしたんだけど、その時に両親の魂がアスカさんに降り注いだんだ。その後、彼女はトコヨノ国への転移能力　巫女の力を得てしまった。俺たちは、それが彼女に降り注いだ両親の魂が悪さでもしてるのかなって思ってた。

でも、そうじゃない。多分、アスカさんの両親の魂は自ら進んでアスカさんの魂の中に取り込まれ、彼女の魂の力をより強いものにしてるんだよ。そして、長い間トコヨノ国に引き込まれてたことに

よる親和性が相まって、巫女の力を得て、更にトコヨノ国においても強力な魂の力を使って、空間を変化させることができるようになった。多分、そういうこと」

「なるほど……。それなら辻褃が合いますね」

右手の指先で顎を摩りながら彰が言う。

「つまり、実の両親の魂の、おかげって言えばいいのか所為って言えばいいのかわかんないけど、あたしは普通じゃない力を持つちゃったってこと？」

琉奈の台詞に祥吾が深々と頷く。

「そういうこと。単純な魂の力の強さだけで言えば、俺たちより上だと思うよ」

「信じられない……。そんなの野乃、聞いたことないよ!？」

困惑する野乃に、「俺だって聞いたことないけどさ」と祥吾は肩を竦める。

「でも、それ以外にアスカさんの身に起こったことを説明しようがないし」

「あたしの、本当の親の魂が……」

祥吾の推論についてそれぞれ沈黙し、頭の中で思案を巡らせている琉奈、祥吾、野乃に、彰が「あの、ちょっといいですか？」と切り出した。

「別件について、皆さんに相談と言うか、お願いしたいことがあるんですが」

二つ並んだ空席を見つけ、久留井誠一と松下綾はそこに腰を下ろした。

一度、大きく体を揺らした車両は次第にスピードを上げ、駅の水戸を走り去っていく。

「途中の乗り換えとかは俺が言うから」

そう言っただけ、いつもはお喋りな誠一は黙り込んでしまった。
綾もまた、口を閉ざすしかなかった。

本当は訊きたいことがたくさんある。

本家ではない、どこへ行くのか？

何をしに行くのか？

どうして自分を連れて行くのか？

何故、祥吾でも彰でもなく、自分なのか？

しかし、綾は訊くことができなかった。

小刻みに震える誠一の拳を見てしまったから。

街の風景でも、自分でもない、別の何かを常に見つめている誠一の瞳に気付いてしまったから。

飛鳥川琉奈、久留井祥吾、久留井彰、そして佐虎野乃の四人の姿は、複合型アミューズメントパークの一角にあるカラオケボックスの中にあつた。

彼らがこの場所に移動したきっかけは、

「本家からトコヨノ国に行った時に会った老婆の魂と、もう一度話がしたい」

という彰の申し出だった。

「ずっと気になってるんです。僕にそっくりな女というのが」

彰の吐露した言葉に、琉奈と祥吾は「あ……」と小さく零す。

一方、またしても事情を知らない野乃は「女って？」と首を捻る。

「前にトコヨノ国で彰が会った老婆の魂が、彰そっくりな女と話したことがあるって言ったんだよ」

「彰にそっくりって、彰、お姉さんか妹いたの？」

「いませんよ。母さんにも確認しましたし。だから気になってるんです。真相を知るには、もう一度あの老婆に話を聞いてみる必要があります」

あります。そのために、アス力先輩の力をお借りしたいんです」

「あたしの力……って、あ」

彰が言わんとしていることに思い当たったらしい琉奈に、彰は頷き、告げる。

「先輩の巫女で、僕をもう一度あの老婆がいる空間に連れて行って欲しいんです」

彰と、彼の願いを聞き入れた琉奈、そして同伴を申し出た祥吾と野乃の四人がわざわざカラオケボックスにやって来たのには理由がある。

琉奈の部屋でトコヨノ国への移動を行った場合、彼女の親が部屋にやって来て、彼らの以上に気付いてしまう可能性があるからだ。その点、カラオケボックスなら、他者に邪魔される可能性は低くなる。

とはいえ、店員などが入ってくる可能性もゼロではないので、

「野乃はこっちに残って見張って」

と命令してきた祥吾に、野乃は「はあ!？」と眉間に深く皺を刻んだ。

「何よ、野乃だけ仲間外れ!？」

「じゃなくて。何かあると困るから。……お願い」

手を合わせ、困ったような表情を浮かべながら小首を傾げる祥吾。可愛らしい仕草で惚れた弱みに付け込まれた野乃は、頬を紅潮させつつ、「し、仕方ないなあ」と了承する。

その姿に、彰は「祥吾兄さん、策士だな」と呟いた。

電車とバスを乗り継ぎ、松下綾が久留井誠一に連れられてやって来たのは、とある大学病院だった。

「大きな病院ですね」

「そだね」

気のない返事をする誠一。彼は慣れた足取りでエントランスをくぐり、多数の受付が並ぶ通路を通り、長椅子が大きく佇む待合所の前を通り過ぎ、エレベーターホールに到着する。

三機あるエレベーターのうち二機は上昇中で、一機は下降している。

「知り合いの人が入院してるんですか？」

「うん。五階で入院してるんだ。三年くらい」

数を減らし続ける階数表示を見上げながら、誠一が答える。

「誰なんですか？」

「幼馴染だよ」

6.....5.....4.....

「女の子、ですか？」

「うん。同年」

「お見舞いですか？」

「ううん」

3.....2.....1

「殺しに行くんだ」

苦悩源

2 - 1 6

閉ざしていた瞼を開けると、そこには一面、新緑の世界が広がっていた。

強烈な既視感を覚える琉奈と彰。

『おやおや……』

呆れ返った声が木々の合間から漏れ出した。

『またこの老婆に会いに来るなんて、随分と物好きな子達なのねえ』
琉奈たちの前に聳え立つ巨木の向こうから現れた、一人の老婆。

それは紛れもなく、先日琉奈と彰がこの空間で出会った老婆だった。
『氣が変わって、私に食べられに来たのかと思っただけど、どうやらそうじゃないみたいね』

老婆は見慣れぬ青年 久留井祥吾を舐めるように見上げる。

新たな戦力の出現。

それは以前彰と戦った際、やや劣勢だった老婆にとって、己の確実な敗北を認めさせるのに十分な要素だった。

「僕たちはあなたと戦うつもりは毛頭ありません。あなたを散らせるつもりはないんです」

彰が老婆に説明する。

『じゃあ一体何しにわざわざこんなところへ？』

「訊きたいことがあるんです。あなたが出会ったという、僕にそっくりの女性について」

『？ あの子は知り合いじゃないの？』

「僕には姉も妹もいませんから。いつ、どこでその女と会ったんですか？」

『かなり前のことよ。あの子は突然、私の森へやって来たの。他人と話すなんて久しぶりのことだったから、随分長話をしたわ。その

話の中で言ってたの。生者の魂を喰らい、自分の中に取り込むと、更に強大な力を得ることができると。

じゃあ、まずお前を食べてしまおうかしらって言ったら、あの子は笑って、「あなたに私は倒せないわよ」なんて言ってたっけ」

そう話す老婆もまた、楽しげな笑みを浮かべていた。

ほそだあおい
細田葵。

誠一はそう書かれたプレート横にあるドアをゆっくりと開ける。彼の顔は、緊張の糸に縫い付けてあるのかのように強張っていて、それを見た綾まで思わず身を引き締める。

病室へ足を踏み入れる二人。

白い室内。白いベッド。白い顔の少女。

「！ 誠一くん、来てくれたのね」

夥しい数のチューブにその身を絡め取られたまま眠っている少女のベッドの横に佇んでいる中年女性が誠一に気付き、歩み寄る。

「葵もきつと喜んでるわ。……あら、後ろの子は？」

見知らぬ少女 綾へと視線を向ける女性。

「あの……ええっと……」

「知り合いの子です。さっき、たまたま下で会ったもんで」

どう説明しようか困惑していた綾に代わり、誠一がざらりと嘘をついた。

茫然とする綾をよそに、「あら、そうなの。初めまして」と女性は綾に笑顔を向ける。

「おじさんはまだなんですか？」

「そうなのよ。こんな日に限って仕事が片付かなくて。けど、もうじき来るはずよ」

「おじさんが来たら、ですか」

「ええ、そうよ」

会話を交わす誠一と女性。

口を挟むことができない綾は、じつとベッドに横たわる少女を見つめていた。

雪のように白い肌の少女。

眉一つ動かさず、ずっと眠りに落ちている。

体中から伸びるチューブ。それらは全て、点滴や彼女のベッドの周囲に置かれている大小様々な機械と繋がっている。

どの機械がどんな役割を担っているかは分からないが、それらによつて彼女の命が現世に留まっているのは明らかだった。

「幼馴染なんだ」

一旦病室の外に出て、エレベーターホールのすぐ近くにある休憩スペースに設置されている椅子に腰掛けるなり、誠一が口を開いた。「うちの　本家のすぐ近くにあるマンションに住んで、小さい頃、俺たち三人といつも一緒に遊んだ。俺たちより男勝りで、明るくで、活発で、いっつも笑ってたよ。

そうしていつも一緒にいるうちに、だんだん葵のことを異性として意識し始めて。葵のこと好きかもって祥ちゃんと彰に話したら、二人も俺も好きだって言い始めてさ。そのせいでケンカしたこともあったよ。あれはびっくりだったね。でも、結局二人は身を引いてくれて、俺が葵と付き合うことになったんだ。中二の時のことだったかな。

付き合うつつつても、今考えるとママゴトみたいなもんだったよ。擬似恋愛っていうか、子供の恋愛だね。ただ毎日一緒に登下校して、たまに公園ですつと喋ったり、川原で遊んだり。それだけでも十分楽しかったし、幸せだった。

中三の冬だったよ、葵があんなふうになったのは。現世で悪さしてたトコヨノ国の魂を散らしたんだけど、完全には散らせてなくて、その魂は再結合した。でも、俺はそのことに気付かなかった。何日か後、再結合した魂は下校中の俺をトコヨノ国に引きずり込んだ。

一緒にいた葵ごときね。その魂はどうか、今度は再結合させることなく散らしたんだけど、俺がそいつと戦ってる間に別の魂が現れて…… 葵の魂を奪っていったんだ」

「魂を奪ったって…… でも、葵さんは死んでない、ですよ？」

「それが、どうやら葵の魂を奪った魂が、あいつの魂を保管してるみたいなんだ」

困惑する綾に誠一が言う。

「なんでかは分かんないけど、葵の魂自体はまだ無事なんだ。そういう趣味でもあるのか分らないけどね。ただ、肉体と魂が離れてしまってるせいで、葵は植物人間状態になってしまった。…… 全部、俺のせいなんだ」

「そんな……」

悪いのは誠一ではなく、彼らを襲った奴と、葵の魂を奪った奴の方。

綾はそう言うて慰めようと思ったが、自分の慰めなど何の役にも立たないこととあ、誠一の悲痛な表情を見てすぐに分かった。

誰が一番悪いのかなんて、誠一だって本当は分かっている。

けれど、全て自分が悪いと思わずにはいられないほどの罪悪感に囚われているのだ。これまでずっと。

誠一の表情はそんなことを無言で綾に語りかけていた。

「今日、これから葵の生命維持装置を止めるんだって。前、本家にきたついでに見舞いに来た時に聞いたんだ」

「…… え？」

「三年近く経っても変化がないってことは、もう一生このままだろうから、自分たちの我侭で機械使って生かし続けるより、静かに眠らせてあげた方がいい。葵の両親はそう考えたんだ」

「！ そんな……。葵さんの魂を取り返すまで待つてもらえないんですか！？ 魂を取り返せば、目を覚ますんですよ！？」

「かもしれない」

「だったら」

細田葵の病室へ戻ろうと立ち上がる綾。しかし、誠一は彼女の腕を掴み、制止する。

「もういいんだ、綾ちゃん」

「誠一先輩……」

長い日曜日

2 - 17

『あの子もお前も、ぞつとするくらいに綺麗な顔をしているね』

彰を見て、彼にそっくりだという女性と会った時のことを思い出したのか、老婆が懐かしそうに呟く。

「他には何か言っていますでしたか？」

「他に、ねえ……。何を言っていたかしら……。ああ、そういえば、なんだか現世に生きる人間を随分憎んでるようだったわね』

「人間を憎んでる……」

彰は老婆の言葉を反芻し、眉を顰める。

「誰かに殺された魂なのかな？ でも、それだと彰そっくりな理由が分かんないか」

後頭部を乱暴に掻きながら祥吾が言う。

「やっぱりそこだよ。なんで彰くんにそっくりなのかな？」

「僕に恨みを持つ魂の仕業、という線が今のところ有力でしょうが」「でも恨みなら、トコヨノ国経験からいって、兄貴の方が買ってると思うけど」

議論が行き詰まり、琉奈、祥吾、彰の三人は互いに顔を見合わせ、うーん、と唸る。

「……良ければ、その女と会ったところまで案内してあげようか？」
三人の輪に加われず、無言で立ち尽くしていた老婆が助け舟を出す。

「！ ホントですか？」

『さすがに会えはしないだろうけど。ここから少し歩いたところよ』
「そう言って、俺たちを罠に嵌めようってんじゃないだろうな？」

鋭い眼光を向けてくる祥吾に、老婆は呆れ顔で『今戦っても勝ち目がないことくらい、老いぼれでも分かるよ』と言い捨てる。

『ほら、こつちよ』

老婆の先導で森の中を歩き始める琉奈たち。
その時だった。

『あ？』

突然、周囲の木もろとも、老婆の体が腰から真つ二つに分断された。

あまりに唐突な出来事に、後ろを歩いていた三人は茫然と、倒れ行く木々と老婆を見つめることしかできなかった。

霧散し、形を失っていく老婆の魂。

その向こうに佇む一人の女性。

槍を持ち、不敵な笑みを浮かべる彼女の顔を見た彰が呟いた。

「僕？」

刹那、森林から眩い光が放たれた。

細田葵の父親が来るまでの間、久留井誠一は眠っている葵に付き添っていた。

時折、葵の母親と話し、葵の頬や額を、繊細な硝子細工にでも触れるようにそつと撫でた。

葵を見つめる誠一の瞳は様々な感情を帯びていた。

彼女に対する慈愛。助けられなかったという後悔。これからやってくる永遠の別れに対する悲しみ。彼女をこんな姿にした魂への、己への憤怒。

松下綾は病室の片隅で、そんな誠一の姿に胸を詰まらせることしかできなかった。

「ごめんね。こんなことに付き合わせちゃって」

帰路をひた走る電車内。誠一は綾にそう切り出した。

「怖かったんだ」

「怖いって、何がですか？」

「何もかもが」

そう答え、誠一は深く息を吐き出した。

「何回も思った。葵があんなことになった本当の理由をあいつの両親に話そうって。本当は転んで頭を打ったんじゃないかって、トコヨノ国の魂にあいつの魂を取られたんだって。けど、信じてもらえるか分からないし、信じてもらえたとしても、次に責められるのは俺だ。俺がしっかりしてりや葵はあんなことにならなかったのにつて、きつとあの人たちに責められる。それが怖かった。だから、あの時綾ちゃんを止めたんだ。」

あいつと二度と会えなくなるのも怖かった。今日起こる何もかもが怖かった。こんな兄貴の姿、祥ちゃんや彰にはみせたくなくて、強がつて一人で駅まで来たけど、すごく不安だった。だから、駅で綾ちゃんを見かけて、付いて来てくれるって言ってくれた時、すごくホッとしたよ。もし、恐怖と不安のあまり倒れそうになっても、寄りかかる場所ができたって。

本当にごめんね。今日一日、俺の事情に巻き込んで。こんなダメダメな先輩で」

俯く誠一。綾はそんな彼に明るく微笑みかける。

「……先輩はダメダメなんかじゃないです。それに、もしダメダメだとしても、そんな先輩のことも久留井くんや彰くんは好きだと思いますよ。だって、先輩たち三人つて、たまにこっちが嫉妬しちゃうくらい仲良しですもん」

「だったら嬉しいなあ。ありがと、綾ちゃん。……ごめん、ちょっと寝てもいい？ 安心したら、急に眠気が……」

「いいですよ。地元に着いたら起こしてあげますから」

「おかえり。収穫はあったの？」

現世に戻ってきた飛鳥川琉奈、久留井祥吾、久留井彰の三人に、一人カラオケボックスの中で留守番していた佐虎野乃が声をかける。待っている間、野乃は歌っていないかったようで、正面の大きなモニタには人気アーティストのプロモーション映像が流れている。

「……いた」

「？ 何が？」

「僕が」

目を見開いたまま答える彰。野乃は溜息混じりに「そりゃあんたは今いるわよ」と冷静にツツ込む。

「じゃなくて。彰そっくりの女がいたんだよ」

「！ 会ったの！？」

足らなかつた言葉を補った祥吾の説明に、野乃は思わず飛び上がる。

「会ったつつか、見ただけ。俺たちが会いにいったおばさんの魂散らして、少しだけ俺たちを見てた。で、気付いたら戻ってきてた」

「ホントに彰くんそっくりだったね。びっくりした」

しみじみと語る琉奈に、祥吾が頷いて同意する。

唯一その女性を見れなかつた野乃が「野乃も見えたかったのに！」

などと喚く中、彰が小さくひとりごちる。

「あの女、一体何者なんだ……？」

携帯電話のボタンを操作する指を止める綾。

隣で眠る誠一の頭が肩に凭れ掛かってきたのだ。

綾は誠一が熟睡しているのを確認し、そつと頭を彼のそれに寄せてみる。

小さき、力なく開かれている薄い唇から零れる寝息に、綾の心拍数が急上昇する。

が、それはすぐに急降下することになる。

「……ん、葵……」

眼前の唇が紡ぎ出した寝言に、綾は体を強張らせる。

再び携帯電話を操作し出した綾。

その唇はきつく噛み締められていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0556u/>

久留井三兄弟の非現実的な日常

2011年10月8日03時28分発行